

青森県埋蔵文化財調査報告書 第338集

# 三内丸山遺跡 XX

平成 13 年 度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第338集

# 三内丸山遺跡 XX

—第8次・9次調査報告書—

平成13年度

青森県教育委員会



配石を伴う土坑墓 (952土)



土坑墓確認状況



土坑墓確認状況



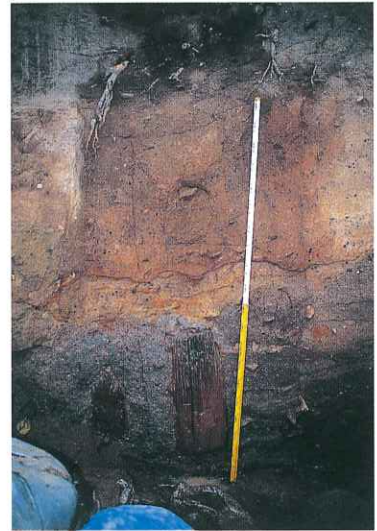
マウンドのある土坑墓 (953土)



配石をもつ土坑墓 (959土)



柱穴確認状況



木柱



掘立柱建物跡検出状況

口絵2 (第9次調査)

# 序

青森市に所在する三内丸山遺跡は縄文時代前期から中期にかけての拠点集落跡です。

平成4年度から開始した発掘調査によって、円筒土器文化を代表する、学術的に極めて重要な遺跡であることが判明し、青森県は三内丸山遺跡を貴重な文化遺産として保存し、広く活用をはかり、整備をすすめることを決定いたしました。その基礎資料を収集し、学術的解明を進めるため、発掘調査を継続的に実施しているところです。

平成9年3月には国史跡、そして平成12年11月には国特別史跡の指定を受けたところであります。

本書は、三内丸山遺跡の全体像を解明するため、平成9年度に実施した発掘調査の結果をまとめたものです。

調査の成果は、三内丸山遺跡の整備や学術研究に活用していく所存ですが、今後の埋蔵文化財の保護と研究に役立てれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施及び本書作成にご尽力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

青森県教育委員会

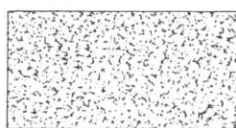
教育長 佐藤正昭

# 例 言

- 1 本報告書は、平成9年度に国庫補助を受け実施した特別史跡三内丸山遺跡の第8次・9次調査の発掘調査報告書である。三内丸山遺跡においては、遺跡保存後の平成7年度の調査開始から着手順に第1次、第2次調査…と呼称している。
- 2 特別史跡三内丸山遺跡の遺跡番号は01021番である。
- 3 報告書の執筆者名は、各文末に付した。
- 4 整理の方法及び出土遺物の分類については、「三内丸山遺跡 XI」(青森県埋蔵文化財報告書第251集)に記載されている。
- 5 挿図の縮尺は、各図毎に示している。なお、写真の縮尺は統一していない。
- 6 遺構図面の記載にあたっては、土器—P、石器・石—S、柱穴—P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>の略号を用いた。
- 7 資料の鑑定及び同定、並びに分析については、次の方に依頼した(敬称略)。  
石器・石製品の石材の種類鑑定 山口 義伸(青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さん室総括主幹)
- 8 本書に掲載した地形図(遺跡の位置)は、国土交通省地理院発行の2万5千分の1の地形図を複写したものである。
- 9 遺構・遺物の文・図中での表現は原則として次の様式・基準に従った。
  - (1) 遺構番号は一部を除いて発掘調査時のものを用いている。
  - (2) 遺構内外の堆積土の注記は、「新版標準土色帖」(小山、竹原1990)を用いた。
  - (3) 原則として、遺物には観察表・計測表を付し、出土地点、法量及び諸特徴を一覧できるようにした。
  - (4) 縄文原体は、山内清男「日本先史土器の縄紋」(先史考古学会 1979)を参考に分類し、記述はそれに従った。ただし、観察表では以下のように省略した。  
結節回転文—結回、単軸絡条体○類—単絡○類、多軸絡条体—多軸絡  
また表中では、縄文原体の回転文の場合は種類のみ、押圧文の場合は種類の後に「押」を付けている。隆帯上の施文文様は「隆帯」の後に括弧書きした。
  - (5) 石質は以下のように略称する。  
頁—頁岩、玉珪—玉髓質珪質頁岩、珪頁—珪質頁岩、黒—黒曜石、鉄—鉄石英、凝—凝灰岩、安—安山岩、流—流紋岩、粘—粘板岩、溶凝—溶結凝灰岩、軽—軽石
- 10 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室が保管している。
- 11 第8次・9次調査に関しては、本報告書がこれに先立つ全ての資料・報文等に優先する。
- 12 図中に使用したスクリーントーンは以下のものを表す。



地 山



焼土・石器磨面



柱痕跡・石器敲打痕



石器光沢

# 目 次

序	
例 言	
目 次	
第 I 章 調査目的と調査要項	1
第 1 節 調査目的	1
第 2 節 調査要項	1
第 II 章 調査方法と経過	
第 1 節 調査方法	6
第 2 節 調査経過	6
第 III 章 第 8 次調査	
第 1 節 調査の概要	8
第 2 節 検出遺構と出土遺物	11
第 3 節 土坑一覧	24
第 4 節 遺構外の出土遺物	25
第 IV 章 第 9 次調査	
第 1 節 調査の概要	30
第 2 節 検出遺構と出土遺物	32
第 3 節 遺構外の出土遺物	69
第 V 章 調査の成果と課題	88
特別史跡三内丸山遺跡発掘調査報告書一覧	94
写真図版	95
報告書抄録	126

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査経過

## 第1節 調査目的

三内丸山遺跡では、平成6年に保存が決定され、平成7年3月には遺跡整備のための青森県総合運動公園遺跡ゾーン基本構想が策定された。この基本構想を受け、県教育委員会では遺跡の学術的解明のための発掘調査を継続して行っており、平成7年度からは文化庁の補助金の交付を受け、国史跡指定に向けての範囲確認調査を実施し、平成9年3月には国史跡、平成12年11月には国特別史跡に指定された。

しかしながら、30数ヘクタールにおよぶ遺跡全体については、これまでの試掘調査で各種遺構が存在することは判明しているものの、集落の全体構造とその変遷、あるいは各遺構群相互の関係等、なお多くの課題がある。これらの課題を解決するための必要な調査であるとともに、中・長期的な保存、活用、整備計画の策定や推進のためにも、必要箇所について発掘調査を継続して実施するものとしている。

平成9年度の発掘調査は、新たに設置された専門家による三内丸山遺跡発掘調査委員会の検討により、集落の全体像と当時の生活環境の解明を課題として、第8・9・10次調査を行った。

第8次調査は遺跡北地区東側の台地平坦部から低地にかけての調査区域で、先年までの調査で約355mまで確認されていた土坑墓列と道路跡の東端の確認を目的とした。

第9次調査は、遺跡北地区北側の一段低い平坦面で、平成8年度の調査の第6次調査で検出した縄文時代中期後半の木柱周辺の遺構確認を目的とした。

(岡田 康博)

## 第2節 調査要項

### 1 調査目的

三内丸山遺跡の発掘調査を行い、集落の全体像を解明し、今後の保存・活用に資する。

### 2 調査期間

第8次調査 平成9年5月26日～7月25日

第9次調査 平成9年7月28日～9月10日

### 3 遺跡名及び所在地

三内丸山遺跡 青森市三内字丸山275-1 他

### 4 調査面積

第8次調査 560平方メートル



第9次調査 88平方メートル

5 調査主体

青森県教育委員会

6 調査担当機関

青森県教育庁文化課（現、文化財保護課）三内丸山遺跡対策室

7 調査協力機関

青森市教育委員会

8 調査員等

調査指導員

村越 潔 青森大学考古学研究所所長（現、同研究所顧問）

市川 金丸 青森県考古学会会長

調査員協力員

池田 敬 青森市教育委員会教育長

調査員

高島 成侑 八戸工業大学教授

山口 義伸 青森県立板柳高等学校教諭

（現、文化・スポーツ振興課県史編さん室総括主幹）

赤沼 英男 岩手県立博物館主任専門学芸調査員

9 調査担当者

青森県教育庁文化課（現、文化財保護課）三内丸山遺跡対策室

第8・9次調査

主幹 岡田 康博（現、文化財保護主幹）

主査 中村 美杉（現、文化財保護総括主査）

主事 齋藤 岳（現、文化財保護主査）

主事 小笠原雅行（現、埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）

主事 佐々木真理子（現、文化財保護課主事）

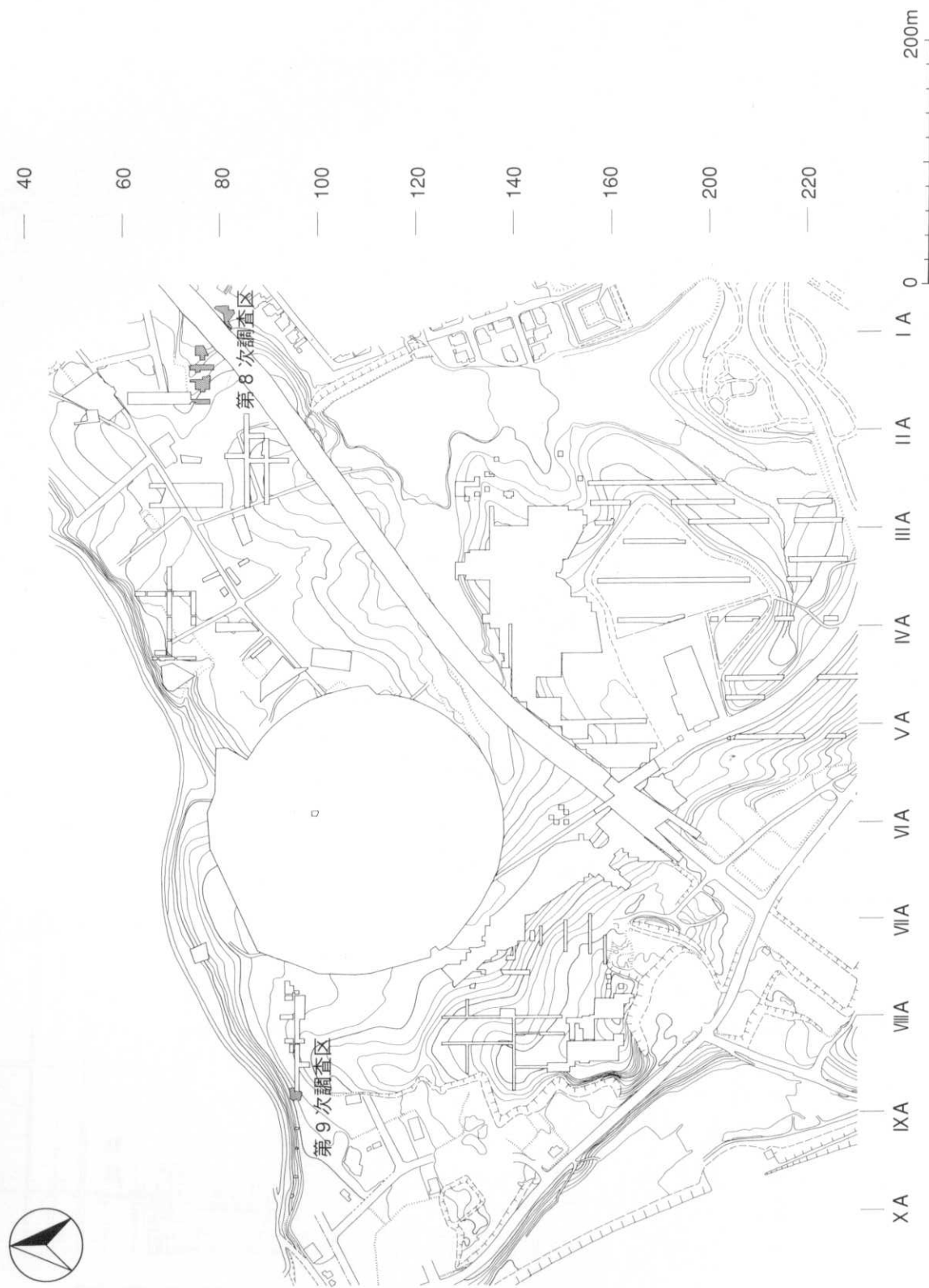
主事 葛城 和穂（現、埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）

調査補助員 本間 順子、土岐 耕司、若山真由美、漆畑 宗人、小鹿美香子

（岡田 康博）



1 図 遺跡位置図



2 図 調査区域図

表1 発掘調査一覧

年 度	調査地点と調査目的	調 査 主 体
平成4年度	野球場建設予定地本調査	県埋蔵文化財調査センター
	第6鉄塔地区本調査	
	第7鉄塔地区本調査	
	第8鉄塔地区本調査	
平成5年度	野球場建設予定地本調査	〃
	第6鉄塔地区本調査	
平成6年度	野球場建設予定地本調査	〃
	野球場取り付け道路建設予定地試掘調査	
	サッカー場建設予定地試掘調査	
	テニスコート建設予定地試掘調査	
	近野地区試掘調査	
平成7年度	第1次調査（北地区、集落の範囲確認）	三内丸山遺跡対策室
	第2次調査（北地区、貯蔵穴の範囲確認）	
	第3次調査（北地区、貯蔵穴の範囲確認）	
	第4次調査（北地区、土坑墓の範囲確認）	
平成8年度	第5次調査（南地区、集落の範囲確認）	〃
	第6次調査（北地区、低湿地の調査）	
	第7次調査（北地区、土坑墓の範囲確認）	
平成9年度	第8次調査（北地区、土坑墓と道路跡の範囲確認）	〃
	第9次調査（北地区、木柱周辺の遺構確認）	
	第10次調査（南地区、集落範囲と変遷の確認）	
平成10年度	第11次調査（南地区、集落範囲と変遷の確認）	〃
	第12次調査（北地区、低湿地有機質遺物と遺構の確認）	
	第13次調査（北地区、墓域の確認）	
平成11年度	第14次調査（北地区、環状配石墓の範囲確認）	〃
	第15次調査（北地区、遺物包含層の範囲確認）	
	第16次調査（北地区、竪穴住居跡の年代の確認）	
平成12年度	第17次調査（北地区、墓域の範囲確認）	〃
	第18次調査（北地区、集落範囲と変遷の確認）	
	第19次調査（北地区、掘立柱建物跡の精査と木柱取り上げ）	
平成13年度	第20次調査（北地区、遺跡整備に伴う環状配石墓と道路跡の範囲と年代の確認）	〃
	第21次調査（北地区、墓域との範囲と年代の確認）	
	第22次調査（北地区、竪穴住居跡及び粘土採掘穴などの範囲確認）	

## 第Ⅱ章 調査方法と経過

### 第1節 調査方法

調査区は、遺跡全体を網羅するように、平成4年度に設定したものにに基づき、20m×20mの大グリッドを設定し、さらに4m×4mの小グリッドを設定した。

各グリッドは、東から西へはローマ数字とアルファベットを組み合わせ、前者はIから順に、後者はAからTまで20グリッド分を付し、順次ローマ数字を繰り上げている。南北方向には1から順に算用数字を付した。また、呼称は北東の交点を用いた。グリッドの南北線は公共座標軸をもとにしている。ベンチマークは既設の工事中測量杭から引用し、必要に応じて原点の移動を行った。

基本層序は、平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の層序を基に、層位の認定を行った。土層には、上位から下位にローマ数字を付した。土色の注記に当たっては、「標準土色帖」を用いた。調査はグリッド・層単位で進めた。

遺構の精査は、遺構分布の確認を優先し、構築時期・性格の把握のため、条件のよいものを選び、精査することにした。精査は原則として二分法・四分法で行い、堆積土観察用のベルトを設け、土層を観察しながら進めた。土層には、上位から下位に算用数字を付した。遺構内出土遺物は、必要なものについては平面図・標高を記録した。平面図の縮尺は20分の1を基本とし、状況に応じて10分の1、その他とした。遺構番号は、平成4年度からの調査に引き続き、遺構の種類ごとに確認順に付した。

記録撮影用のカメラは、35mm判と6×4.5判を使用し、フィルムはカラーリバーサルとモノクロームの2種類を使用した。撮影は35mm判では、確認、堆積土の状況、遺物出土状況、完掘の各段階で撮影し、6×4.5判による撮影は、適宜行うことにした。また、デジタルビデオカメラによる撮影も行い、調査経過などを記録した。

(小笠原 雅行)

### 第2節 調査経過

第8次調査は、平成9年5月26日から開始した。前年度に検出した土坑墓列は、雑木林の中へ延びており、そこにグリッドと4ヶ所のトレンチを設定し、手掘りで表土剥ぎを行った。第I層除去途中に、土坑墓のマウンドの検出を目的として、各トレンチに1m×1mのベルトを設定した。6月上旬には土坑墓・道跡が確認され始め、遺構全体を確認するため部分的にトレンチを拡張した。また、平安時代の円形周溝にトレンチを設定し、マウンド・周溝の確認を行った。6月下旬、新たに設定したトレンチからも土坑墓が確認された。また、配石を伴うもの、偏平な礫が上面にあるもの、マウンドがあるものなども確認された。これらの精査を開始するとともに、旧都市計画道路の南側、遺跡東端にトレンチを設定することにした。しかし、現代の土盛りのため、重機での表土剥ぎを行うことにした。

7月上旬、遺跡東端トレンチからも土坑墓が確認され、土坑墓列の総延長は約420mになった。遺構の精査、地形測量などの作業を進め、7月25日には、一部の精査を残し、ほぼ作業を終えた。

第9次調査は、平成9年7月28日から開始した。グリッド・ベンチマークの設定を行い、前年度に埋め戻した深掘りトレンチ（第6次調査区）の埋め土を除去し、新たに西側に調査区を拡張し、表土剥ぎを行った。調査開始とともに第Ⅲ層に相当する遺物包含層から柱穴と考えられるピットが確認された。しかし、これらは二次堆積土を掘り込んでいるため、確認が難しく、当時の生活面からさらに掘り下げて確認を行った。9月上旬、遺構確認をほぼ終了し、9月10日、精査、写真撮影などを行い、第9次調査を終了した。

(小笠原 雅行)

# 第Ⅲ章 第8次調査

## 第1節 調査の概要

第8次調査は、平成8年度までに確認した土坑墓列の東端の範囲確認を目的とした。調査面積は約560㎡で、期間は5月26日から7月25日までである。

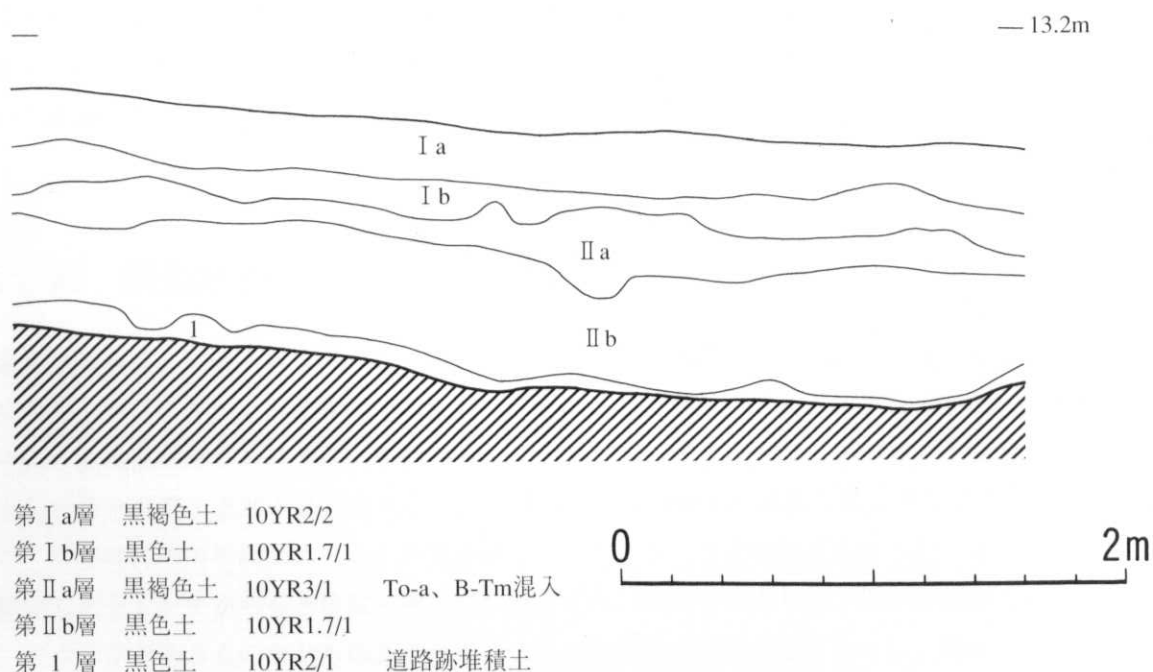
昨年度の調査で、土坑墓列は台地尾根筋から、緩やかに落ち込む谷へ向かって延びることが判明していた。そのため、谷の延長上から遺跡範囲東限までを調査対象とし、5ヶ所のトレンチを設定した。調査区は遺跡の東端であるとともに、舌状台地の先端部に当たる。標高は7～14mほどである。

調査区は谷地形になっており植林されているため、表土および第Ⅱ層が厚く堆積し、後世の攪乱もない。そのため、遺構の残存状況は良好であり、土坑墓の上部構造を知るうえで、貴重な資料が得られると考えられた。

また、平成5年度に青森市教育委員会で調査した、旧都市計画道路で検出された円形周溝の北側に、マウンド状の盛り上がりがあり、残存状況確認のため中心部から四方にトレンチを設定した。

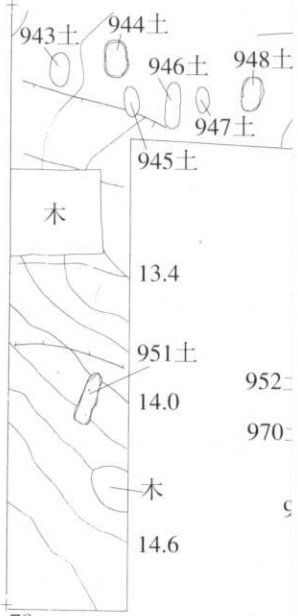
今回検出した遺構は、縄文時代の土坑（土坑墓）23基、道路跡1条、平安時代の円形周溝1基である。このうち、精査した土坑墓は9基である。出土遺物は、段ボール箱5箱分で、縄文土器（中期）、石器などである。

(小笠原 雅行)



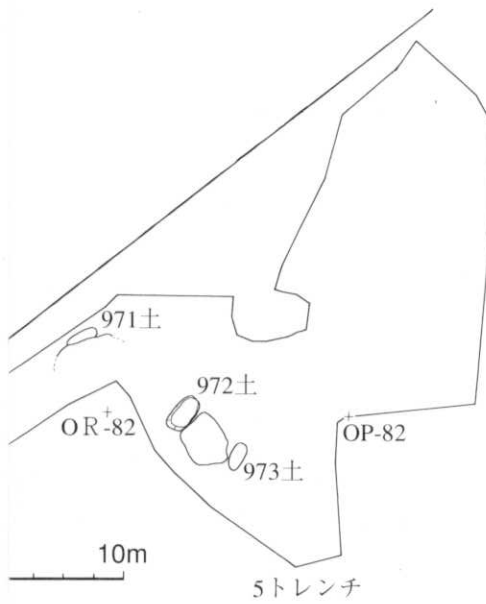
3図 基本層序

IO-73

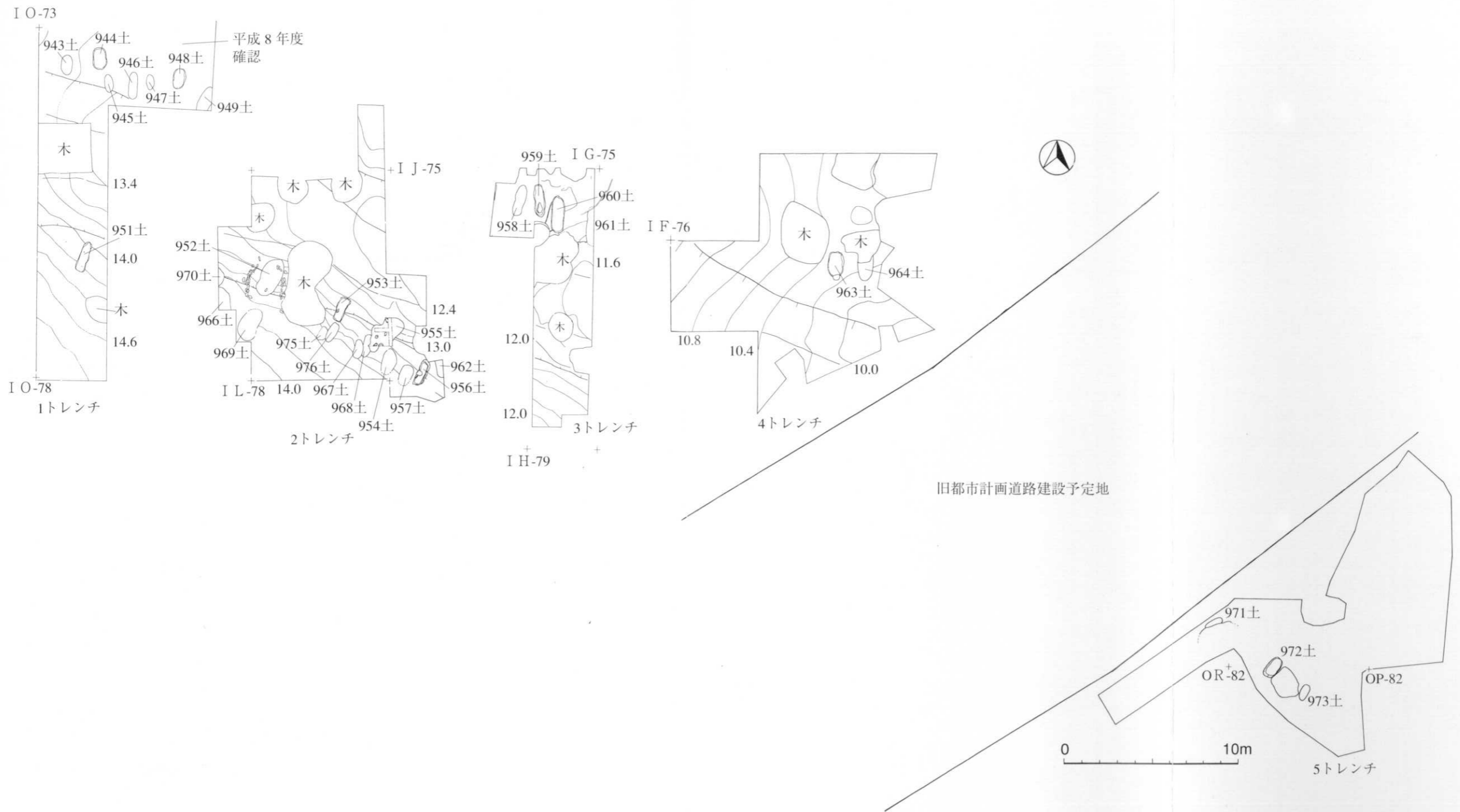


IO-78

1トレンチ







4 図 第 8 次 調 査 区 土 坑 配 置 図

## 第2節 検出遺構と出土遺物

### 1 縄文時代の遺構

#### (1)土坑

今回の調査で、土坑は23基検出された。いずれも長楕円形で、土坑墓と考えられるものである。これらは、(2)の項で記述する道路跡を挟んで、2列に分かれて分布する。また、長軸は道路跡とほぼ直交するように掘り込まれる。

この地点は堆積土が厚く、遺構の残存状況は良好である。第Ⅱ層（縄文時代中期末～平安時代）は黒色土で、それ以前の堆積土とは明瞭に区別できる。そのため、1 mごとに土層観察用ベルトを残し、土坑墓の上部構造を把握することも併せて目的とした。土坑墓は原則として長楕円形の掘り込みのみであるが、マウンドが観察されるもの（第953号土坑、第955号土坑）、遺構確認面に大型で偏平な礫が載るもの（第956号土坑、第959号土坑）、周囲に環状に配石を巡らせるもの（第952号土坑）もある。

今回の調査では、これら23基のうち9基の精査を行なった。以下、トレンチごとに精査した遺構及び確認面で検出した特徴的な遺構について記載していく。また、未精査の遺構は表に一括した。

#### 1 トレンチ

##### 第948号土坑（5図・写真2）

[位置と確認] I L・M-73に位置する。本土坑は、第7次調査の際に第Ⅵ層上面で確認したものである。

[平面形・規模] 平面形は小判形で、長軸1 m 16cm、短軸76cmである。主軸方位は、N-10°-Eである。

[壁・底面] 壁は全体にやや外傾しながら直線的に立ち上がる。深さは22cmである。底面はほぼ平坦であるが、長軸北側が南側より高く、約8 cmの比高差があり、4°ほど傾斜する。

[堆積土] 4層に分層した。暗褐色土を基調とし、層全体にローム粒がまばらに混入する。人為堆積の可能性が高いものと思われる。

[出土遺物] 縄文時代中期とみられる土器片が確認面から出土した。

[時期] 縄文時代中期と考えられる。

##### 第951号土坑（5図・写真2・3）

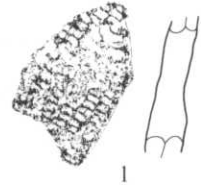
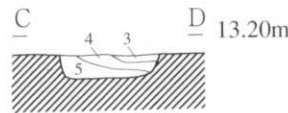
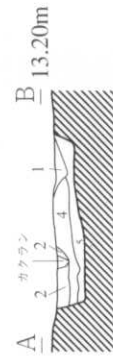
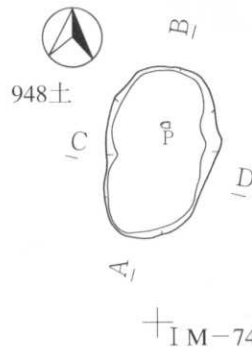
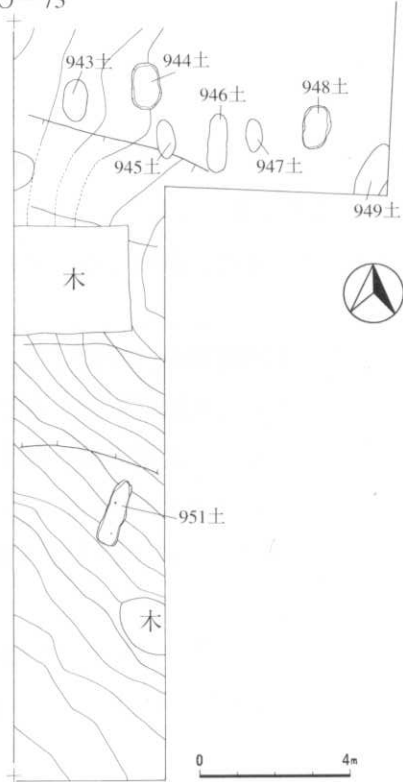
[位置と確認] I N-76に位置する。第Ⅵ層上面で長楕円形の落ち込みを確認した。

[平面形・規模] 平面形は北側が若干狭まる長楕円形である。規模は長軸1 m 79cm、短軸58cmである。主軸方位はN-19°-Eである。

[壁・底面] 壁は東西壁がほぼ垂直に直線的に立ち上がるが、北壁は緩く外傾し、南壁はやや袋状に内傾して立ち上がる。深さは42cmである。底面はわずかに凹凸があるがほぼ平坦で、水平である。

[堆積土] 4層に分層した。暗褐色土から黒褐色土を基調とし、いずれも10~30cm程度のロームブロックが混入する。堆積状況や混入物から人為堆積の可能性が高いと思われる。

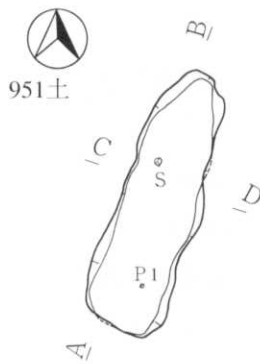
IO-73



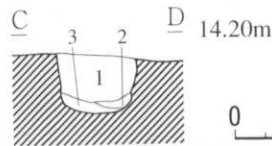
第948号土坑

- 第1層 黒褐色土 10YR3/1 LB φ 1~2mm 極微量混入。
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 LB φ 1~5mm 極微量混入。
- 第3層 にぶい黄褐色土 10YR4/3 LB φ 1~5mm 微量混入。
- 第4層 暗褐色土 10YR3/4 LB φ 1mm 極微量混入。
- 第5層 暗褐色土 10YR3/4 LB φ 1~5mm 微量混入。

番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	948土	確認面		RL		ミガキ		Ⅲ	P-1



I N-76



第951号土坑

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 LB φ 1~20mm 少量混入。
- 第2層 黒褐色土 10YR3/2 LB φ 1~5mm 微量混入。
- 第3層 暗褐色土 10YR3/3 LB φ 1~10mm 微量混入。
- 第4層 黒褐色土 10YR3/2 LB φ 1~30mm 多量混入。

番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	951土	1		RL		ミガキ		Ⅲ	
2	〃	〃		〃		〃		〃	

5 図 第948・951号土坑

[出土遺物] 第1層から縄文時代中期のものと思われる土器片が、第3層から礫が出土した。

[時期] 縄文時代中期と考えられる。

## 2 トレンチ

### 第952号土坑（6図）

[位置と確認] I K-76に位置する。第II層下面精査中に、礫の上部を確認し、第II層除去後に楕円形の落ち込みを確認した。この環状の配石と楕円形の落ち込みは一体のものと考え、併せて記述する。

[重複] 道路跡と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 配石は土坑長軸両側に配置される。平面形は円形であるが、北側が約80cm、南側が約1m50cmほど間隔が開く。そのため、東西に弧状に配置されるようにも見える。礫は東側で16個（一部ベルトに隠れているものもあるが）、西側に19個ある。特に西側では、円形の礫と長楕円形の礫が交互に配置されたところも観察できる。また、北西端と南東端に他とは長軸方向を異にする礫が各1個ずつある。第II層の土層観察用ベルトにかかっていた礫を観察した結果、掘り方は確認されず、礫の底面は土坑確認面の第VI層に相当する道路跡底面に接していた。そのため、礫は第II層を掘り込んで埋められたものではなく、置かれたものと判断される。

中の落ち込みは楕円形で、確認面のレベルで長軸約220cm、短軸約120cmである。主軸方位はおおよそN-25°-Eである。掘り方中央やや南寄りから楕円形の礫が長軸を同じくして出土した。なお、掘り方北側は配石と重複する。

[出土遺物] 土坑確認面及び周辺からの出土遺物は無い。

[時期] 出土遺物が無いため不明であるが、道路跡より新しい。縄文時代中期におさまるものと思われる。

### 第953号土坑（6図、写真3）

[位置と確認] I J-76・77に位置する。第II層除去中に若干の盛り上がりを確認した。土坑墓のマウンドではないかと思われたため、上部図化後に掘り下げ、落ち込みも確認した。

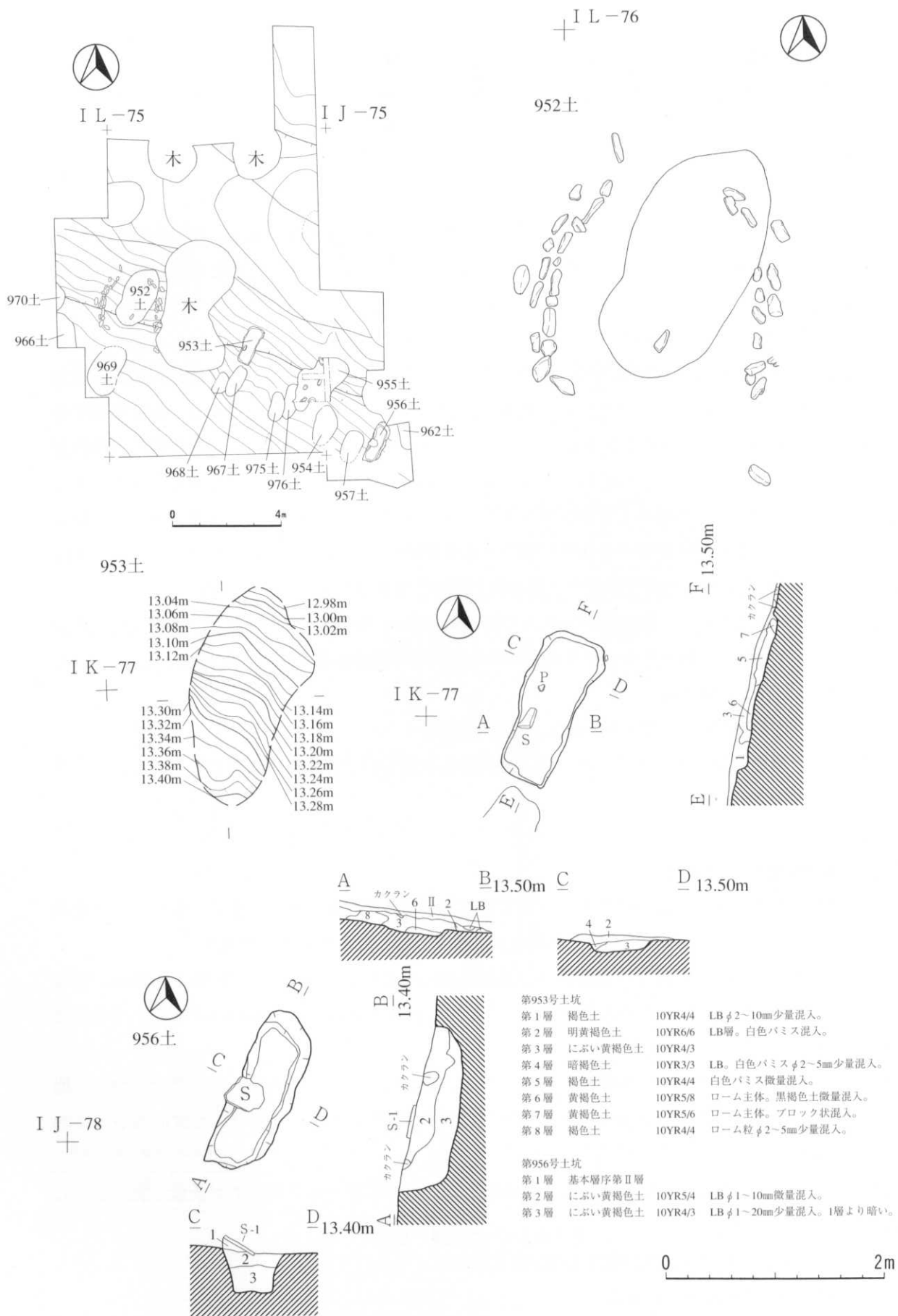
[平面形・規模] マウンド部分は北東側が一部張り出したような不整楕円形で長軸2m12cm、短軸94cmである。掘り方は北側がやや広がる隅丸長方形で、長軸1m44cm、短軸62cmである。主軸方位はN-22°-Eである。

[壁・底面] 壁はやや外傾し、直線的に立ち上がる。深さはマウンド上面から底面までが19cm、掘り方上面から10cmである。底面はほぼ平坦であるが、地形に沿って南側から北側に向かって約15°で傾斜する。

[堆積土] マウンド部分から底面まで8層に分層した。全体にロームブロックが多量に混入し、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 堆積土中から土器の細片と礫が出土した。

[時期] 縄文時代中期と考えられる。



6 図 第952・953・956号土坑

### 第956号土坑（6図・写真3）

[位置と確認] I I-77・78に位置し、第II層除去中礫上面を検出し、第VI層上面で楕円形の落ち込みを確認した。

[平面形・規模] 平面形は不整な隅丸長方形で、長軸1 m55cm、短軸54cmである。主軸方位はN-26°-Eである。

[壁・底面] 壁は外傾しながら直線的に立ち上がる。深さは南側で46cm、北側で25cmである。底面はほぼ平坦で、南側から北側にかけて約5°で傾斜する。

[堆積土] 2層に分層した。ロームブロックが多量に混入するにぶい黄褐色土を主体とする。この堆積土の状況から、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 大型で厚さ4 cmほどの偏平な礫が堆積土上面から出土した。堆積土には斜めに入り込んでおり、上面下部には第II層が入り込んでいる。堆積土中では礫の掘り方は確認されず、本来土坑中央に立っていた可能性が高い。なお、この礫の取り上げは行っていない。

[時期] 縄文時代中期と考えられる。

### 3 トレンチ

#### 第959号土坑（7図・写真3）

[位置と確認] I G-75に位置する。第II層下部で、礫上面を確認し、第VI層上面で楕円形の落ち込みを確認した。

[平面形・規模] 平面形は隅丸長方形で、長軸1 m86cm、短軸58cmである。主軸方位はN-5°-Wである。

[壁・底面] 壁はやや外傾しながら直線的に立ち上がる。深さは24cmである。底面はほぼ平坦且つ水平である。

[堆積土] 11層に分層した。黄褐色土から暗褐色土を基調とする。全体にロームブロックが混入し、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 確認面で大型で厚さ6 cmほどの偏平な礫が横転した状態で出土した。

[時期] 縄文時代中期と考えられる。

#### 第960号土坑（7図・写真4）

[位置と確認] I G-75に位置する。第VI層上面で楕円形の落ち込みを確認した。

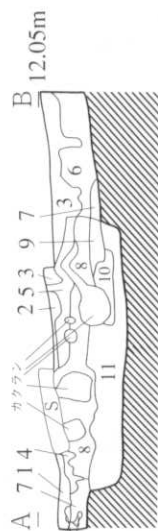
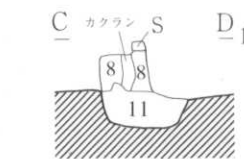
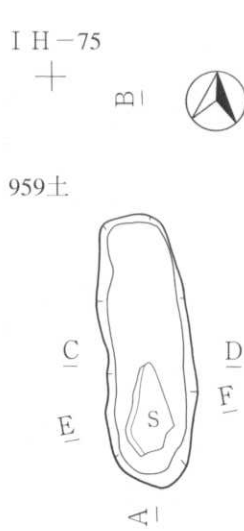
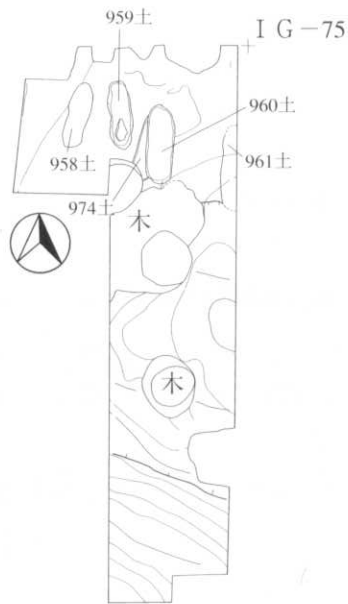
[重複] 第974号土坑と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 平面形は長楕円形で、長軸2 m14cm、短軸76cmである。主軸方位はN-1°-Eである。

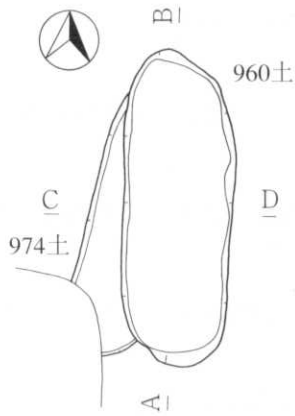
[壁・底面] 壁は東西壁はほぼ垂直に、南北壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。深さは38cmである。底面はほぼ平坦で、北側から南側に向かって8°ほどで傾斜する。

[堆積土] 11層に分層した。暗褐色土を基調とし、ロームブロックが多量に混入する。堆積状況や混入物から人為堆積の可能性が高い。

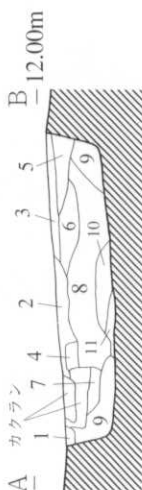
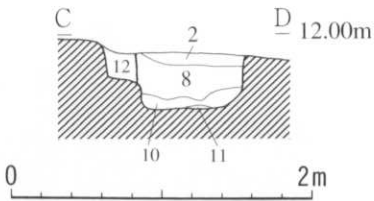
[出土遺物] 堆積土中から縄文時代前・中期の土器片が出土した。



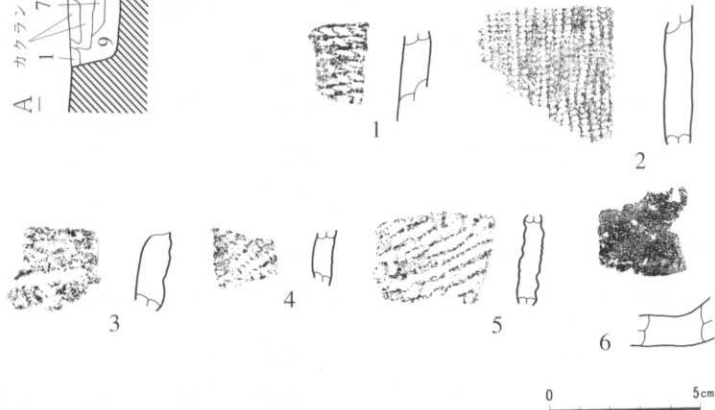
- 第959号土坑
- 基本層序第I層 10YR2/1 黒色土
  - 基本層序第II層 10YR2/3 黒褐色土
  - 基本層序第III層 10YR2/3 黒褐色土
  - 基本層序第IV層 10YR2/2 黒褐色土
  - LB φ 1mm極微量混入 10YR3/4 暗褐色土
  - LB φ 1mm極微量混入 10YR3/4 暗褐色土
  - ローム微量混入、漸移層 10YR4/6 褐色土
  - LB φ 1~20mm微量混入 10YR4/4 褐色土
  - LB φ 1~5mm微量混入 10YR3/4 暗褐色土
  - LB φ 1~5mm微量混入 10YR3/4 暗褐色土
  - LB φ 1~10mm少量混入 10YR5/6 黄褐色土
  - LB φ 1~10mm少量混入 10YR3/4 暗褐色土



I H-76



- 第960・974号土坑
- 第1層 褐色土 10YR4/6 LB φ 30mm少量混入。
  - 第2層 褐色土 10YR4/4 LB φ 1~20mm少量混入。
  - 第3層 黒褐色土 10YR3/4 LB φ 1~5mm極微量混入。
  - 第4層 黄褐色土 10YR6/8 LB φ 5~30mm多量混入。
  - 第5層 暗褐色土 10YR3/3
  - 第6層 暗褐色土 10YR3/3 LB φ 1~10mm極微量混入。
  - 第7層 暗褐色土 10YR3/3 LB φ 1~5mm中量混入。
  - 第8層 暗褐色土 10YR3/4 LB φ 1~15mm少量混入。
  - 第9層 暗褐色土 10YR3/4
  - 第10層 褐色土 10YR4/4 粘土質。
  - 第11層 暗褐色土 10YR3/4 LB φ 1~20mm少量混入。
  - 第12層 暗褐色土 10YR3/3 LB φ 1~10mm極少量混入。



0 5cm

番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	960土	堆積土	L単絡I			ミガキ		II-3	繊維混入
2	〃	〃		RL		〃		〃	〃
3	〃	〃	RL?					III	
4	〃	〃		LR		ミガキ		〃	
5	〃	〃		結束第一種		〃		III-6	
6	〃	〃			縄文		無文	III	

7 図 第959・960・974号土坑

[時期] 第974号土坑より新しく、縄文時代中期と考えられる。

#### 第974号土坑（7図）

[位置と確認] IG-75に位置する。第960号土坑精査中に本遺構を確認した。

[重複] 第960号土坑と重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模] 平面形は楕円形に近い形態と思われるが、規模は遺構の大部分が第960号土坑により壊され、南側も木により調査不能だったため、不明な点が多い。主軸方位は西壁の状況からN-13°-Eぐらいと考えられる。

[壁・底面] 壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面はほぼ平坦且つ水平である。

[堆積土] 分層できなかった。ロームブロックが混入する。人為堆積の可能性が高いものと思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 縄文時代中期と考えられる。

#### 4 トレンチ

##### 第963号土坑（8図・写真8）

[位置と確認] ID-76に位置し、第VI層上面で楕円形の落ち込みを確認した。

[重複] 南側が根によって一部攪乱されている。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、推定長軸1m13cm、短軸70cmである。主軸方位はN-0°-Eである。

[壁・底面] 壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北側から南側にかけて5°ほどで傾斜する。

[堆積土] 5層に分層した。黒褐色土を基調とし、層全体にロームブロックが混入する。堆積状況や混入物から人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] なし。

[時期] 縄文時代中期と考えられる。

#### 5 トレンチ

##### 第972号土坑（8図・写真4）

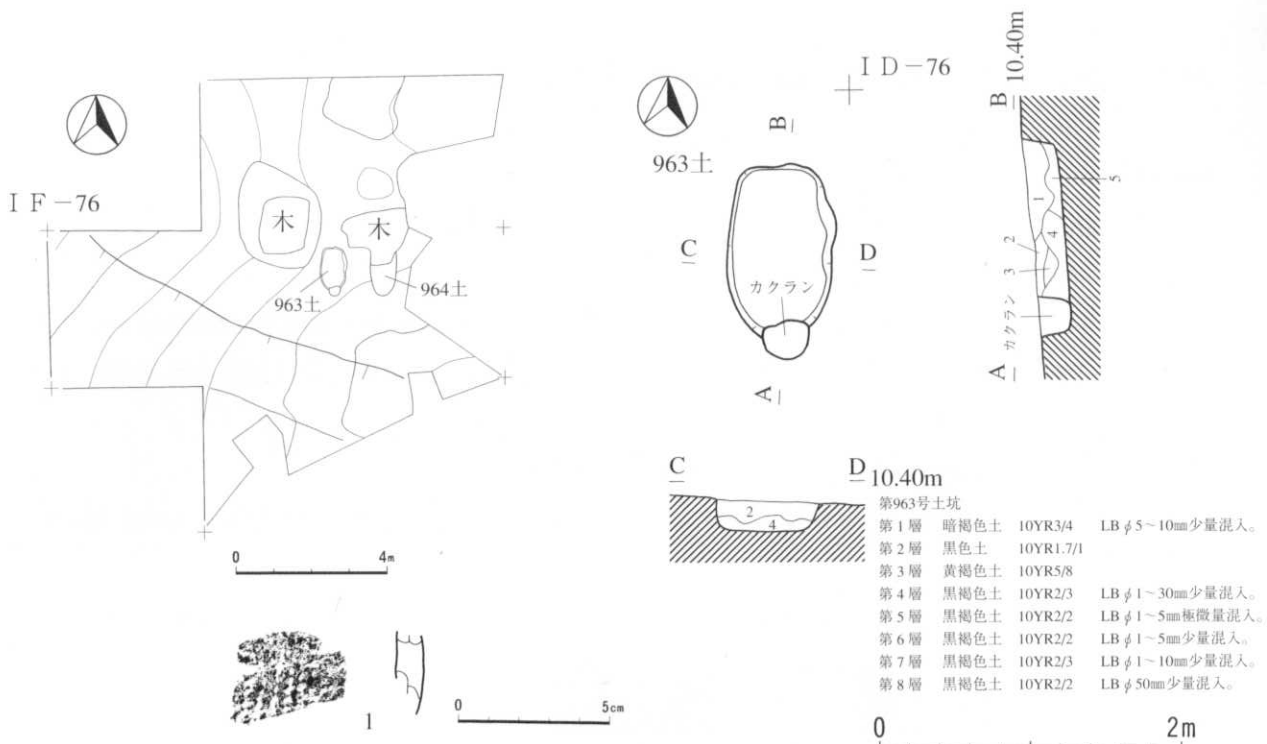
[位置と確認] OQ-81・82に位置する。第VI層上面で楕円形の落ち込みを確認した。

[平面形・規模] 平面形は隅丸長方形で、長軸1m28cm、短軸71cmである。主軸方位はN-33°-Eである。

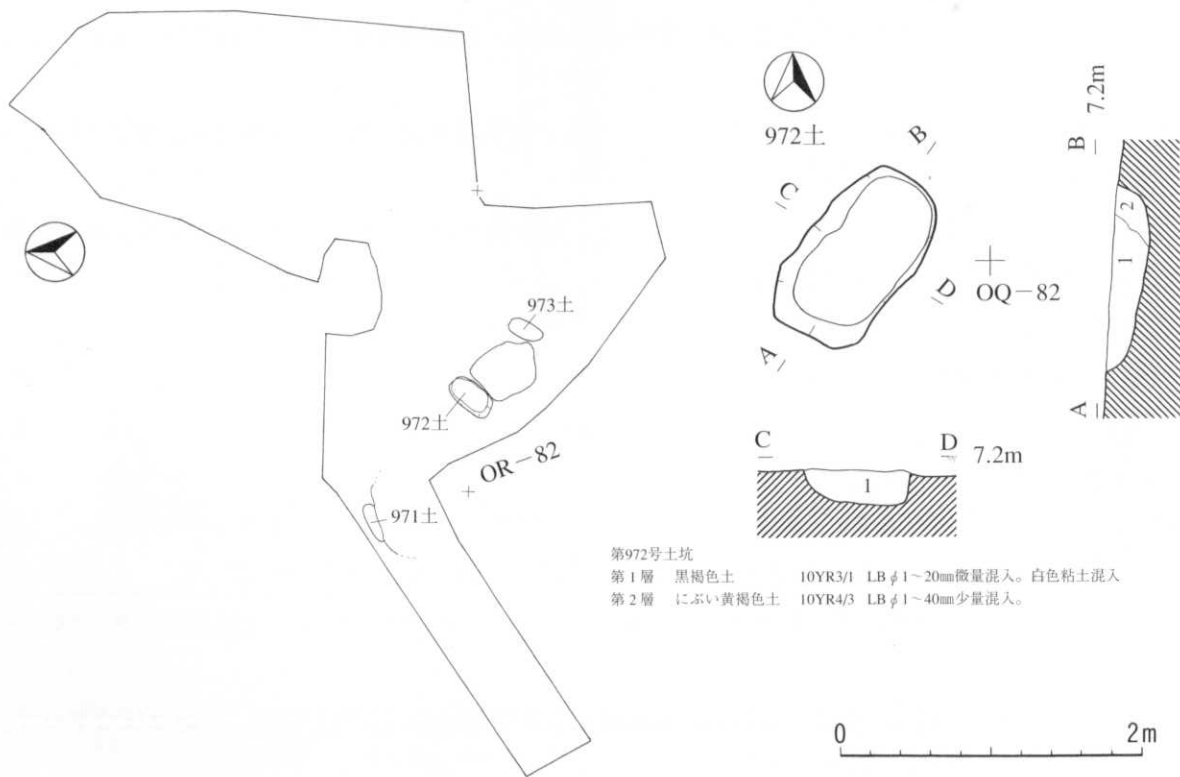
[壁・底面] 壁は東側は垂直に、それ以外は外傾しながら直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、南側から北側にかけて11°ほどで傾斜する。

[堆積土] 2層に分層した。確認面は標高7mほどと低く、湧水が激しい。黒褐色土を基調とし、層全体にロームブロックが混入する。白色粘土も部分的に観察された。堆積状況や混入物から人為堆積の可能性が高い。





番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	963土	堆積土		RLR		ミガキ		II	



8 図 第963・972号土坑

[出土遺物] なし。

[時期] 縄文時代中期と考えられる。

## (2)道路跡

第7次調査の所見では、第Ⅱ層を除去すると、第Ⅲ～Ⅴ層が欠如し、周辺より深さ30～40cmほどで溝状に落ち込み、第Ⅵ層が直接確認される部分がある。その部分ではさらに、ロームブロックを貼り付けている部分も観察された。これは馬の背状の台地の最も高いところに形成されおり、人為的なものと判断された。それが連続していることから、道路跡とした。道路跡は漸移層まで除去し、ローム層を露出させ、部分的にはロームブロックを貼り付けていると見られる。それに沿うように土坑墓が分布する。第7次調査の段階で、最も高い部分に造られた道路跡と共に造られた土坑墓は、南側の緩い谷に向かって延びていることが確認されていた。

今回の調査でも、緩い谷地形の底面で道路跡が確認された。第7次調査と同様に、ローム層まで除去されており、その範囲を道路跡とした。

[位置と確認] 1～4トレンチのI C～N-73～77に位置する。第Ⅱ層除去後、ブロック状にひび割れた状態のローム面の検出によって確認した。なお、5トレンチでは明確に確認されていない。

[重複] 土坑と重複しており、いずれも本遺構が古い。

[平面形・規模] 平面形は溝状である。谷状の地形に沿って北西-南東に延びる。調査区が限定されており、部分的に広狭があるが、確認できたところでは、上幅7 m40cm～8 m20cm、下幅3 m40cm～4 m40cmほどである。

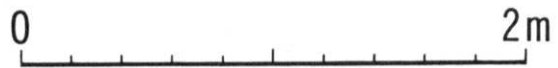
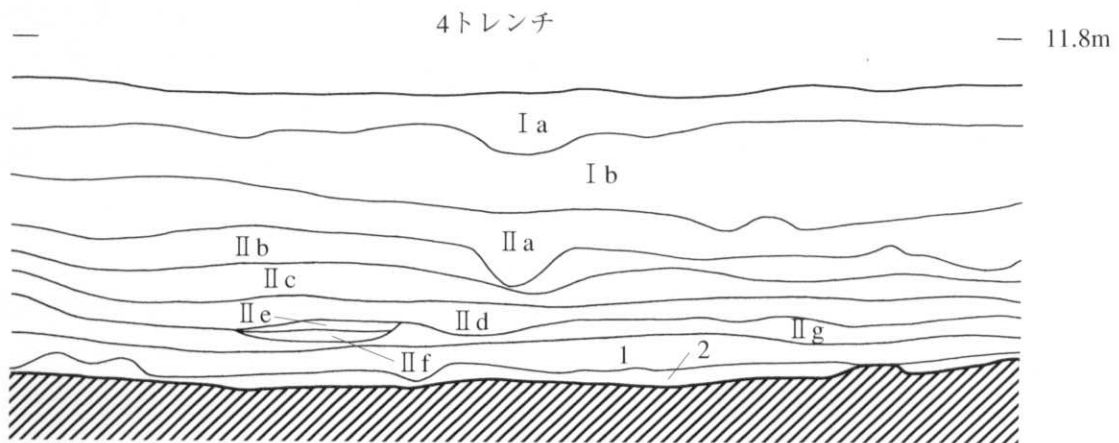
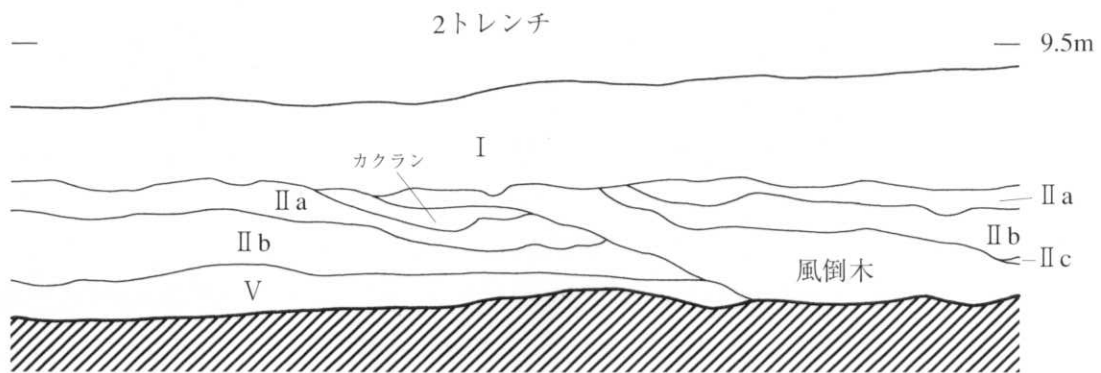
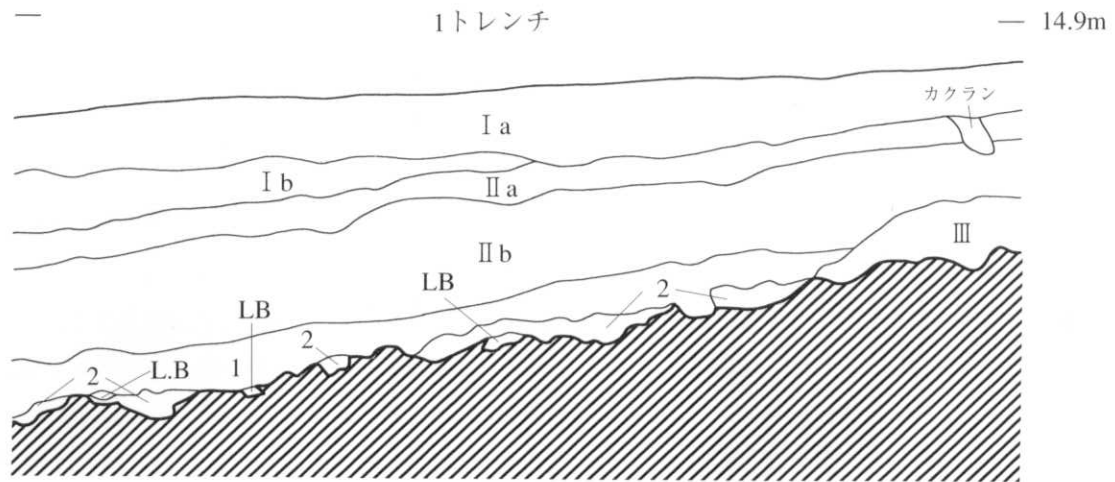
[壁・底面] 壁は緩やかに立ち上がる。深さは40cmほどである。底面は凹凸はなく、非常に堅緻である。ローム面をそのまま底面としている部分もあるが、断面観察では、底面のロームが拳大ぐらいのブロック状に観察される部分もある。これは、ロームブロックを貼り付けた結果によるものではないかと考えられる。そのため、平面観察ではロームブロックがひび割れ、割れた部分に黒褐色土が細かい筋状に入り込んだように観察される。

[堆積土] 第Ⅱ層が堆積する。

[出土遺物] 底面直上としたが、I J-75を中心に、5 cmほど底面から浮いた状態で第Ⅲ群土器片が複数個体分出土した。

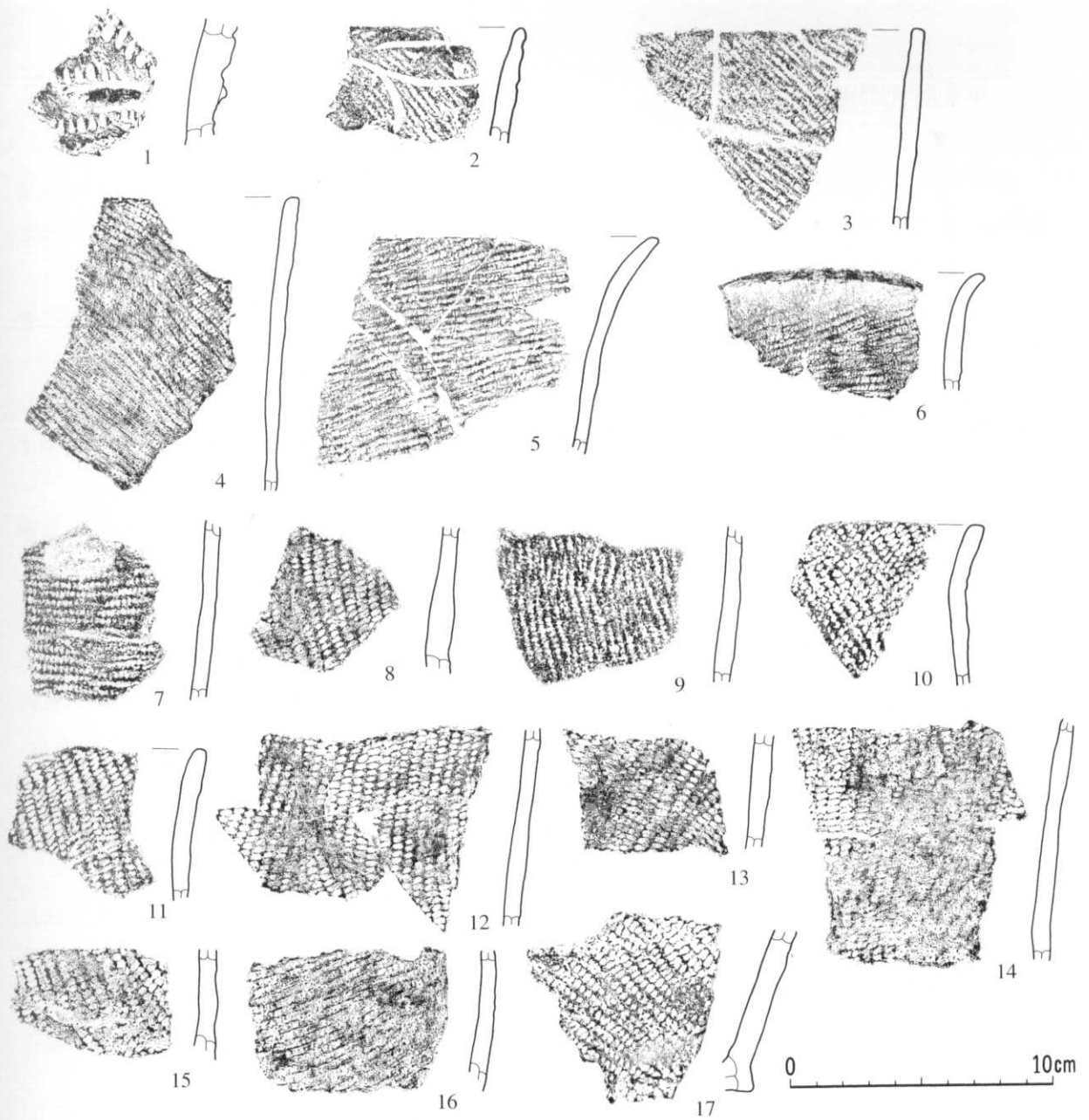
[時期] 出土土器は地文のみのものが多いが、2から縄文時代中期後葉（榎林式～最花式期）のものと思われる。また、地文のみの土器も、施文手法から同様の時期と考えられる。しかし、この土器の出土をもって道路跡の機能が停止した時期とし得るかは、慎重に判断する必要があると思われる。

(小笠原 雅行)



第1a層	黒褐色土	10YR2/3	第1層	黒色土	10YR1.7/1	道路跡内堆積土
第1b層	黒色土	10YR2/1	第2層	黒色土	10YR2/1	道路跡内堆積土
第IIa層	黒褐色土	10YR2/2				
第IIb層	黒色土	10YR1.7/1				
第IIc層	黒色土	10YR1.7/1				
第IId層	黒色土	10YR1.7/1				
第IIe層	黒色土	10YR2/2				
第IIf層	黒色土	10YR1.7/1				
第IIg層	黒色土	10YR2/1				

9 図 道路跡



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	道路跡 I J-75	底面直上	貼付、刺突			ミガキ	Ⅲ-3		
2	〃	〃	LR、沈線			〃	Ⅲ-8		
3	〃	〃	LR			〃	Ⅲ-11	4と同一個体	
4	〃	〃	〃			〃	〃		
5	〃	〃	〃			〃	〃	6と同一個体	
6	〃	〃		LR		〃	〃		
7	〃	〃		〃		〃	〃		
8	〃	〃		〃		〃	〃		
9	道路跡 I K-75	〃		〃		〃	〃		
10	道路跡 I J-75	〃	RL			〃	〃		
11	〃	〃	〃			〃	〃		
12	〃	〃		RL		〃	〃		
13	〃	〃		〃		〃	〃		
14	〃	〃		〃		〃	〃		
15	〃	〃		〃		〃	〃		
16	道路跡 I K-75	〃		RL?		〃	〃		
17	道路跡 I J-75	〃			RL	〃	網代痕?		

10図 道路直上出土遺物

## 2 平安時代の遺構

### (1) 円形周溝

円形周溝を1基確認した。この遺構は、平成5年度に青森市教育委員会が行なった旧都市計画道路建設予定地の調査でも2基確認されている。今回調査した場所はそのすぐ北側に当たり、当時からマウンドの存在が指摘されていた。

今回の調査では、そのマウンドの最も高い部分から四方にトレンチを入れ、残存状況の把握に努めた。

[位置と確認] IO～IS-80～83に位置する。現地表面でマウンドと、トレンチ内の第Ⅱ層中で落ち込みを確認した。

[平面形・規模] マウンドはほぼ円形と思われる。現地表面観察では、北半が南半よりやや傾斜が大きい。確認面では南側がやや傾斜が大きい。高さは最大となる中心部付近で69cmほどで、ロームブロックが主体で、黒色土が混入する。主体部と見られる落ち込みは、中心部からやや南側に位置する。第Ⅴ層を掘り込んでいる（第Ⅲ層は明確に確認できない）。トレンチ幅の確認のみで全体形が不明であるが、長軸1m80cm以上、短軸は70cmほどと見られる。周溝は円形を呈するものと思われるが、全周するか否かは判断できない。周溝の外径は約14.3m、内径約11.3～11.5mほどである。周溝の幅は、上幅で1m22cm～1m72cm、下幅で60cm～1m22cmである。深さは40～65cmである。

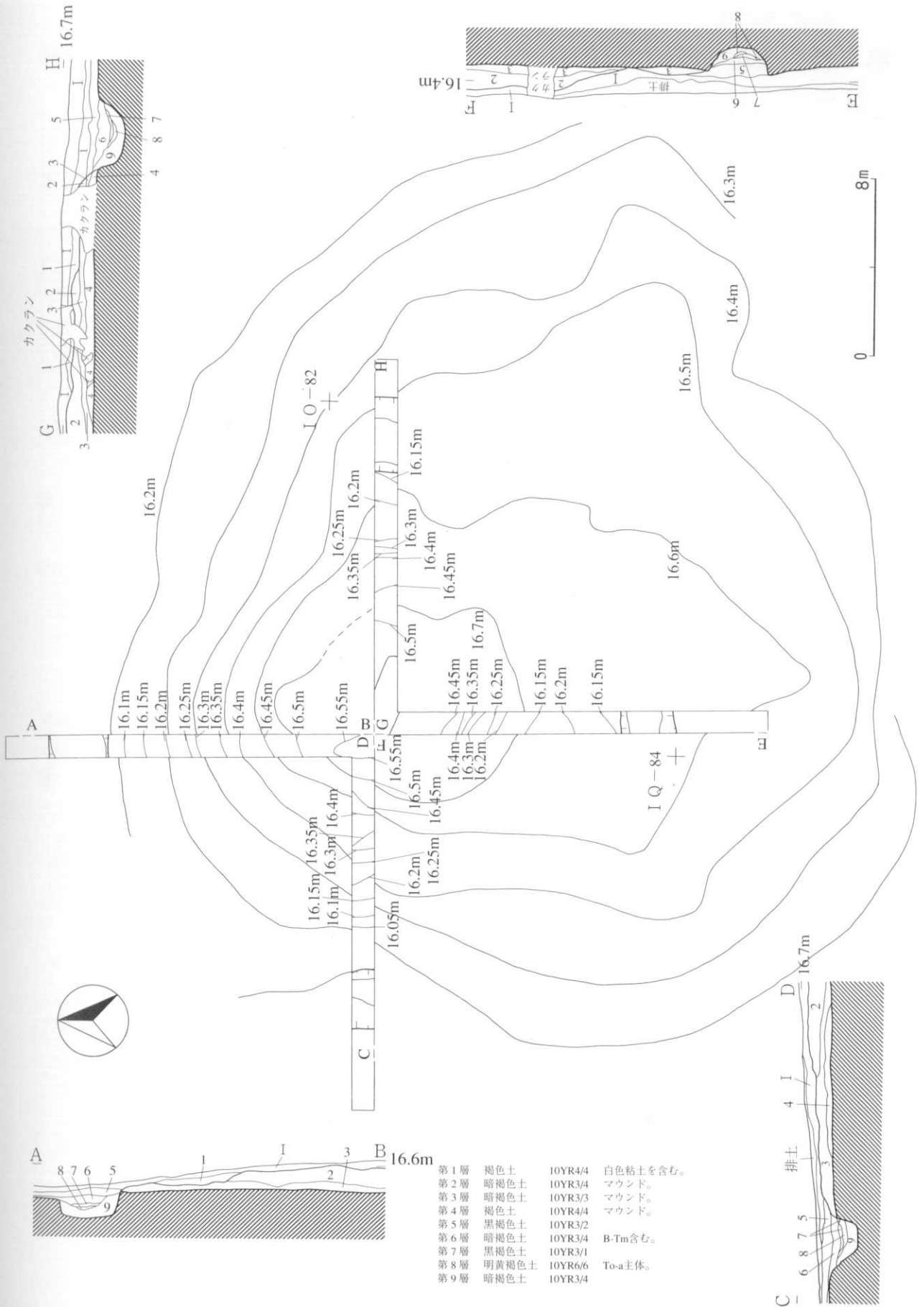
[壁・底面] 周溝の壁はほぼ垂直に立ち上がり、上幅と下幅の差が少ない部分と、緩やかに立ち上がり上幅と下幅の差が大きい部分がある。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 周溝の堆積土は、いずれも下部がローム質土で、中位に十和田a火山灰、黒色土を挟んでその上位に白頭山火山灰が混入する。さらにその上位は黒色土である。下半は墳丘の崩落土と見られ、中位以上が自然堆積である。

[出土遺物] マウンド部及び周溝内から土師器・須恵器の小片が出土した。いずれも散発的な出土で、供献された状態ではない。

[時期] 出土遺物が小片のみで、それから時期推定はできないが、周溝堆積土中にTo-a、B-Tmの火山灰が含まれることから、10世紀の初頭以前の構築である。

(小笠原 雅行)



11図 円形周溝

### 第3節 土坑一覽

図版 番号	土坑 番号	位 置	重複・新旧	平面形	計 測 値			出 土 遺 物				時 期	備 考
					開 口 部	底 面	深 さ	土器	剥片	礫	その他		
5	948	I M-73		楕円形	116 × 76	111 × 64	22	○				中期	
5	949	I M-78		楕円形	(160) × (71)	×							確認のみ
	950				×	×							欠番
5	951	I N-76		楕円形	179 × 58	174 × 49		○		○		中期	
6	952	I K-76		楕円形	(230) × (120)	×							確認のみ
6	953	I J-77		楕円形	140 × 58	132 × 50	19	○		○		中期	
6	954	I J-77		楕円形	(160) × (75)	×							確認のみ
6	955	I J-77		楕円形	(240) × (140)	×							確認のみ
6	956	I I-77		楕円形	154 × 54	122 × 30	36						蓋石
6	957	I I-77		楕円形	(120) × (77)	×							確認のみ
7	958	I H-75		楕円形	(178) × (60)	×							確認のみ
7	959	I G-75		楕円形	184 × 56	166 × 45	49						蓋石?
7	960	I G-75	<974土	楕円形	210 × 72	195 × 65	40	○				中期	
7	961	I G-75		楕円形	(220) × -	×							確認のみ
6	962	I I-77		楕円形	- × -	×							確認のみ
8	963	I D-76		楕円形	(115) × 70	(108) × 42	21						確認のみ
8	964	I C-76		楕円形	(70) × (65)	×							確認のみ
	965				×	×							欠番
6	966	I L-77		楕円形	- × -	×							確認のみ
6	967	I J-77	<968土	楕円形	(110) × (72)	×							確認のみ
6	968	I J-77	>967土	楕円形	(130) × (45)	×							確認のみ
6	969	I L-77		楕円形	(200) × (110)	×							確認のみ
6	970	I L-76		楕円形	- × -	×							確認のみ
8	971	0R-81		楕円形	(105) × -	×							確認のみ
8	972	0Q-82		楕円形	126 × 75	110 × 52	24						
8	973	0Q-82		楕円形	(104) × (45)	×							確認のみ
7	974	I G-75	>960土	楕円形	- × -	- × -	18						確認のみ
6	975	I H-77	<976土	楕円形	(105) × (50)	×							確認のみ
6	976	I H-77	>975土	楕円形	(122) × (73)	×							確認のみ

## 第4節 遺構外の出土遺物

遺構外出土遺物については出土層位毎に記載した。

### 第Ⅲ層出土遺物

第Ⅲ層は道路跡以外の部分、特に谷状となる地形の南側で確認できる。

#### (1)土器

・縄文時代前期

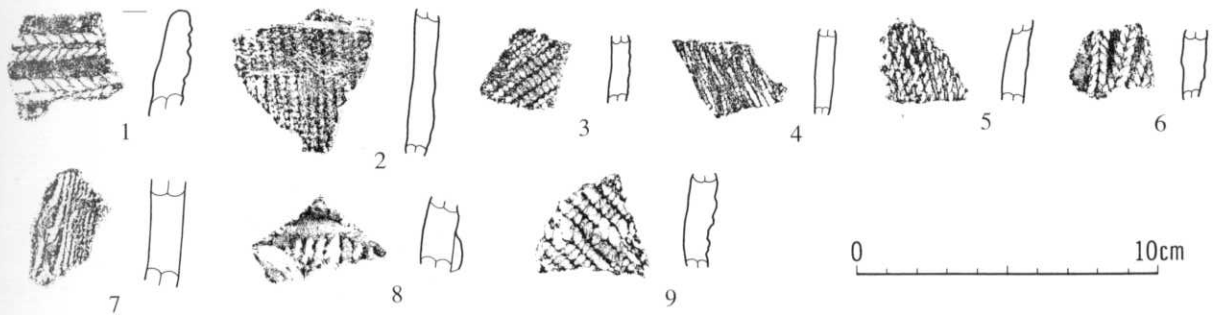
1は口縁部で縄文原体が押圧される。円筒下層d1式である。2～7は円筒下層式の胴部片で、いずれも繊維が混入する。

・縄文時代中期

8は粘土紐が貼付けられる。円筒上層a式～b式ぐらいのものであろう。9は胴部片で、円筒上層式系のものである。

#### (2)石器

砥石が1点出土した。破片であり、図示していない。



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	I O-82	Ⅲ	L・R押			ミガキ	Ⅱ-5-1		
2	〃	〃		RL		〃	Ⅱ-6		
3	I K-82	〃		LR		〃	〃		
4	I L-82	〃		RRL		〃	〃		
5	I O-82	〃		L単絡1		〃	〃		
6	I H-80	〃		L・R単絡1		〃	〃		
7	I L-82	〃		L単絡1A		〃	〃		
8	〃	〃	貼付 (LR押)			〃	Ⅲ-6		
9	〃	〃		結束第一種 (RL, RL)		〃	〃		

12図 遺構外出土遺物 (第Ⅲ層)



## 第Ⅱ層出土遺物

### (1)土器

土器は小片のみで、段ボール箱1箱分出土した。

#### ・縄文時代前期

1～4は円筒下層d<sub>1</sub>式である。いずれも口縁部に縄文原体が押圧される。1は口唇部、4は頸部に刺突が巡り、2・3は口唇部上面にも縄文原体が押圧される。

#### ・縄文時代中期

5・6は円筒上層a式で、貼付と縄文原体が押圧される。7・8は円筒上層b式で、7は口唇部に波状の貼付が巡る。9・10は円筒上層式系で、口唇部が若干肥厚し、9は刺突、10は縄文が施文される。11・12は小片で、大木10式併行期の土器と思われる。縄文を施文後に沈線が加えられる。13は底部で、網代痕が観察される。中期後半のものである。

#### ・古代

14・15は土師器坏で、底面は回転糸切である。16～18は須恵器で、壺か甕の破片と思われ、大型の器形である。図示していないが、土師器甕の小片も出土している。

### (2)石器

石鏃2点、敲磨器類5点（うち敲打痕主体3点、磨面主体2点）、台石・石皿類の破片が3点、砥石の破片が1点、計11点出土した。第7次調査同様、出土点数は極めて少ない。他の調査区と異なり、剥片石器は石鏃のみで剥片等は出土していない。

## 第Ⅰ層出土遺物

### (1)土器

小片のみで、段ボール箱1箱分出土した。

#### ・縄文時代前期

1は円筒下層d<sub>1</sub>式である。

#### ・縄文時代中期

2は円筒上層a式で、貼付と押圧は鋸歯状になるとと思われる。3・4は円筒上層c式で、貼付と刺突が施文される。5は円筒上層b～d式の口唇部で、波状の貼付がつく。6は円筒上層d式で、磨耗しており地文の有無は不明である。7は中期後半の土器で、折返口縁である。折返部にも縄文が施文される。8～10は須恵器片で、壺か甕の破片と思われる。

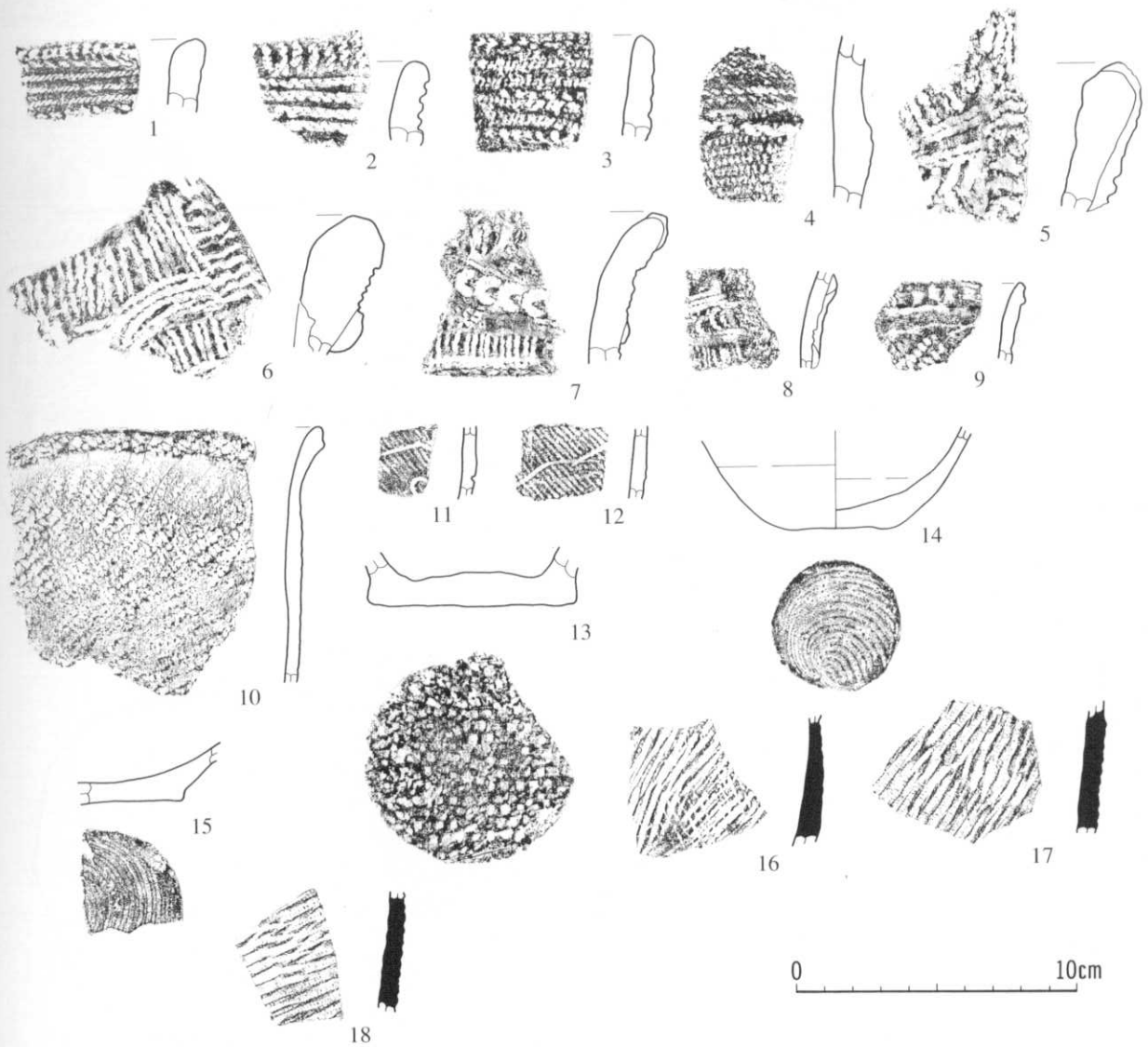
### (2)石器

R、フレイクが1点、敲磨器類3点（いずれも磨面主体）、剥片2点、砥石の破片が1点、計8点出土した。また他に礫が8点出土している。

11は右側面に折れ面があり一端を尖らせる加工を施しており、下部と左辺にも加工がある。尖端部の加工部分は僅かなものであり、つぶれも観察されないの以下辺を刃部とした可能性がある。折れ面は切断加工の可能性があり、バルブが非常に発達している。

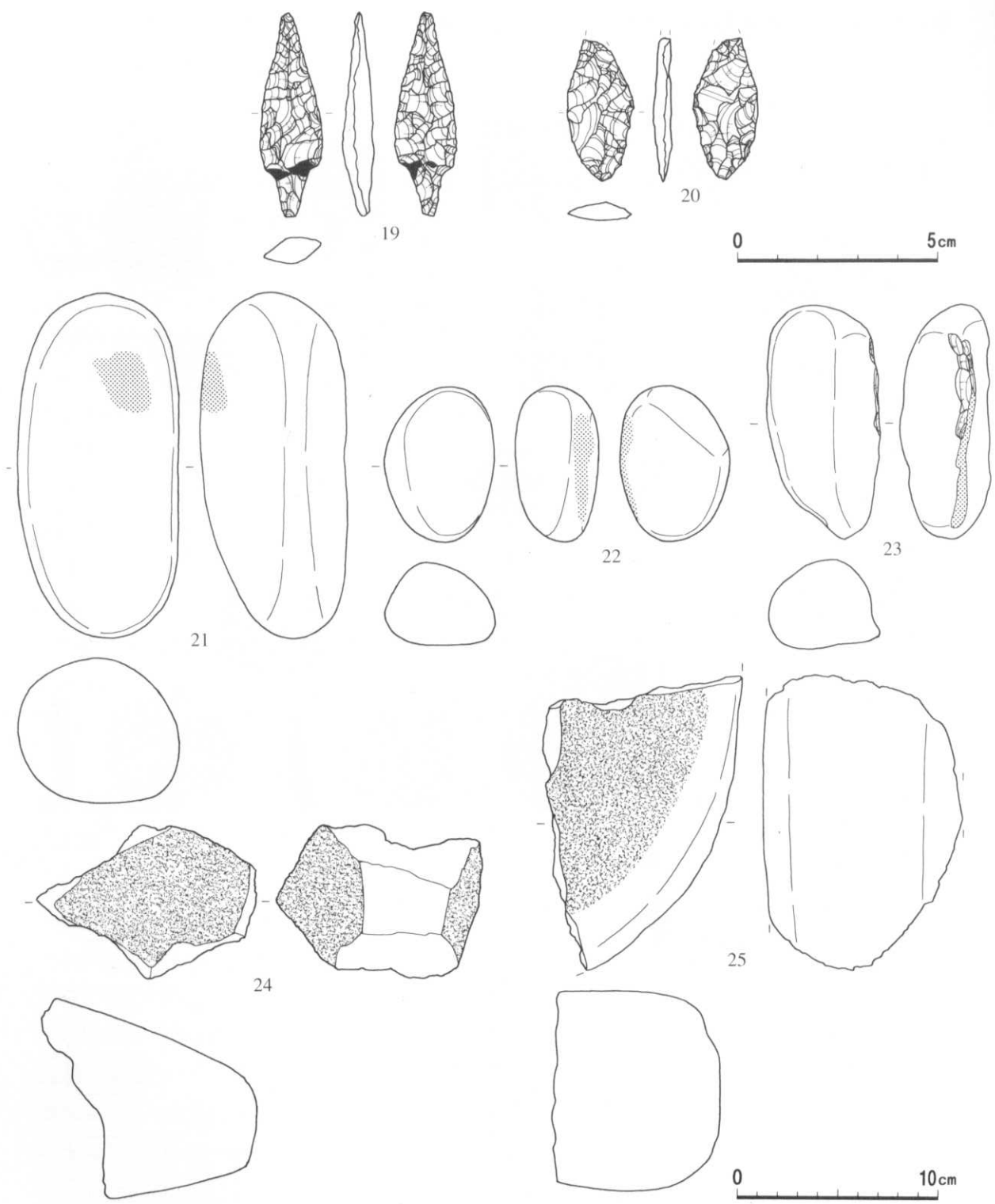
他に、円形周溝の調査用に設定したトレンチ内の第2層から石匙が1点出土している。

(土器は小笠原雅行、石器は斎藤 岳)



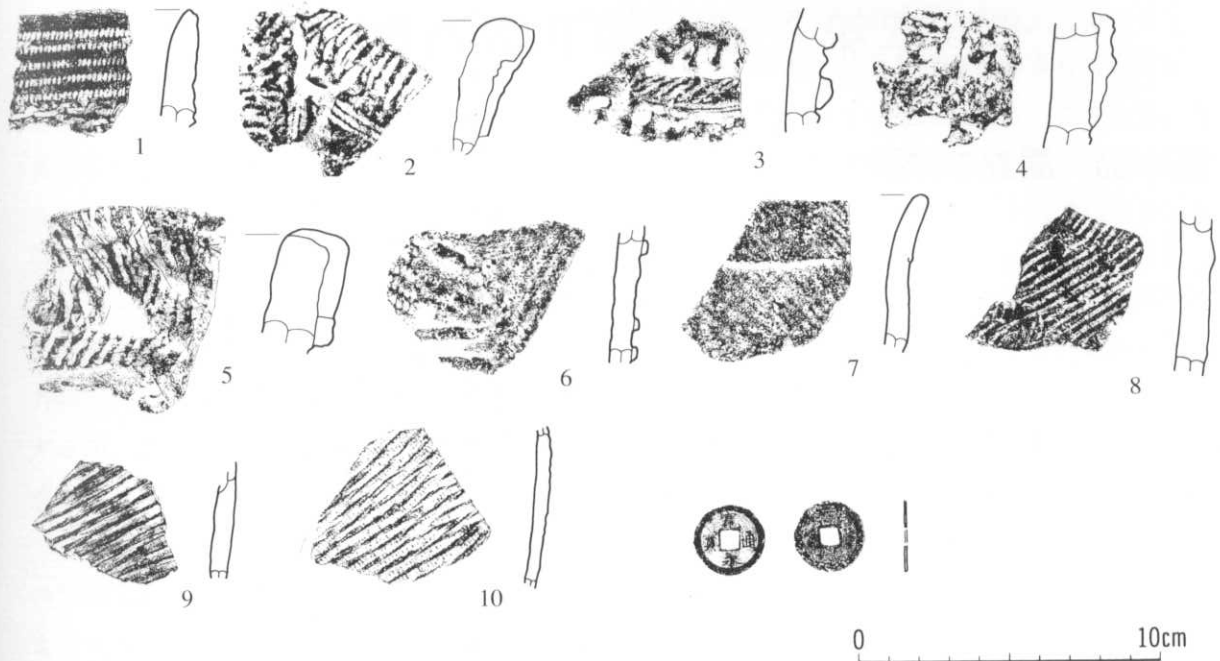
番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	I D-75	II	R押、刺突			ミガキ	II-5-1		
2	I G-75	〃	LR押			〃	〃	口唇上面にもLR押	
3	I J-77	〃	R単絡I押、刺突			〃	〃	口唇上面にもR単絡I押	
4	I H-75	〃	L押、LR押	多軸絡		〃	〃		
5	I D-75	〃	貼付 (LR押)、LR押			〃	III-1		
6	I C-75	〃	〃			〃	〃		
7	I D-76	〃	貼付 (L押)、L押 (直線・彫影)			〃	III-2		
8	I N-76	〃	〃			〃	〃		
9	I C-75	〃	刺突、LR			〃	III-6		
10	I D-75	〃	LR			〃	〃		
11	I E-76	〃		RL?、沈線		〃	III-11		
12	I D-75	〃		LR、沈線		〃	〃		
13	OQ-81	〃					網代痕	〃	
14	I D-76	〃			ロクロ	ロクロ	回糸切	VIII	
15	I J-77	〃			〃	ミガキ	〃	〃	
16	I D-76	〃			タタキ		〃	〃	
17	I C-76	〃			〃		〃	〃	
18	I D-76	〃			〃		〃	〃	

13図 遺構外出土遺物 (第II層) (1)

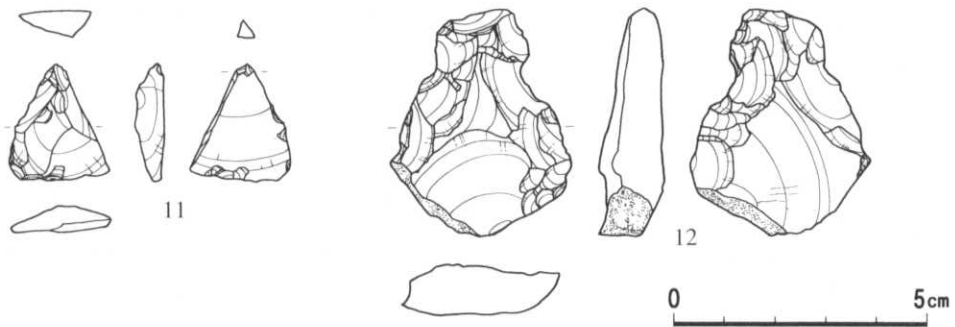


図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
19	I B-75	II	51	11	8	4.8	珪頁	Ab	アスファルト	33158
20	I B-76	〃	(35)	16	4	(2.4)	〃	Ac		33159
21	I J-74	〃	183	82	74	1399.8	流	Ib		35200
22	I D-78	〃	78	55	42	213.6	〃	〃		35198
23	I C-75	〃	117	56	45	368.7	安	〃		35197
24	OQ-81	〃	(77)	(110)	(103)	(685.1)	流	L	焼け	35199
25	I H-75	〃	(147)	(100)	99	(1679.8)	安	〃		35201

14図 遺構外出土遺物 (第II層) (2)



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	I J-74	I	R単絡I押			ミガキ	II-5-1		
2	I K-77	〃	貼付 (L押)、L押			〃	III-1		
3	〃	〃	貼付 (L押)、刺突			〃	III-3		
4	I N-75	〃	〃			〃	〃		
5	〃	〃	貼付 (L押)			〃	III-2-4		
6	I G-75	〃		貼付		〃	III-4		
7	〃	〃	折返口縁、RL			〃	III-11		
8	I C-76	〃			タタキ		VIII		
9	〃	〃			〃	オサエ?	〃		
10	〃	〃			〃	〃	〃		



図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
11	I G-75	I	23	20	5	2.5	珪頁	Gb		33162
12	I S-82		45	36	13	15.9	〃	Cb	円形周溝2層 S-2	33165

15図 遺構外出土遺物 (第I層)

# 第Ⅳ章 第9次調査

## 第1節 調査の概要

第9次調査は、平成8年度の第6次調査で検出した柱穴の広がりを確認するために、平成9年7月28日から9月10日まで調査を行なった。調査面積は88㎡である。

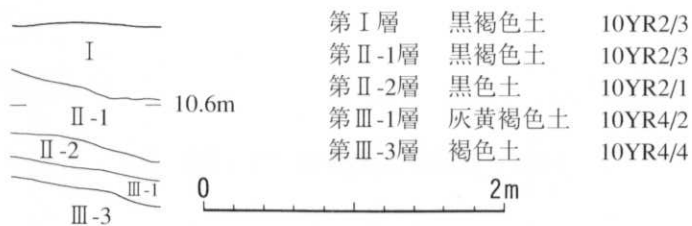
この調査は、第1次・第6次調査の継続で、本来は台地斜面部に形成された遺物包含層の範囲確認調査だった。ところが、第6次調査において湧水層から木柱が出土した。精査の結果、縄文時代前・中期（円筒下層式～榎林式期）の遺物包含層を掘り込んだ柱穴であることが判明した。第6次調査区は4m×4mの1グリッド分で、その柱穴の広がりが不明であった。そのため、第9次調査として、その周辺の調査を行なうこととした。

調査区周辺は、遺跡のある台地北西斜面に当たり、すぐ北側には沖館川が流れる。現地表面での標高は約12mほどである。この台地北側斜面は、部分的には縄文時代の土砂を主体とする廃棄によると見られる段状の迫り出しが観察できる。また、後世に侵食を受けた部分では、断面に遺物包含層が露出しているところもある。本調査区はこの人為的と見られる段差が比較的フラットに広がる部分で、西側へさらに40mほど延びる。

今回の調査は、柱穴の有無確認を主眼としており包含層上面で確認できるため、原則としてそれ以上は精査を行なわなかった。なお、第6次調査区は調査終了後埋め戻していたが、柱穴の状況を見るために、再度掘り直した。

基本層序は基本的に台地上面の集落域と同様である。第Ⅰ層が表土で厚さは50cmほどである。第Ⅱ層は50～60cmほどで、2層に分層できる。このうち、第Ⅱ-2層とした層を中心に縄文時代中期末（大木10式併行期）の遺物包含層が形成されている。第Ⅲ層としたのが人為的な廃棄ブロックで、時期的な整合性から第Ⅲ層相当としたものである。時期は最花式期から以前のものであることが、第6次調査で確認されている。層中には二次堆積のロームが主体で、炭化物や焼土が含まれる。包含層自体ほとんど掘り込んでいないが、少なくとも2層に分層できた。

検出した遺構は、柱穴40基、焼土1基である。柱穴の規模は、掘り方の直径60cm以上の大きなものと、15cm以下の小さなものがある。また、第6次調査で出土した木柱のすぐ西隣から別な木柱が出土し、前回本報告を行なった柱穴が重複していることが明らかとなった。それらも含めて、柱穴



(Ⅲ-3層は下へさらに続く)

16図 基本層序

は掘立柱建物跡を構成することが判明した。調査面積が限られていたため全ての柱穴を掘立柱建物跡として網羅することはできなかったが、少なくとも4棟分の建物跡として認定できるものと思われる。なお、この建物跡を構成する柱穴はすべて掘り方の規模が大きな柱穴である。このうち、重複関係からもっとも新しい掘立柱建物跡の柱穴のうち2基の柱痕確認作業を行ない、それが確認できた段階で精査を止めている。出土遺物は、縄文土器、石器を中心に、ダンボール箱で45箱分出土した。第Ⅱ層出土の大木10式併行期の遺物が主体である。さらにこの中には、調査区南壁が台風による水の影響で崩落し、その撤去の際に採取した遺物も含まれている。

(小笠原 雅行)

## 第2節 検出遺構と出土遺物

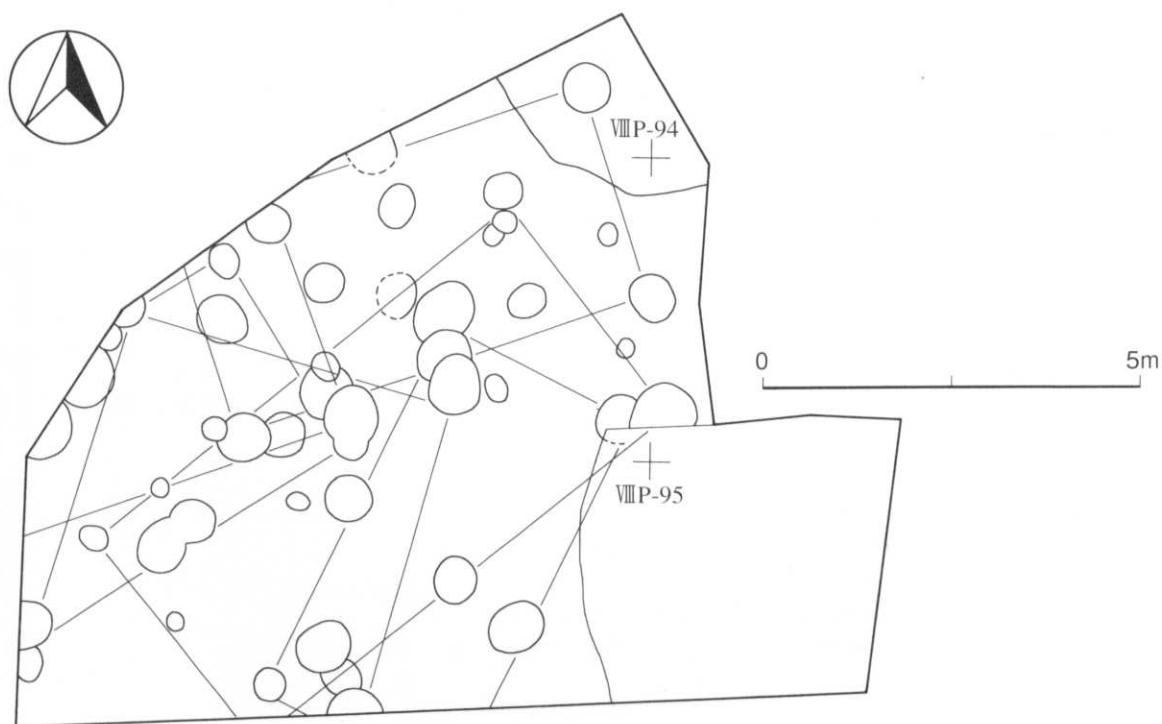
### 1 縄文時代の遺構

#### (1) 掘立柱建物跡

柱穴を40基検出した。径が50cm以上のものと、15cm以下の小さなものに分けられる。前者は35基、後者は12基検出され、第6次調査で確認した木柱が残存する柱穴は前者に含まれる。また、前者は掘り方として、後者は黑色土の落ち込みとして確認される。二次堆積土を掘り込み埋め戻しているため、確認が非常に難しい。直径約50cmの木柱が出土した柱穴も確認段階では15cmほどの黑色土の落ち込みだったことを考慮すると、規模の小さな柱穴も掘方を見落としている可能性もある。

規模の大きな柱穴は、配置から1間×2間の構成になるものと考えられる。第Ⅲ層相当の遺物包含層のうち、最花式期の層を除去すると柱穴が確認できる。また、円筒上層d式の遺物包含層を掘り込んでいる。そのため、構築時期は円筒上層d式から最花式期の間と考えられる。掘り方規模は、56cm～1m05cmである。調査区内では、4棟以上の掘立柱建物跡が想定でき、柱間寸法は280cm前後、350cm前後、420cm前後のものがある。

第6次調査で確認した木柱はクリ材を使用し、太さは直径約60cmほどと考えられる。今回の調査では西側に隣接して、新たに木柱が1本確認された。樹種は同じくクリである。太さは昨年度確認したものとはほぼ同規模と見られる。この2本の柱穴は重複しており、先に検出した柱穴の方が新しい。



17図 掘立柱建物跡 (第19次調査)

今回の第9次調査の後、調査区内の立木が除去され、調査の環境が整ったため、平成12年度に第19次調査で周辺の再調査を行った。調査は柱穴の再確認と木柱の取り上げを主たる目的とした。今回の調査と第19次調査では、調査条件が異なっていることもあり、掘立柱建物跡についてさらに検討する必要が生じた。そのため、掘立柱建物跡の詳細については、第19次調査の本報告の際に記述することとする。

(小笠原 雅行)

## (2)焼土

焼土を1基検出した。周辺は二次堆積ロームを主体とした遺物包含層で、層中には部分的に炭化物や土器が集中し、層をなす部分も見られる。それとともに、焼土が粒状・ブロック状に含まれる部分があるが、ここではそれらは廃棄と判断し除外した。

### 第90号焼土

[位置と確認] VIII P-93に位置し、第Ⅲ層に相当する遺物包含層の精査中に確認した。周辺に柱穴・周溝などが確認されなかったことから、焼土単独の遺構として判断した。

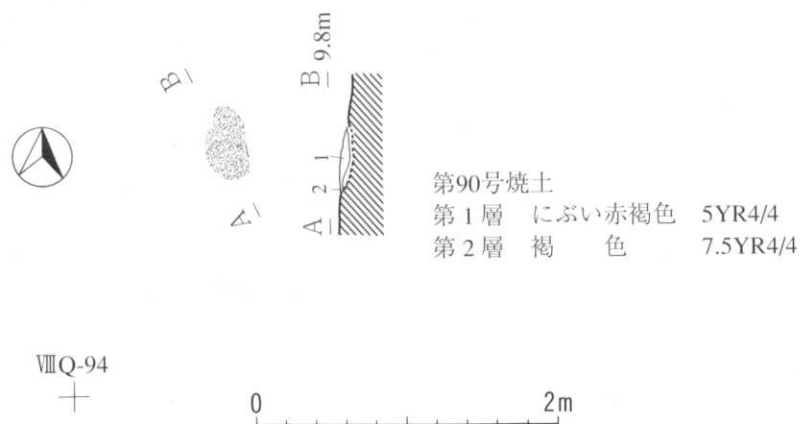
[平面形・規模] 長径約51cm、短径29cmの不整楕円形に広がる。

[堆積土] 焼土は厚さが11cmで、2層に分層され、いずれも焼土が主体となり混入物は無い。

[出土遺物] なし。

[時期] 最花式期の遺物包含層中で確認され、周辺からも最花式期の土器が出土していることから、同様の時期と考えられる。

(小笠原 雅行)



18図 第90号焼土



### (3)遺物包含層

第Ⅱ層中で縄文時代中期末（大木10式期）の遺物包含層を確認した。なお、第Ⅲ層に相当する中期後葉以前の包含層は、中期後葉と考えられる柱穴の確認を主目的としたため、掘り下げはほとんどしていない。

第Ⅱ層は、調査区全体に広がり、厚さ84cm～1 m24cmで、西側・北側の斜面下部に行くにしたがって厚くなる。第Ⅱ層からの遺物の出土量は、段ボール箱で12箱分である。遺物の出土状況は廃棄と考えられ、土器は復元できるものはわずかで、いずれも破片が多い。石器は石鏃、石槍、石匙などがある。その他に土・石製品として、ミニチュア土器、土偶、三角形土製品が出土した。

第Ⅲ層も調査区全体に広がる。第6次調査の所見では厚さは3 m以上に及ぶ。その中で、特に縄文時代前期末から中期後葉（円筒下層 d<sub>2</sub>式～最花式期）の包含層は二次堆積ロームが顕著である。厚さ2 mにも及ぶ包含層は、細かな単位で分層できる。今回の調査ではその上部の一端を掘り下げたに過ぎないが、2層に分層されるものだった。第Ⅲ層の包含層から出土した遺物は、第Ⅱ層と同様に廃棄されたもので、出土量は段ボール箱で15箱分である。土器は復元可能なものが1点のみで他はすべて破片である。

以下、第Ⅲ層から順に、出土遺物について取り上げる。

### 第Ⅲ層出土遺物

ここで扱う資料は、2層に分層した第Ⅲ層から出土した土器を一括している。これは当初、分層まで至らないと判断したことによるもので、第Ⅲ層の調査着手の段階の出土遺物が多く含まれている。調査後半で分層可能であることが判明し、以後は分層した下層の遺物を第Ⅲ-3層として取り上げている。そのため両層の違いとしては、上層では最花式を含み、下層には含まれない。

#### (1)土器

土器はダンボール箱で10箱分出土した。復元できる1個体を除いて、他は破片資料である。土器は磨耗しているものがほとんどで、文様が観察できないものも多い。土器の時期は円筒下層 d<sub>1</sub>式から最花式までである。

##### ・第Ⅱ群土器

3～11は円筒下層 d<sub>2</sub>式である。3～6は縄文・単軸絡条体1類の押圧で文様が構成される。7～11は口縁に粘土紐が貼付されるものである。7・8は2条の縦位貼付で、7は1条が口縁部中位で途切れる。9は斜位の貼付、10は蕨状、11は横位と斜位の貼付が組み合わせられたものである。8・11には縄文原体の押圧に刺突も加えられる。8はC字状、11は円形の刺突である。

##### ・第Ⅲ群土器

12～14は円筒上層 a 式である。12は縦と横の縄文原体の組み合わせ、13は波頂部で、貼付に沿って縄文が押圧される。14は波頂部から垂下する2条の貼付が見られるが、磨耗が激しく、文様は観察できない。15・16は円筒上層 b 式である。いずれも馬蹄形状の原体押圧が付けられるが、15は波頂部下に楕円形の貼付、その下に縦2本の貼付がある。16は口唇部に波状の貼付が巡る。馬蹄形押圧は貼付の間を密に施文される。17は円筒上層 c 式または d 式である。無文面に粘土紐を貼付し、その一部の貼付間に〔状の刺突がある。18～21は円筒上層 d 式である。18・19は無文面に細い貼付

が、20・21は地文施文後に貼付が付く。22は円筒上層 e 式である。波頂部にトライアングル状の貼付があり、以下は地文施文後に縦と横の沈線である。23・24は円筒上層 d 式又は e 式である。23は口唇部が肥厚し、以下は地文のみである。24は貼付後に縦方向の穿孔があり、見かけでは横位の橋状取手のように見える。25は円筒上層 e 式で、地文施文後に沈線が加えられる。26～28は榎林式で地文上に渦巻き状の沈線である。29～41は最花式である。29は磨耗が激しく地文は判然としないが、逆U字状の沈線が観察される。30・31は口唇部まで地文が施され、その上に沈線が加えられるものである。31は折り返し口縁である。32は無文帯に横位の刺突がつき、以下は沈線が施文される。32は無文の口縁部に小突起があり、その部分に縦に9条ほどの擦痕がつく。34・35は頸部で、逆U字状の沈線の内部は無文、外側は縄文が施文されたもので、逆U字状頂部には横位のヒレ状突起が付く。34は沈線の内側に刺突もある。36は隆線によって逆U字状の文様構成になるものと見られる。37は沈線で区画し、一方に縄文が施文される。38～40は縄文施文後に沈線が加えられるものである。40は胴下半片である。41は口唇部が肥厚・外反し、その部分は無文で、胴上半には単軸絡条体1類が施文される。概ねこの時期に含まれるものと考え、ここに含めた。

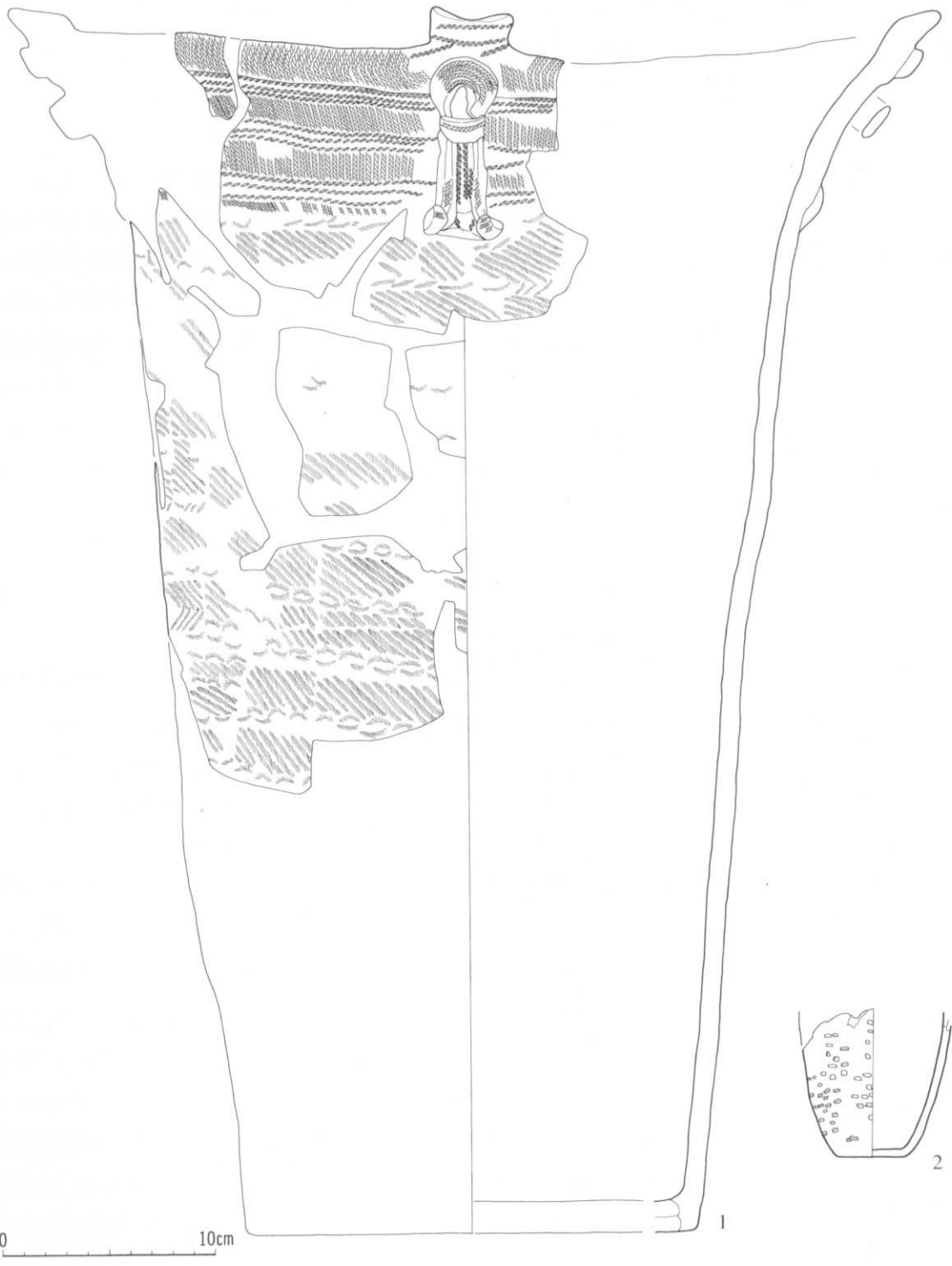
## (2)石器

石鏃13点、石槍1点、石匙2点、石錐11点、スクレイパー類30点、ピエス・エスキューユ4点、R. フレイク44点、U. フレイク34点、異形石器1点、原石2点、石核8点、剥片193点、磨製石斧破片4点、敲磨器類42点（うち凹痕主体3点、敲打痕主体24点、磨面主体15点）、台石・石皿類破片29点、砥石11点（うち破片10点）、軽石1点、北海道式石冠1点、角柱状の礫1点、加工のある礫でその他とした石器1点、計433点出土した。また他に礫が189点出土している。石皿・台石類は小さな破片で焼けているものが多い。87・89は、縁のある四角形の石皿の隅の部分の破片である。

65は左側面の剥離面から、両面とも剥離加工されているが、刃部を形成するようなものではなくR. フレイクとした。80はスクレイパー類としたが、正面右側が正面側に向かって大きく反り、加工は主に両面から交互に加工され、形状も異形石器に近い。石核は82・83のように求心的な剥離のものと、84のように両刃礫器状のものがある。

## (3)土製品

92は土偶胴部である。表面・裏面に原体押圧が施される。胴中心部に貫通孔があり、その部分で破損している。93はミニチュア土器の底部破片である。



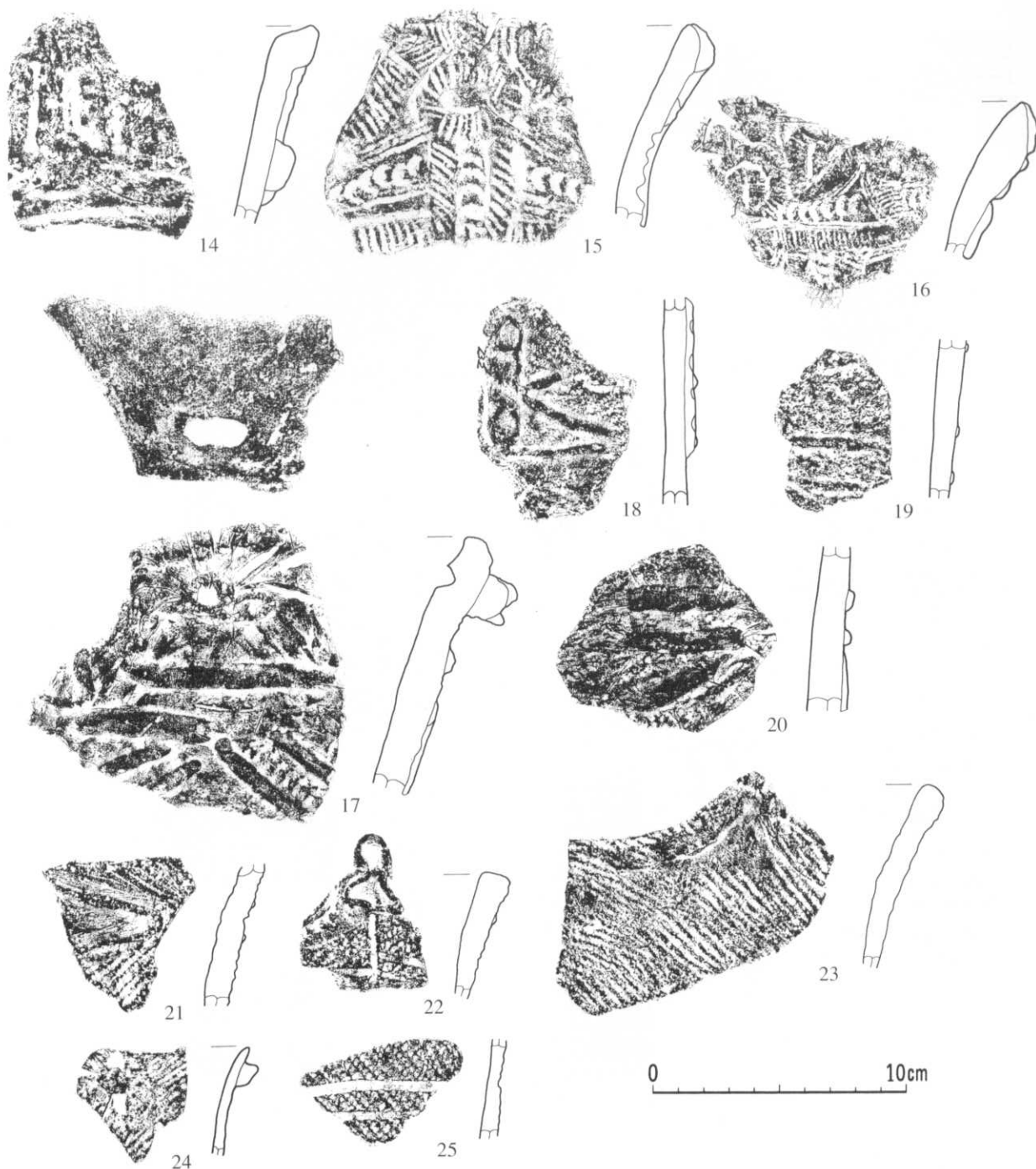
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	VIII P-94	Ⅲ	貼付 (R押)、LR、LR押	結束第二種 (L・L)	結束第二種 (L・L)	ミガキ		Ⅱ-5-2	
2	〃	〃		刺突	刺突	〃		Ⅲ-3	

19図 遺物包含層 (第Ⅲ層) 出土土器 (1)



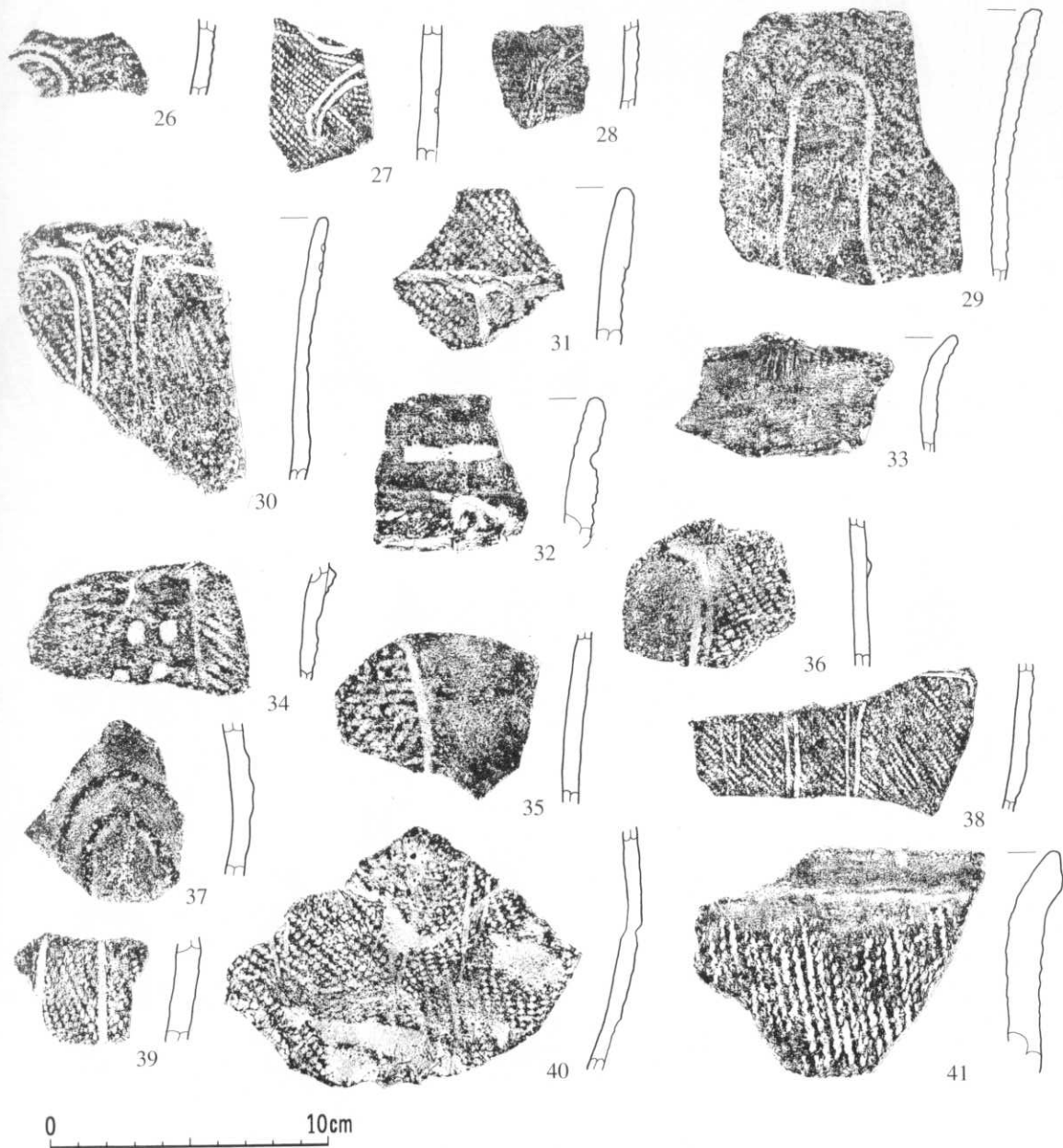
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
3	VIII P-94	III	R単絡1押			ミガキ	II-5-2		
4	〃	〃	〃			〃	〃		
5	VIII O-94	〃	縄押?	結束第一種 (LR, RL)		〃	〃	磨耗	
6	VIII P-94	〃	R押			〃	〃		
7	VIII O-94	〃	貼付 (刻み、R押)、LR押			〃	〃		
8	VIII P-94	〃	貼付、刺突、縄?押			〃	〃		
9	VIII O-94	〃	貼付 (単絡1押)、単絡1押			〃	〃		
10	〃	〃	貼付、R押			〃	〃		
11	〃	〃	貼付 (LR押)、LR押、刺突			〃	〃		
12	VIII P-94	〃	貼付 (LR押)、LR押			〃	III-1		
13	VIII O-94	〃	貼付 (縄押)、L・R押			〃	〃		

20図 遺物包含層 (第III層) 出土土器 (2)



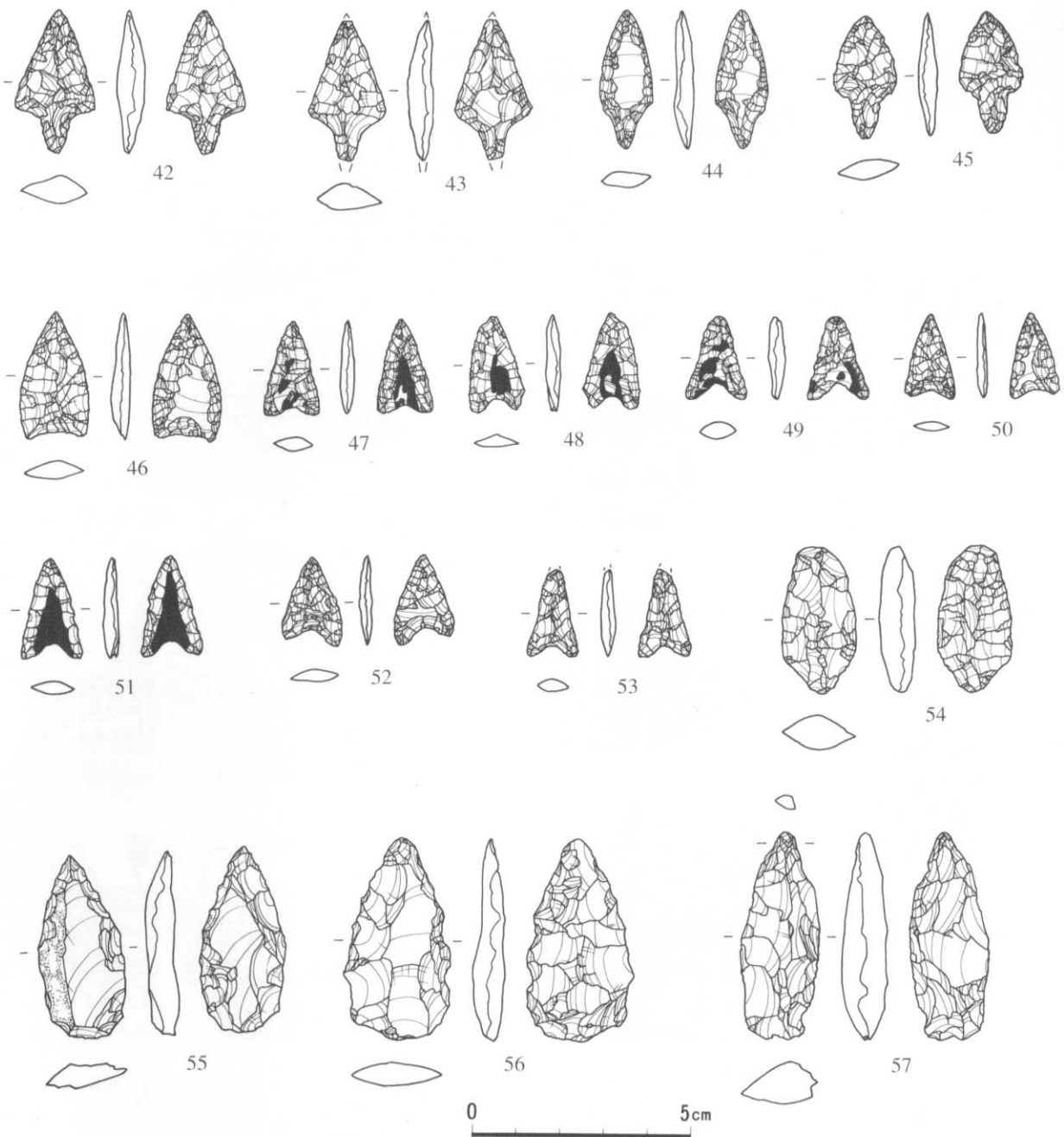
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
14	VIII O-95	III	貼付(縄押?)			ミガキ	III-1	磨耗	
15	VIII P-94	〃	貼付(L押、L押(直線・馬蹄形))			〃	II-2		
16	〃	〃	〃			〃	〃		
17	〃	〃	貼付、刺突			〃	III-3・4		
18	VIII O-94	〃		貼付(指頭状押)		〃	III-4		
19	〃	〃		貼付		〃	〃		
20	VIII P-95	〃		LR、貼付		〃	〃		
21	VIII Q-94	〃		〃		〃	〃		
22	〃	〃	貼付、LR、沈線			〃	III-5		
23	VIII O-94	〃	口唇肥厚、RL			〃	III-4・5		
24	VIII P-94	〃	LR、横位橋状把手			〃	〃		
25	〃	〃		RL、沈線		〃	III-5		

21図 遺物包含層(第Ⅲ層)出土土器(3)



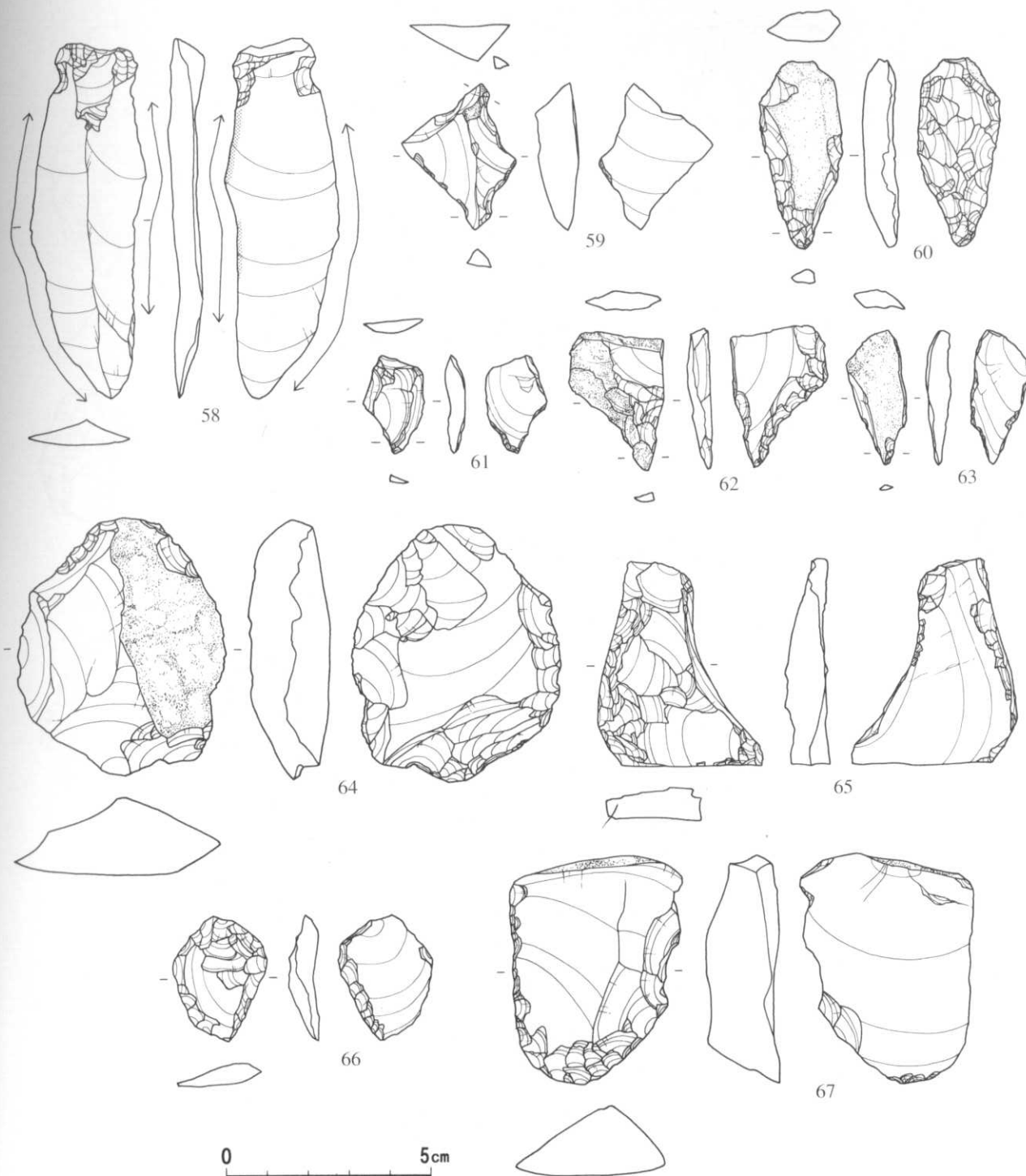
番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
26	VIII P-94	III		縄文、沈線		ミガキ	III-8		
27	VIII O-94	〃		RL、沈線		〃	〃		
28	〃	〃		〃		〃	〃		
29	〃	〃	逆U字状沈線			〃	III-9	磨耗	
30	〃	〃	RL、逆U字状沈線			〃	〃		
31	〃	〃	折返口縁、RL	RL、逆U字状沈線		〃	〃		
32	〃	〃	無文面、刺突	沈線		〃	〃		
33	VIII Q-94	〃	無文、小突起部分に捺痕			〃	〃		
34	VIII Q-95	〃		沈線、ヒレ状突起、刺突、LR?		〃	〃	磨耗	
35	〃	〃		沈線、ヒレ状突起、RL		〃	〃		
36	VIII Q-94	〃		隆線		〃	〃		
37	VIII R-95	〃		沈線、縄文		〃	〃	磨耗	
38	〃	〃		RL、沈線		〃	〃		
39	〃	〃		〃		〃	〃		
40	VIII P-94	〃			RL、沈線	〃	〃		
41	VIII Q-94	〃	肥厚、L単絡I			〃	〃		

22図 遺物包含層（第Ⅲ層）出土土器（4）



図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
42	VIII P-95	III	33	18	6	2.4	珪頁	Aa		37226
43	VIII P-94	〃	(32)	18	6	(2.2)	〃	Ab		37192
44	VIII Q-95	〃	32	12	4	1.5	〃	〃		37286
45	〃	〃	28	14	4	1.2	〃	〃		37281
46	VIII O-94	〃	29	16	4	1.6	〃	Af		37175
47	VIII O-95	〃	21	12	3	0.7	〃	〃	アスファルト	37173
48	VIII Q-95	〃	22	13	3	0.8	〃	〃	アスファルト微量	37282
49	VIII O-94	〃	19	14	4	0.6	鉄	〃	アスファルト	37174
50	〃	〃	19	11	2	0.5	珪頁	〃		37172
51	VIII Q-95	〃	23	14	3	0.7	〃	〃	アスファルト	37289
52	〃	〃	20	14	3	0.6	〃	〃		37284
53	〃	〃	(20)	12	3	(0.6)	〃	〃		37287
54	VIII P-95	〃	34	17	8	2.7	〃	Ab	未製品?	37229
55	VIII Q-95	〃	43	20	7	5.9	玉珪	Ba		34714
56	VIII O-94	〃	46	25	7	7.0	珪頁	〃	未製品?	37176
57	VIII Q-95	〃	47	18	10	7.9	〃	〃	石錐?	37288

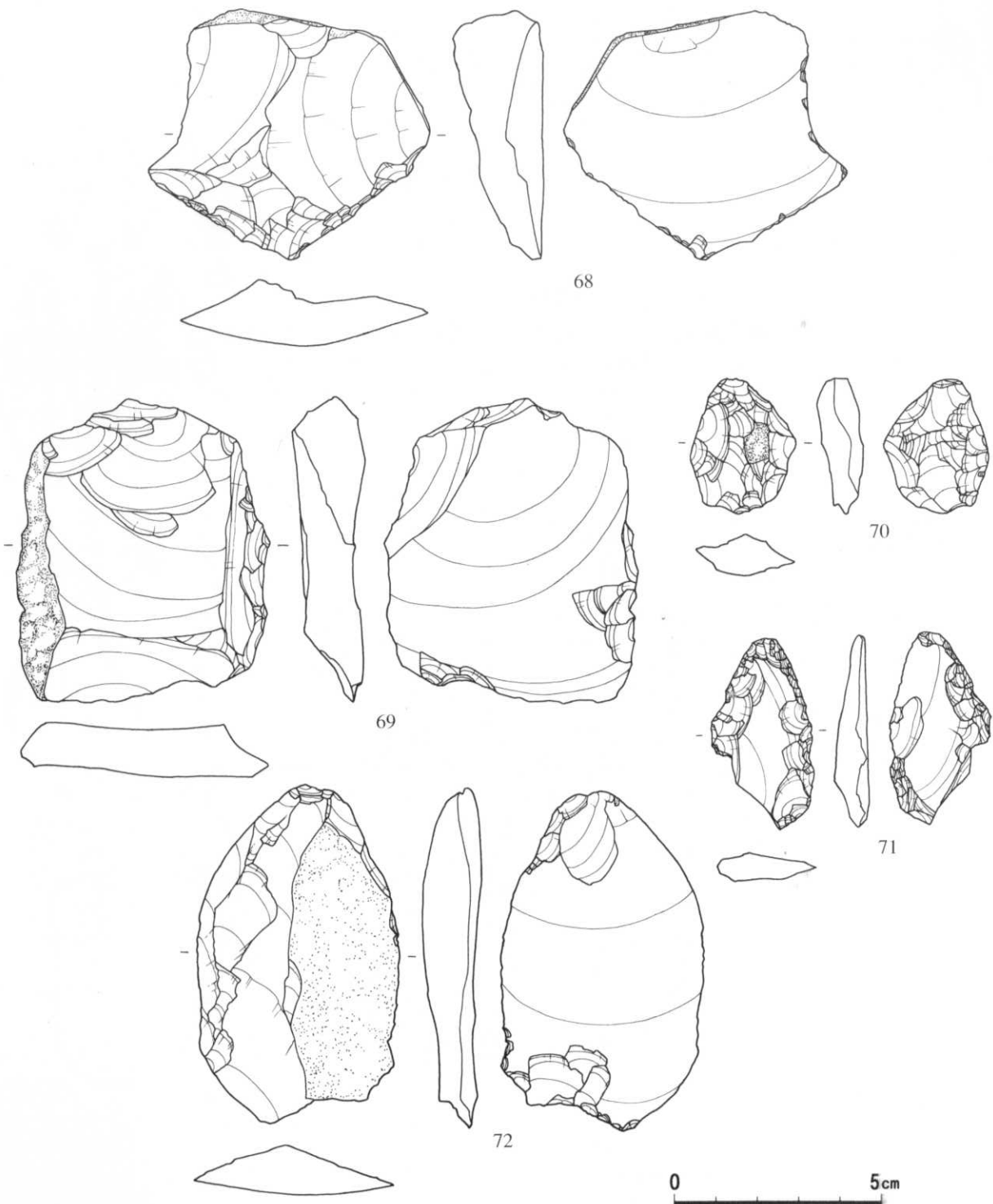
23図 遺物包含層 (第Ⅲ層) 出土石器 (1)



図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
58	VIII Q-94	III	89	29	9	15.4	珪頁	Cg		35173
59	VIII Q-95	〃	36	28	10	5.6	〃	Cc	スクレイパー類?	34713
60	〃	〃	46	20	8	8.3	〃	Db		37283
61	VIII P-95	〃	24	15	5	1.1	〃	Dc		34086
62	〃	〃	34	23	6	4.3	〃	Db		34081
63	VIII Q-94	〃	33	14	6	2.6	〃	〃		33703
64	VIII P-94	〃	63	51	20	64.4	〃	Ga		33530
65	VIII P-95	〃	50	41	11	17.6	〃	Gb		34082
66	VIII Q-95	〃	31	23	7	3.6	〃	Ga	石鏃未製品?	34722
67	〃	〃	56	42	18	41.6	〃	〃	搔器	34769

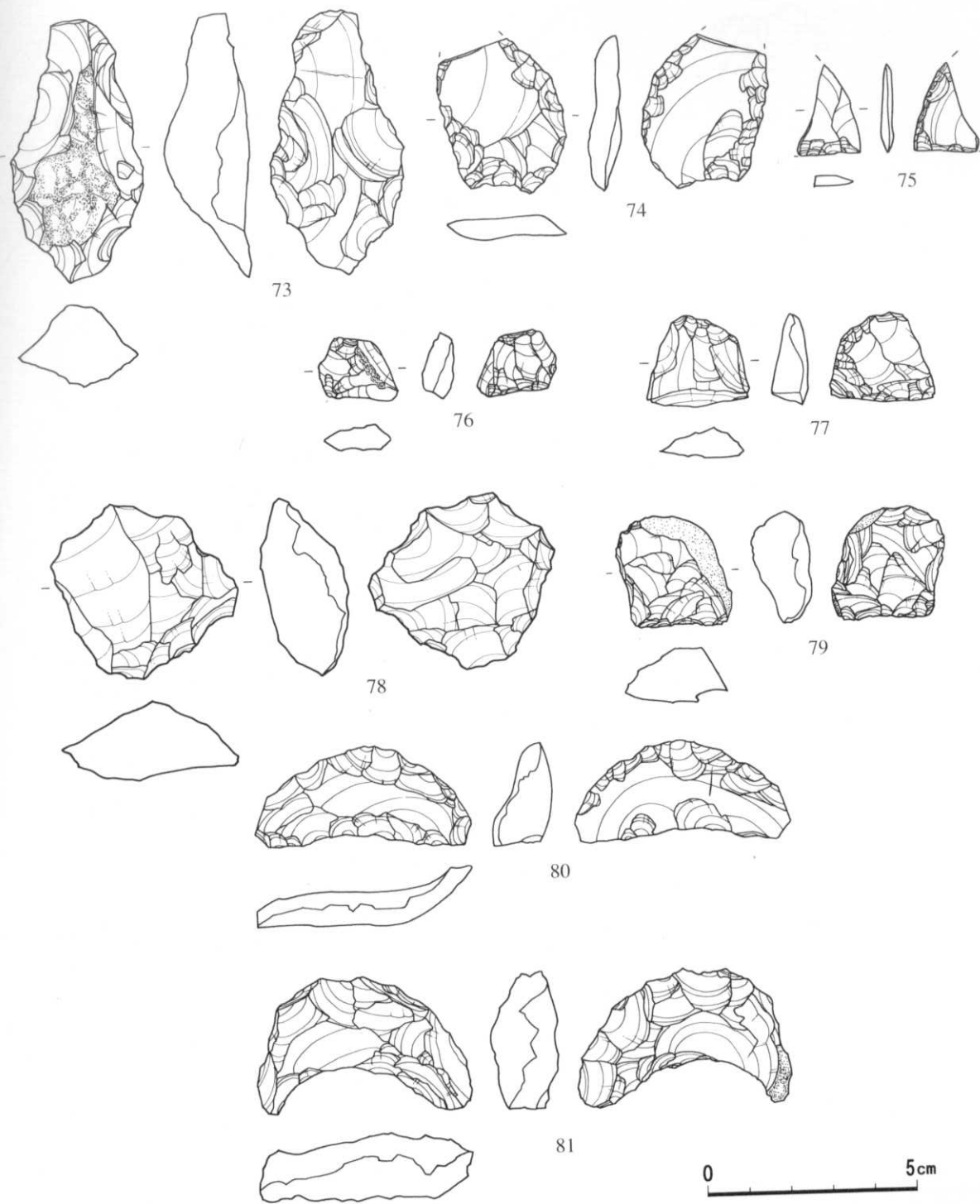
24図 遺物包含層 (第III層) 出土石器 (2)





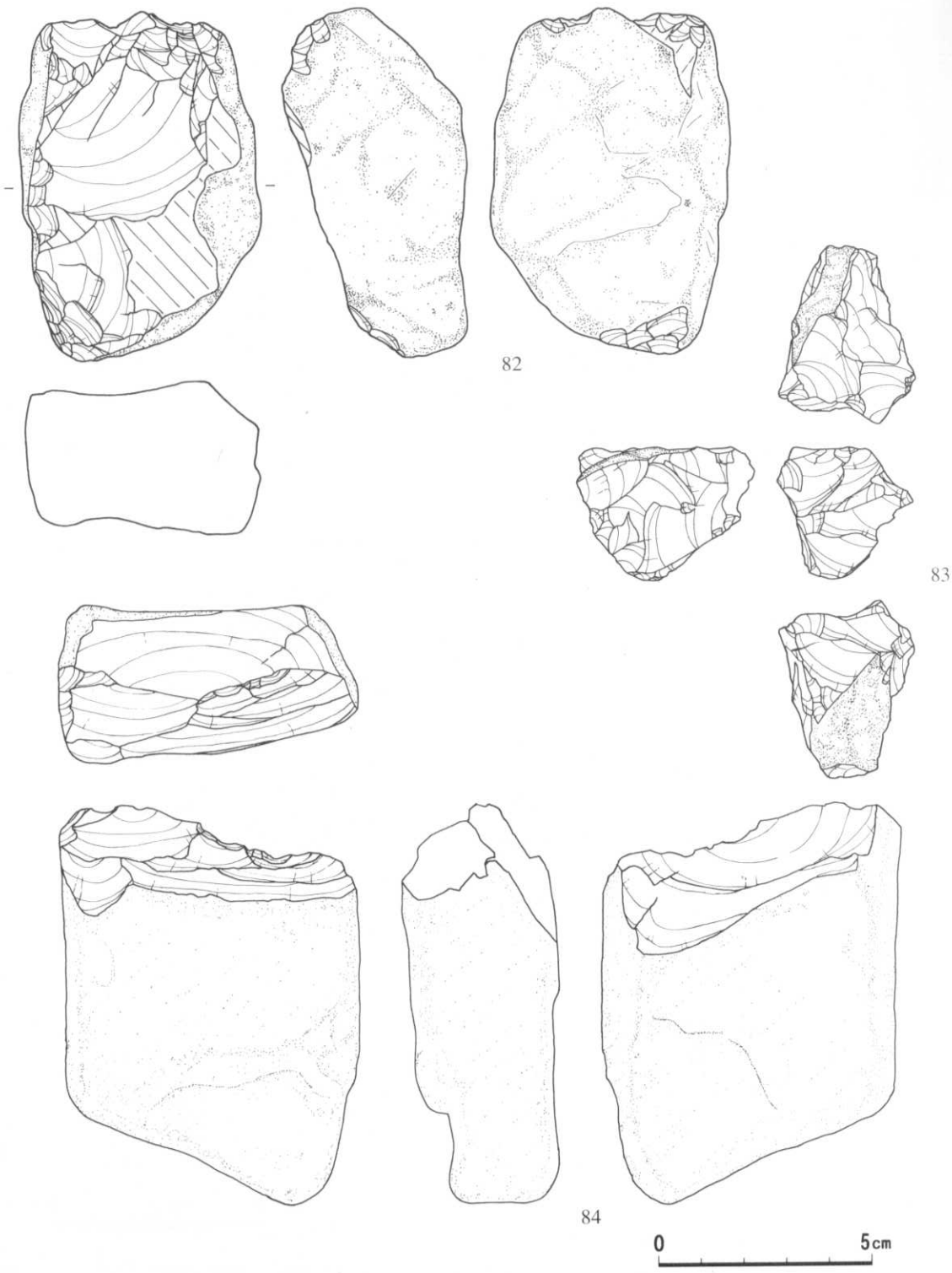
図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
68	VIII P-95	Ⅲ	61	69	22	64.3	珪頁	Ga		34130
69	VIII Q-95	〃	74	61	17	75.0	〃	〃		34757
70	〃	〃	33	26	11	6.9	〃	〃		34682
71	〃	〃	47	25	8	6.4	〃	〃		34661
72	VIII Q-94	〃	82	49	14	50.6	〃	Gb	両極打法で加工?	33719

25図 遺物包含層 (第Ⅲ層) 出土石器 (3)



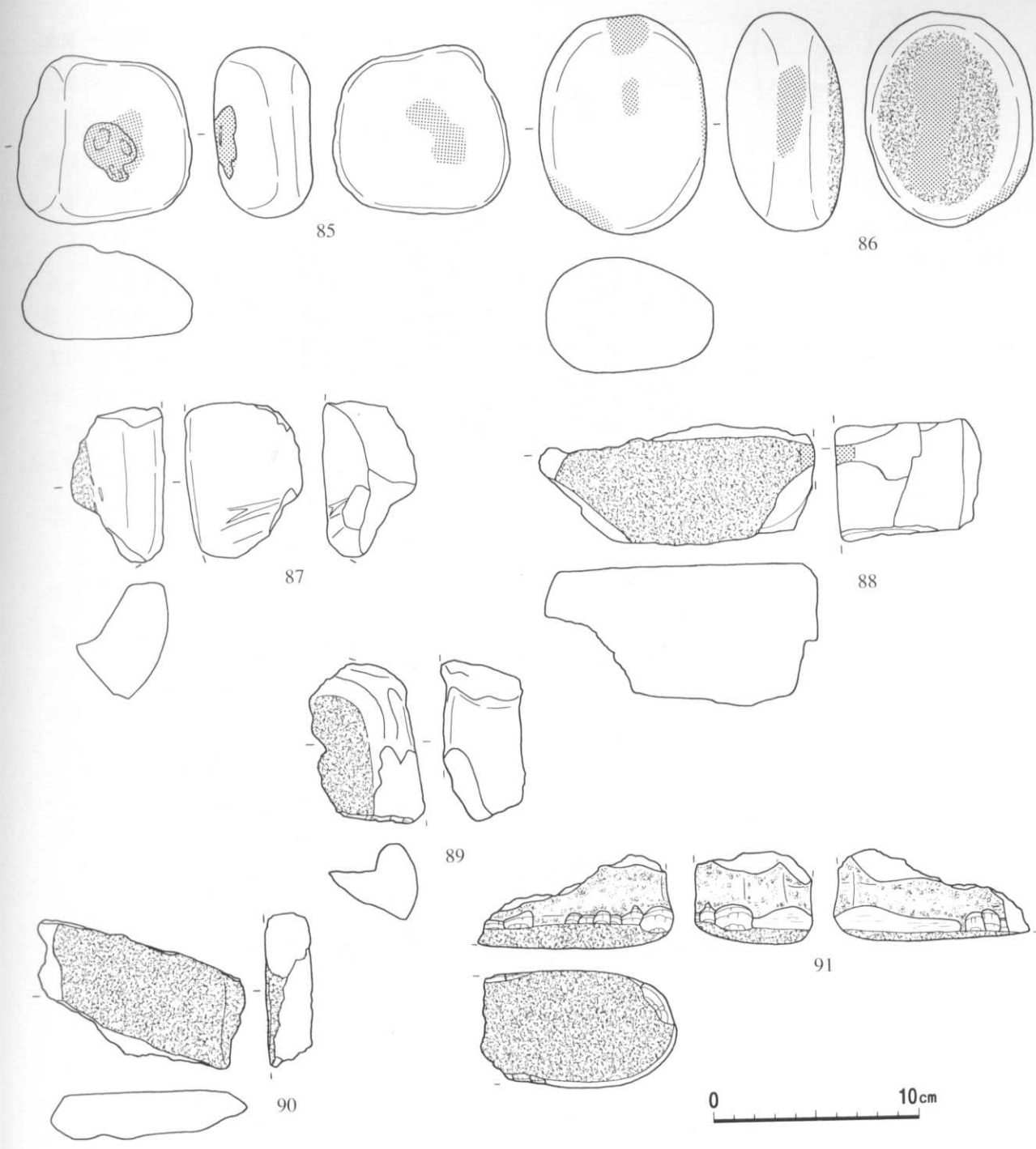
図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
73	VIII P-95	III	64	32	20	30.3	珪頁	Gb		34096
74	VIII Q-95	〃	(37)	31	8	(7.5)	〃	Ga	石鏃未製品?	34760
75	VIII P-94	〃	(22)	16	3	(0.8)	〃	〃	〃	33496
76	VIII Q-95	〃	16	19	8	2.0	〃	F	正面稜線つぶれ	34627
77	〃	〃	23	25	9	4.7	〃	Gb	両極打法で加工?	34720
78	VIII Q-94	〃	42	45	20	28.5	〃	〃		33739
79	VIII Q-95	〃	27	27	14	9.9	〃	F		34739
80	VIII Q-94	〃	29	51	14	10.4	〃	Ga	異形石器?	33715
81	VIII P-95	〃	33	51	16	21.2	〃	R		34113

26図 遺物包含層(第Ⅲ層)出土石器(4)



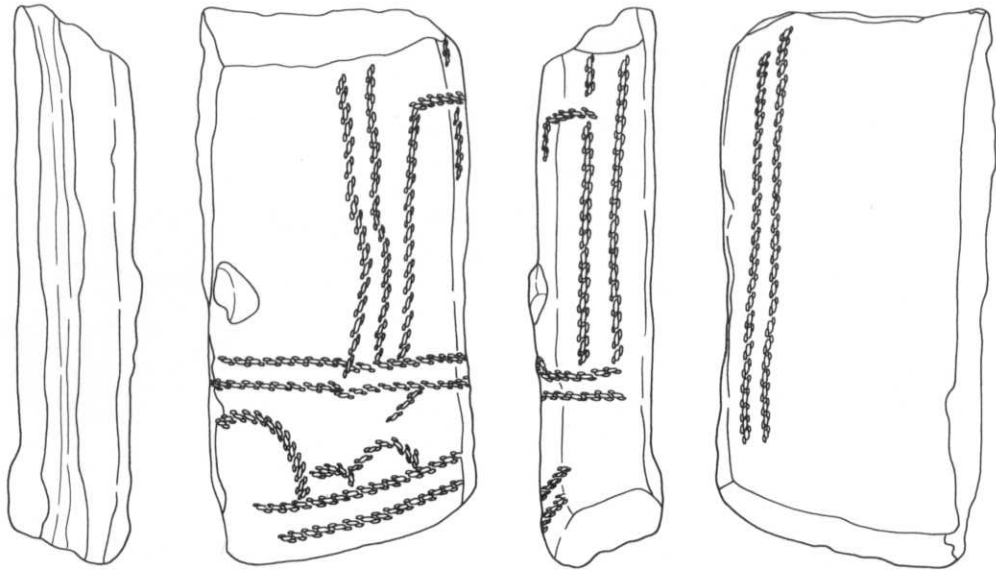
図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
82	VIII-Q-95	Ⅲ	82	57	43	236.0	珪頁	Pa		34753
83	〃	〃	31	32	42	35.2	〃	〃		34758
84	〃	〃	94	70	37	314.6	〃	〃		34761

27図 遺物包含層 (第Ⅲ層) 出土石器 (5)

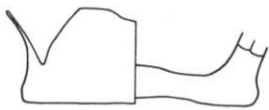


図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
85	VIII Q-95	III	84	87	48	374.6	流	Ia	焼け	35231
86	VIII P-95	〃	108	82	57	680.4	安	Ib	焼け?	35221
87	VIII Q-94	〃	(74)	(41)	58	(116.7)	凝	L	焼け	35217
88	VIII P-94	〃	(58)	(134)	(71)	(626.3)	安	〃	〃	35225
89	VIII Q-95	〃	(79)	(54)	(39)	(121.5)	凝	〃	焼け?	35230
90	〃	〃	(76)	100	(23)	(148.7)	〃	〃	砥石?	35216
91	VIII O-94	〃	(45)	(95)	58	(280.7)	安	O	焼け	35227

28図 遺物包含層 (第Ⅲ層) 出土石器 (6)



92



93



番号	出土地点	層位	計測値 (cm)			文様		分類	備考
			長さ	幅	厚さ	表面	裏面		
92	VIII P-94	III	(110)	(57)	27	LR押	LR押	土偶	中心に貫通孔

番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
93	VIII P-94	III			無文	成形痕		ミニチュア土器	

29図 遺物包含層（第Ⅲ層）出土土製品

### 第Ⅲ—3層出土遺物

#### (1)土器

土器はダンボール箱で3箱分出土した。すべて破片資料で、その多くは磨耗している。土器の時期は円筒下層d1式から榎林式までで、円筒上層d式が主体である。

##### ・第Ⅱ群土器

1～7は円筒下層d1式である。1は、断面に輪積み痕跡が明瞭に観察できる。2は口唇部が捲れるように外反する。口唇部と頸部に刺突が巡る。3は磨耗し文様はほとんど見えないが、横位と縦位の縄文原体で押圧される。4は斜位に細い貼付がある。5は蕨状の貼付（一部剥落する）後に縄文によって縦位と横位に、また口唇部にも斜位に押圧される。6も磨耗し、文様が観察できない。7は二又状の突起をもち（一方は欠損）、波頂部は王冠状に平坦となる。横位の貼付は剥落している。

##### ・第Ⅲ群土器

8・9は円筒上層b式である。8は波頂部には円形に、それ以下では縦位の貼付である。馬蹄形状の押圧はいずれもLによるものである。10～20は円筒上層d式である。これらの貼付はどれも細く、上面は無文である。10～16は無文地に貼付が付けられるものである。10は波状口縁の頂部下に橋状取っ手が付く。17～20は地文施文後に貼付が付けられるものである。17はLR、18～20は結束第一種が地文である。21は円筒上層e式である。22～24は概ね円筒上層d・e式に伴出するものと見られる。22は地文の他に擦痕（調整痕？）が斜位・縦位に観察される。25は口唇部に沿って、沈線が巡るもので、胴部にも2条単位で横走沈線が巡る。胴部は円筒上層e式の要素にも見られるが、口唇部の沈線から榎林式とした。

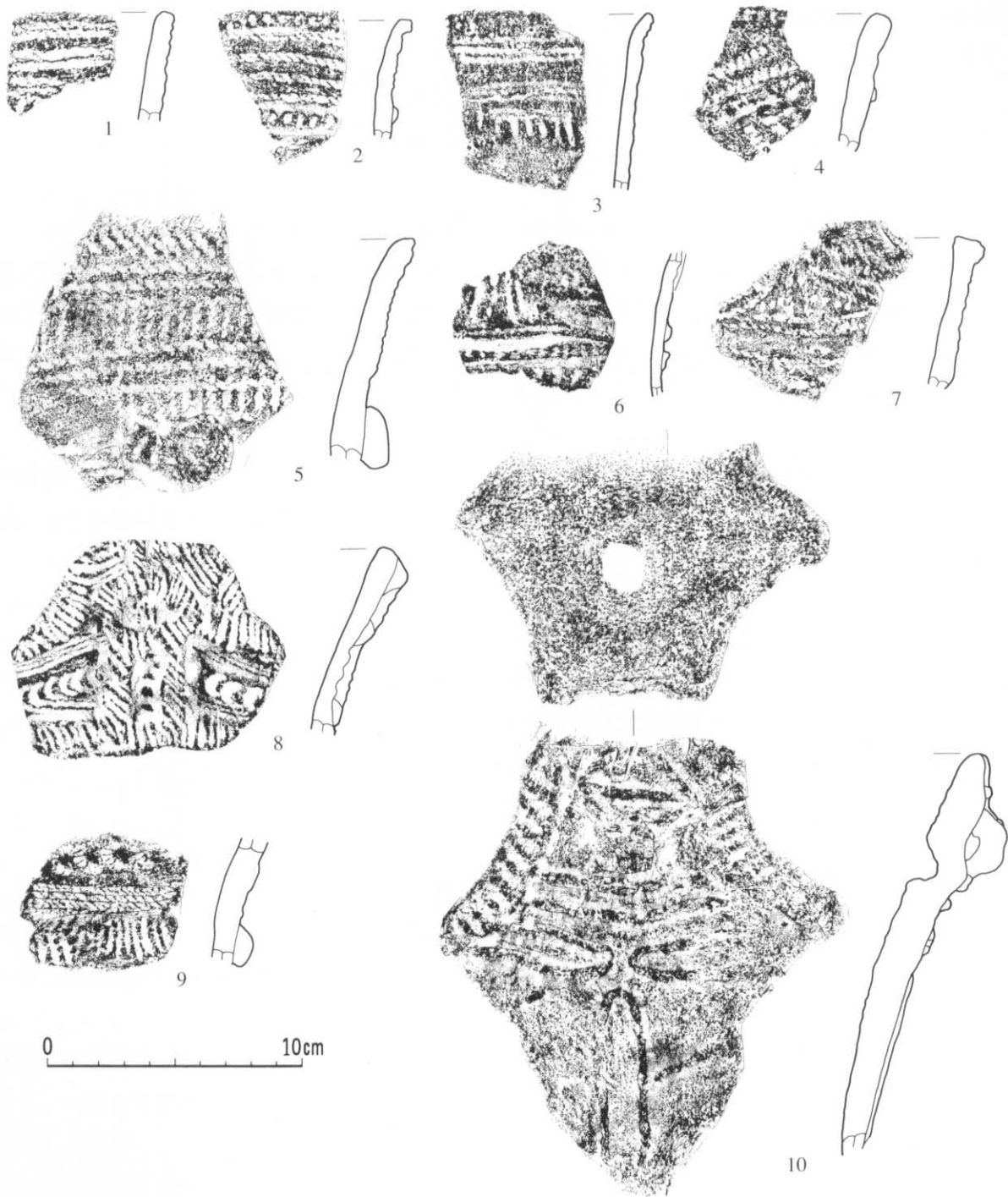
#### (2)石器

石鏃5点、石匙1点、石錐2点、スクレイパー類13点、R. フレイク18点、U. フレイク9点、原石2点、石核3点、剥片62点、磨製石斧破片2点、敲磨器類8点（うち凹痕主体3点、敲打痕主体2点、磨面主体3点）、台石・石皿類破片6点、計131点出土した。また他に礫が26点出土している。

45の側面の磨面は若干ざらついており、北海道式石冠の機能面に類似する。両面の磨面は礫の自然面より若干なめらかなもので、研磨加工の可能性はある。また上下両端には敲打痕がある。

#### (3)土製品

48はミニチュア土器の底部である。



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	VIII Q-94	III-3	L押			ミガキ		II-5-2	
2	VIII P-94	〃	口唇刺突、L押	隆帯(刺突)		〃		〃	
3	〃	〃	縄押					〃	磨耗
4	〃	〃	単絡1押、貼付			ミガキ		〃	
5	〃	〃	LR押、貼付(LR押)			〃		〃	
6	VIII P-95	〃	貼付、L?押			〃		〃	
7	VIII P-94	〃	L押、刺突			〃		〃	
8	VIII Q-94	〃	貼付(L押)、L・R押			〃		III-2	
9	〃	〃	〃			〃		〃	
10	VIII P-94	〃	LR押、貼付(橋状空手)	貼付		〃		III-4	

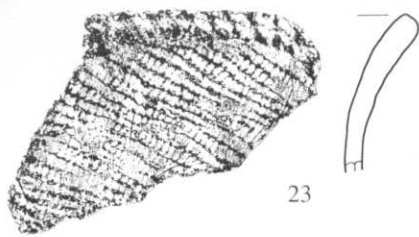
30図 遺物包含層(第III-3層)出土土器(1)



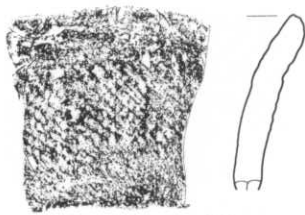
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
11	VIII P-94	III-3	縄?押、貼付			ミガキ		III-4	
12	〃	〃	〃			〃		〃	
13	〃	〃	LR押、貼付			〃		〃	
14	〃	〃		貼付		〃		〃	
15	〃	〃	貼付			〃		〃	
16	VIII Q-94	〃		貼付		〃		〃	
17	VIII P-94	〃		LR、貼付		〃		〃	
18	〃	〃		結束第一種、貼付		〃		〃	
19	〃	〃		〃		〃		〃	
20	〃	〃		〃		〃		〃	
21	〃	〃		LR?、沈線		〃		III-5	
22	〃	〃	LR、擦痕			〃		III-6	

31図 遺物包含層（第Ⅲ-3層）出土土器（2）





23



24

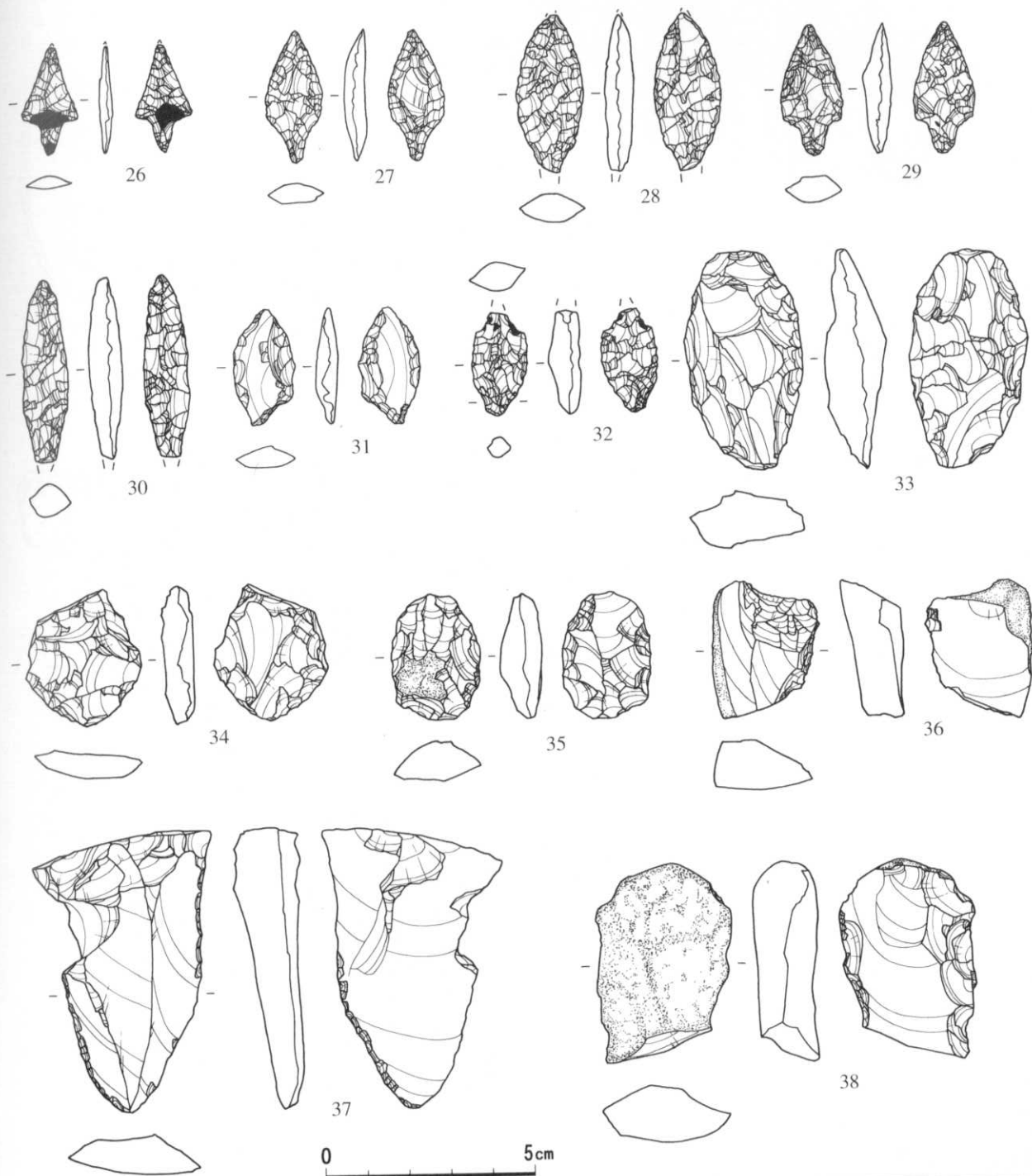


25

0 10cm

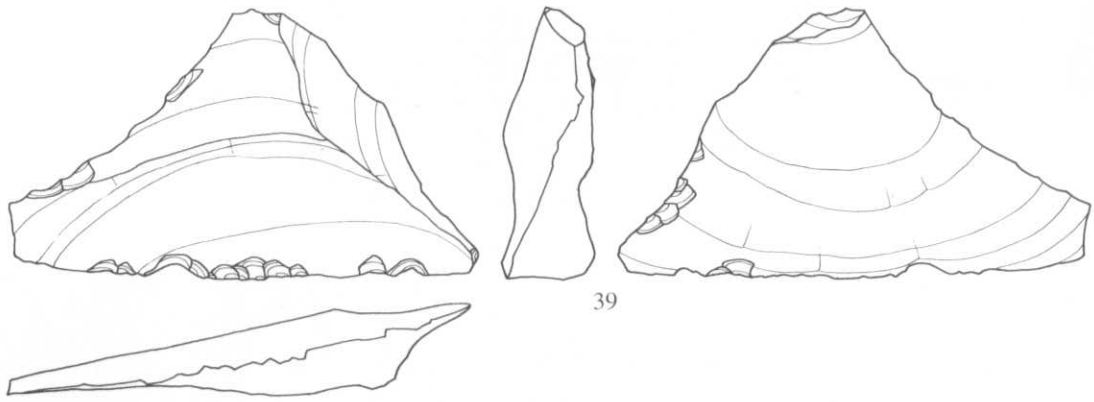
番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
23	VIII P-94	III-3	RL押、RL			ミガキ		III-6	
24	〃	〃	RL			〃		〃	
25	〃	〃	沈線	RL、沈線		〃		III-8	

32図 遺物包含層（第Ⅲ－3層）出土土器（3）

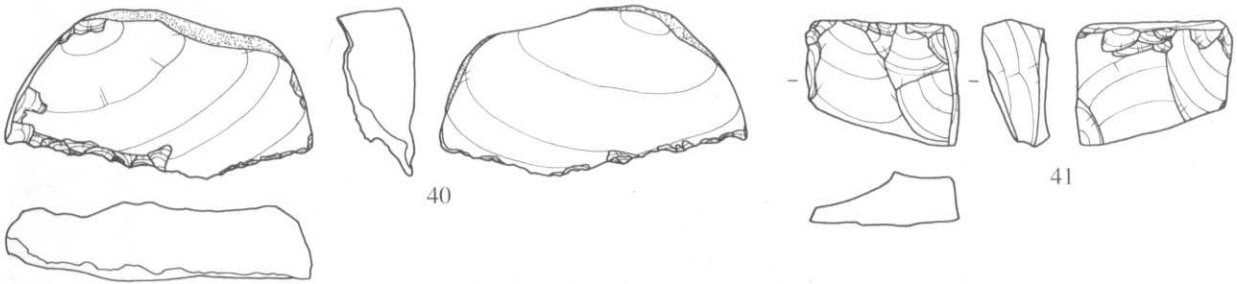


図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
26	VIII P-94	III-3	26	24	3	0.6	珪頁	Aa	アスファルト	37193
27	VIII Q-94	〃	32	14	5	1.9	〃	Ab	焼け	37255
28	〃	〃	(38)	16	7	(4.0)	〃	〃		37259
29	VIII P-94	〃	32	15	7	2.4	〃	〃	アスファルト	37194
30	VIII Q-94	〃	(44)	11	8	(3.6)	〃	Ac		37257
31	〃	〃	28	14	5	2.0	〃	Ab	未製品?	37258
32	〃	〃	(25)	13	7	(2.2)	〃	Dd	石鏃転用 アスファルト	37256
33	VIII P-94	〃	53	29	15	17.1	〃	Ga		33557
34	〃	〃	33	27	7	6.7	〃	〃		33552
35	〃	〃	30	21	10	7.3	〃	〃	両極剥片素材	33549
36	VIII Q-94	〃	33	21	15	11.8	〃	〃		33767
37	VIII P-94	〃	68	43	16	30.6	〃	〃		35169
38	VIII P-95	〃	48	33	15	23.4	〃	〃		34143

33図 遺物包含層 (第Ⅲ-3層) 出土石器 (1)

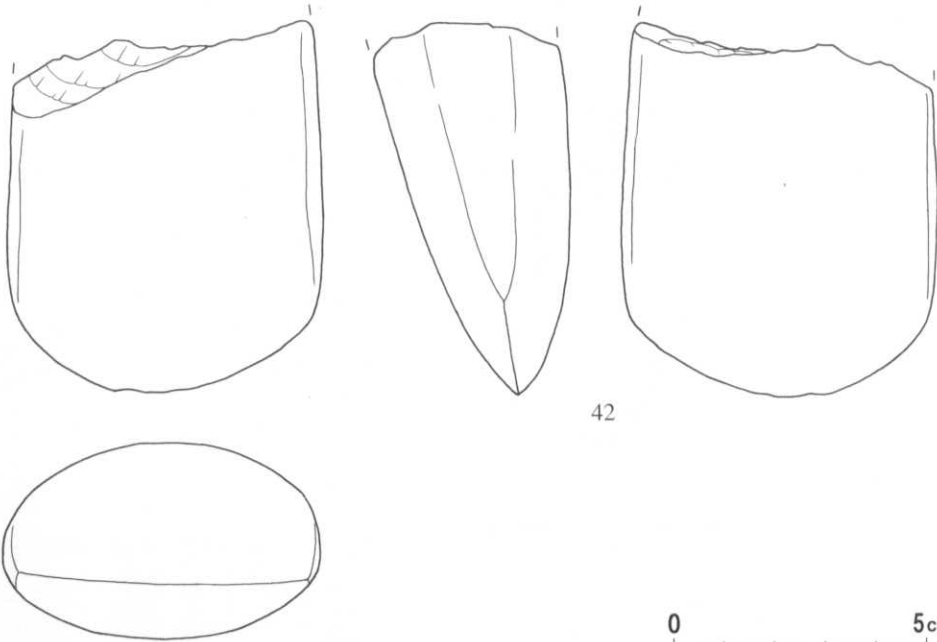


39



40

41



42

0 5cm

図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
39	VIII P-94	III-3	54	93	18	41.6	珪頁	Ga		33564
40	〃	〃	33	61	15	24.9	〃	〃		33562
41	〃	〃	25	31	13	11.3	〃	Pa		34863
42	VIII Q-95	〃	(74)	63	(39)	(234.8)	凝	Ha		35183

34図 遺物包含層 (第Ⅲ-3層) 出土石器 (2)



図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
43	VIII Q-94	III-3	126	59	32	286.8	安	Ia	焼酎 部分の黒変	35235
44	VIII P-95	〃	116	107	44	762.1	〃	Ib		35222
45	〃	〃	145	104	49	1012.3	〃	Ic		35223
46	VIII Q-94	〃	(53)	(54)	(32)	(114.4)	凝	L	焼酎	35229
47	VIII P-94	〃	(79)	(105)	(67)	(654.3)	安	〃	焼酎	35226

35図 遺物包含層（第Ⅲ-3層）出土石器（3）



48

番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
48	VIII P-94	III-3			無文	成形痕		ミニチュア土器	

36図 遺物包含層（第Ⅲ－3層）出土土製品

## 第Ⅱ層出土遺物

### (1)土器

土器は段ボール箱で9箱分出土した。いずれも破片資料で、復元できるものはない。縄文時代前期や中期の土器が若干含まれるが、主体となるのは中期末葉の大木10式併行期のものである。

#### ・第Ⅱ群土器

1は円筒下層d<sub>2</sub>式で、単軸絡条体1類の押圧と、縄文の末端刺突が施文される。

#### ・第Ⅲ群土器

2は円筒上層a式である。かなり磨耗している。3・4は円筒上層b式で、3は波頂部から平坦部への屈曲部分に楕円形の貼付がある。4は小型の土器である。5は円筒上層c式で磨耗が激しい。貼付の間に〔状の刺突が加えられる。口縁部の波頂部と見られ、横楕円形の貫通孔がある。6は円筒上層d式である。7は円筒上層d式またはe式で、口唇部に沿って粘土紐を貼り付けている。器面全体がナデられたようになっており、節まで観察できない。8・9は榎林式である。8は口縁部の突起がリング状で、口唇部に沿って凹状沈線が巡る。9は渦巻状の沈線が2条である。10~13は最花式で、10は横位のヒレ状突起がつく。11・12は地文施文後に逆U字状の沈線が施文され、さらにその内部に円形刺突が加えられる。12は刺突が3個以上である。13は2条の縦位沈線が施文される。14~46は大木10式併行期の土器である。14は全面に地文を施文した後波状に沈線が描かれる。15・16は磨消縄文で、15の地文は単軸絡条体1類、16は地文・沈線を施文した後、縦方向の刺突が加えられ、内面にはヒレ状突起が付く。17~19は頸部に横位沈線が巡る。17は地文が口縁部まで全面に入るが、18・19は沈線より上は無文帯となる。20・21は口縁部が無文帯で頸部に沈線が無いものである。20は口縁部直下の縄文は斜行するが、それ以下は縦走する。21は無文帯下にヒレ状突起と（磨耗が激しいが）縦走する縄文が施文される。22・23は折返口縁である。胴上半は地文施文後に沈線が加えられる。鋸歯状の文様構成になるのではないかと思われる。24~31は口縁の三角形の突起部である。24は口唇部に沿って沈線が巡る。折返口縁が意識されているのではないかと思われる。内面にはヒレ状突起が付く。25~27は外面が折返口縁である。25の胴部上半には波頂部の形状にわせて沈線が施文される。口縁部が内湾する器形である。26は斜位に沈線が入る。27は突起部がリング状である。内面も折返している。28は外面にリング状の貼り付けがある。内面も折返している。29は内外面に大振りなヒレ状突起が付く。その内側には貫通孔がある。30はリング状の突起が内外面から貼り付けたような形状で、頂部下には楕円形の沈線と刺突が施文される。内面は折返状である。31は突起部に貫通孔がある。32は逆U字状に貼り付けた粘土紐の頂部に円形の貼付で、上面には刺突が入る。また、縦の貼付に沿って長めの刻み目も付く。33~47は胴部片である。33~40は磨消縄文が施文されたものである。これらは円形やJ字状の文様構成になるものと思われる。33・34は縄文原体が観察できないほど磨耗している。35はLR、36~40はRLが地文である。41~46は地文を施文し、その上に沈線を加えるものである。41は鋸歯状の構成と思われる。42・43は縦位、44は縦と円形の組み合わせ、45は横位の沈線である。46は粘土紐を厚さ2~3mmで渦巻き状に貼り付けている。47は地文のみの口縁部である。48~54は底部片である。48~52は網代痕が付くもので、編み方はいずれも1本越え1本潜り1本送りと見られる。53は底面に5本の擦痕がある。うち2本は比較的深い。54は巻き上げ痕が明瞭に観察できる。

## (2)石器

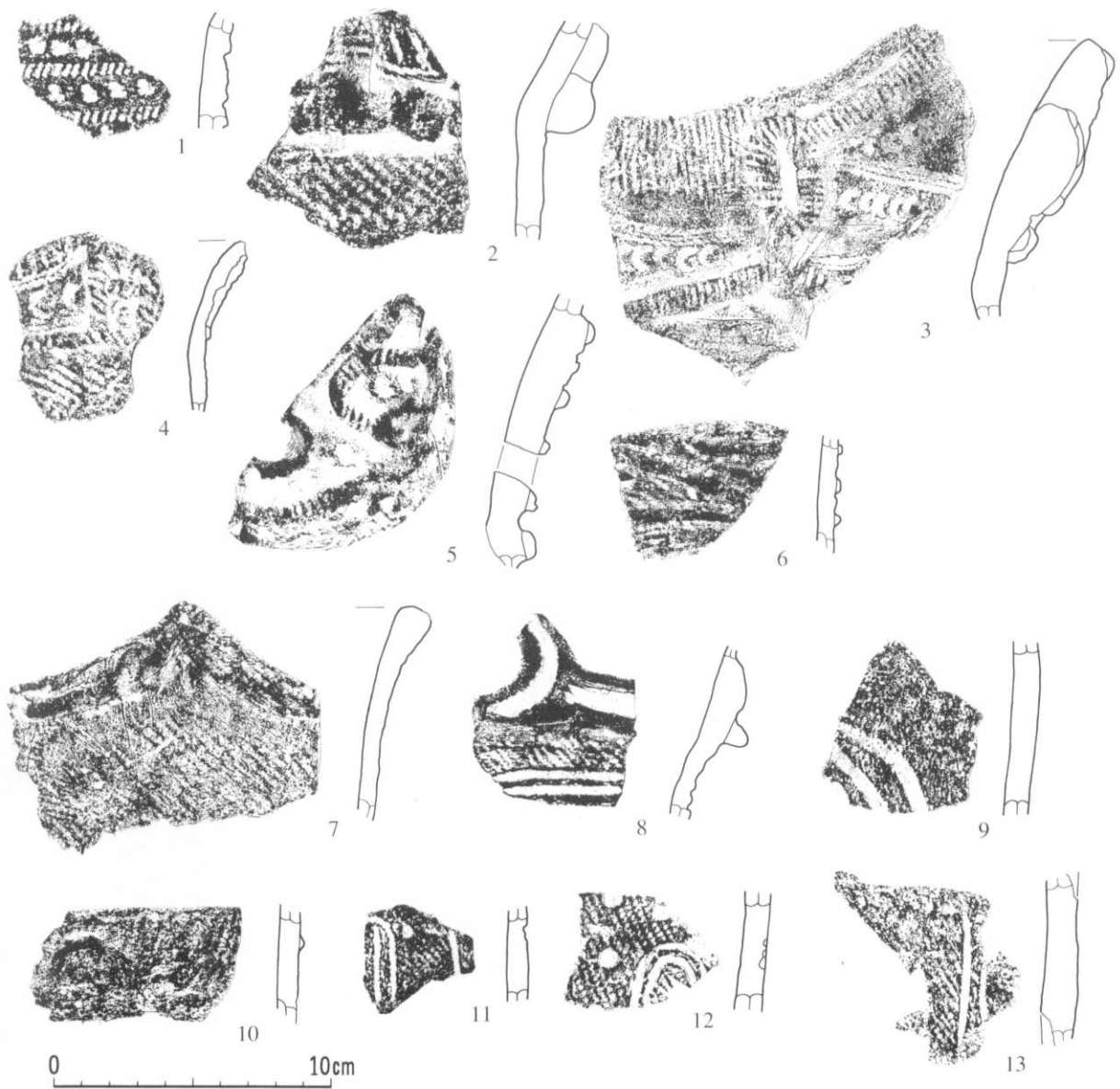
石鏃31点、石槍1点、石匙3点、石錐10点、スクレイパー類49点、ピエス・エスキュー1点、R・フレイク71点、U・フレイク36点、原石3点、石核5点、剥片294点、磨製石斧破片1点、敲磨器類57点（うち凹痕主体5点、敲打痕主体24点、磨面主体28点）、台石・石皿類破片53点、砥石9点（うち破片8点）、軽石2点、石棒破片1点、北海道式石冠1点、加工のある礫石器などその他とした石器3点、計631点出土した。また他に礫が189点出土している。

92・93は礫面を打面として横長の剥片をとり、末端を加工して刃部としたものである。97は小型のスクレイパー類にアスファルトが付着したものである。石器では石鏃・石匙以外のアスファルト付着例として重要である。

104は剥離加工によって刃部が形成された礫である。形状は小型の半円状扁平打製石器に類似するが、凝灰岩製で肉厚である。107は珪質頁岩を素材とした多面体を呈する敲石である。110は緑のある四角形の石皿の隅の部分の破片である。裏面の側面への立ち上がり部を細長く削り込んで屈曲を作り出している。

## (3)土製品

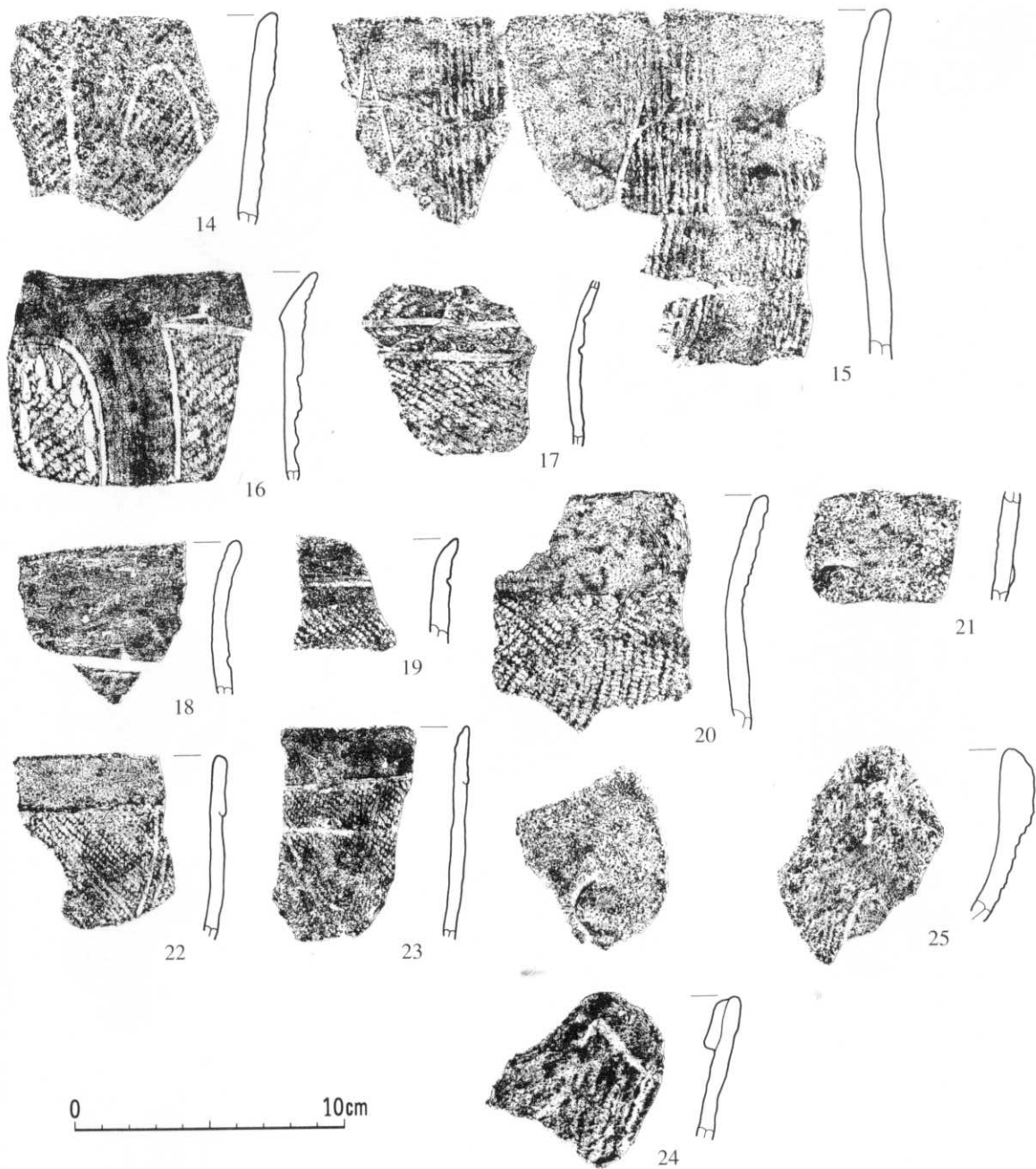
116～118はミニチュア土器の底部破片である。119は土偶の腕部破片で表面に原体押圧が施される。120は三角形土製品で、表面に刺突が施される。



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	VIII P-94	II	R単絡I押、刺突			ミガキ	II-5-2		
2	VIII P-96	〃	貼付(縄押)、L押	結束第一種(LR, RL)		〃	III-1		
3	VIII P-95	〃	貼付(L押)、L・R押			〃	III-2		
4	VIII P-94	〃	貼付(L押)、L押	結束第一種(LR, RL)		〃	〃		
5	VIII P-95	〃	貼付(縄押)、刺突、貫通孔			〃	III-3		
6	VIII P-94	〃		RL、貼付		〃	III-4		
7	〃	〃	貼付(RL?)	RL?		〃	III-4・5		
8	VIII P-96	〃	凹状沈線			〃	III-8		
9	〃	〃		LR?、沈線		〃	〃		
10	VIII Q-94	〃		縄文?、ヒレ状突起		〃	III-9		
11	〃	〃		RL、刺突、沈線		〃	〃		
12	VIII P-94	〃		〃		〃	〃		
13	〃	〃			RL?、沈線	〃	〃		

37図 遺物包含層(第II層)出土土器(1)





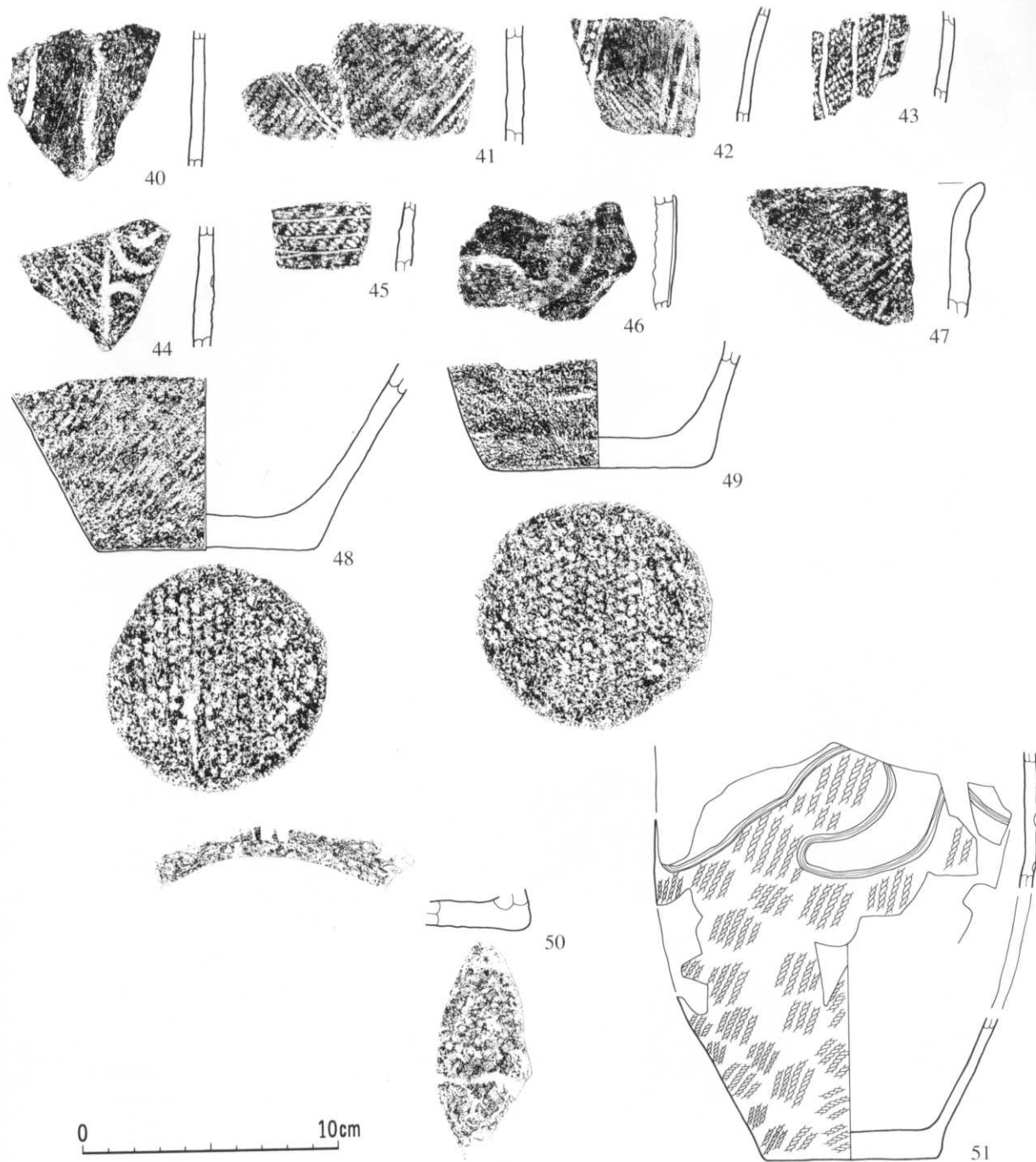
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
14	VIII P-95	II	RL、沈線			ミガキ		III-10	
15	VIII Q-94	〃	L単絡1、沈線、磨消			〃		〃	
16	VIII P-94	〃	沈線、LR磨消、刺突			〃		〃	内面にヒレ状突起
17	VIII Q-95	〃	LR、沈線			〃		〃	
18	VIII P-95	〃	無文帯、沈線			〃		〃	
19	〃	〃	〃	RL		〃		〃	
20	〃	〃	無文帯	〃		〃		〃	
21	〃	〃	〃	ヒレ状突起、縄文?		〃		〃	
22	VIII P-94	〃	折返口縁	RL、沈線		ミガキ		〃	
23	VIII P-95	〃	〃	〃		〃		〃	
24	VIII Q-95	〃	沈線、RL			〃		〃	内面にヒレ状突起
25	VIII P-95	〃	折返口縁、沈線			〃		〃	

38図 遺物包含層（第II層）出土土器（2）



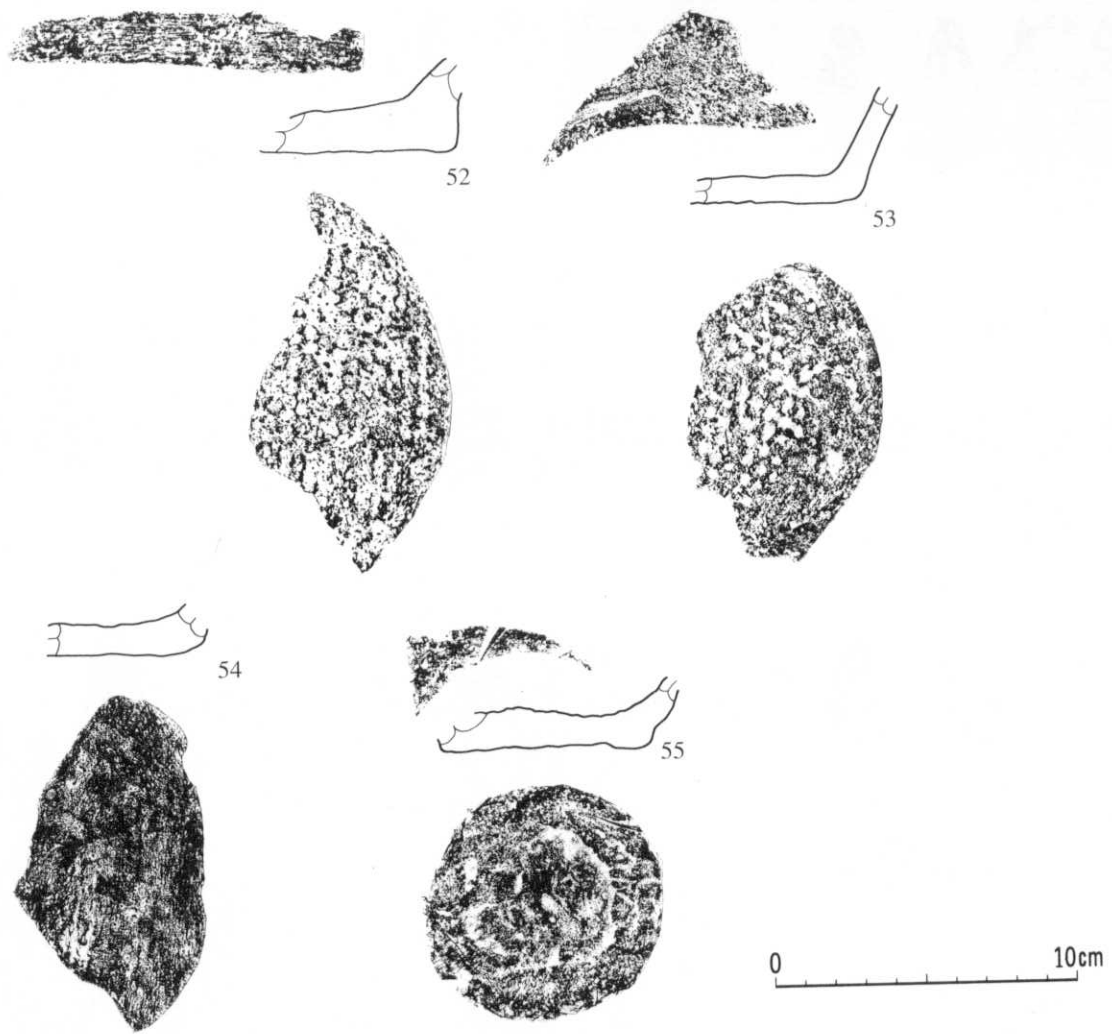
番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
26	VIII P-94	II	折返口縁	沈線		ミガキ	III-10		
27	〃	〃	折返口縁、環状突起			〃	〃	内面半折返状	
28	VIII Q-94	〃	環状貼付			〃	〃	〃	
29	〃	〃	ヒレ状突起、貫通孔、沈線			〃	〃	内面半ヒレ状突起	
30	VIII P-94	〃	環状突起、沈線、刺突			〃	〃	内面半折返状	
31	〃	〃	環状突起			〃	〃		
32	VIII P-95	〃	貼付(刺突)、刺突			〃	〃		
33	VIII P-94	〃		沈線、磨消縄文		〃	〃		
34	VIII Q-95	〃		〃		〃	〃		
35	VIII P-94	〃		沈線、LR磨消		〃	〃		
36	VIII P-95	〃		沈線、RL磨消		〃	〃		
37	VIII P-94	〃		〃		〃	〃		
38	VIII P-95	〃		〃		〃	〃		
39	〃	〃		〃		〃	〃		

39図 遺物包含層(第II層)出土土器(3)



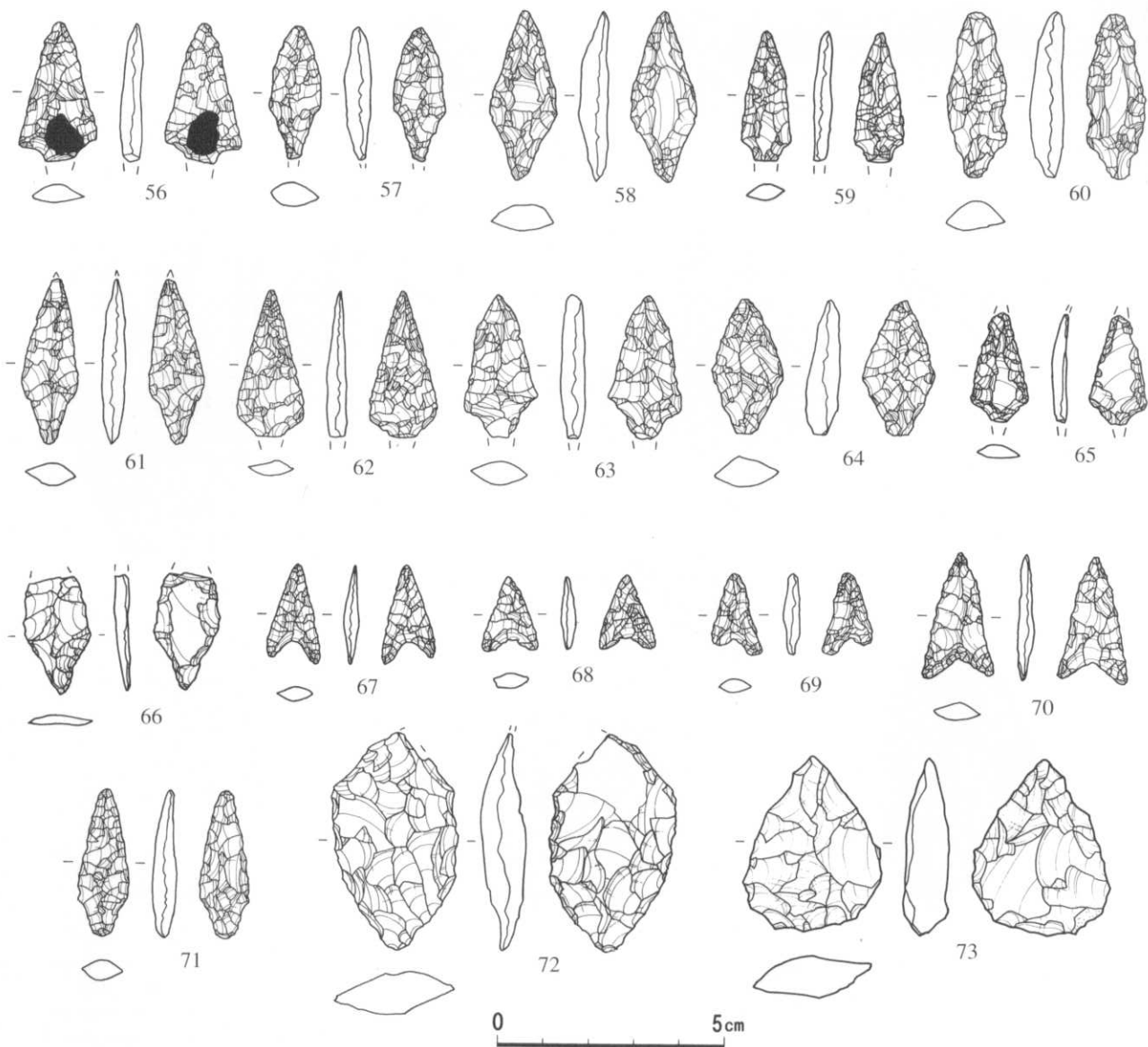
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
40	VIII P-94	II		沈線、RL磨消			III-10		
41	〃	〃		LR、沈線		ミガキ	〃		
42	VIII Q-95	〃		RL、沈線		〃	〃		
43	VIII P-94	〃		LR、沈線		〃	〃		
44	VIII P-95	〃		RL?、沈線		〃	〃		
45	VIII P-94	〃		LR、沈線		〃	〃		
46	VIII P-95	〃		渦巻状に貼付		〃	〃	裏面剥離	
47	〃	〃	LR			〃	III-11		
48	VIII P-94	〃			RL	〃	網代痕		
49	VIII Q-95	〃			縄文	〃	〃		
50	VIII Q-94	〃			無文	〃	〃		
51	〃	〃		RL磨消			III-10		

40図 遺物包含層(第II層)出土土器(4)



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
52					無文	ミガキ	網代痕	Ⅲ-11	
53					〃	〃	〃	〃	
54						〃	5条の擦痕	〃	
55					無文	〃	無文	〃	底面卷上げ痕

41図 遺物包含層（第Ⅱ層）出土土器（5）



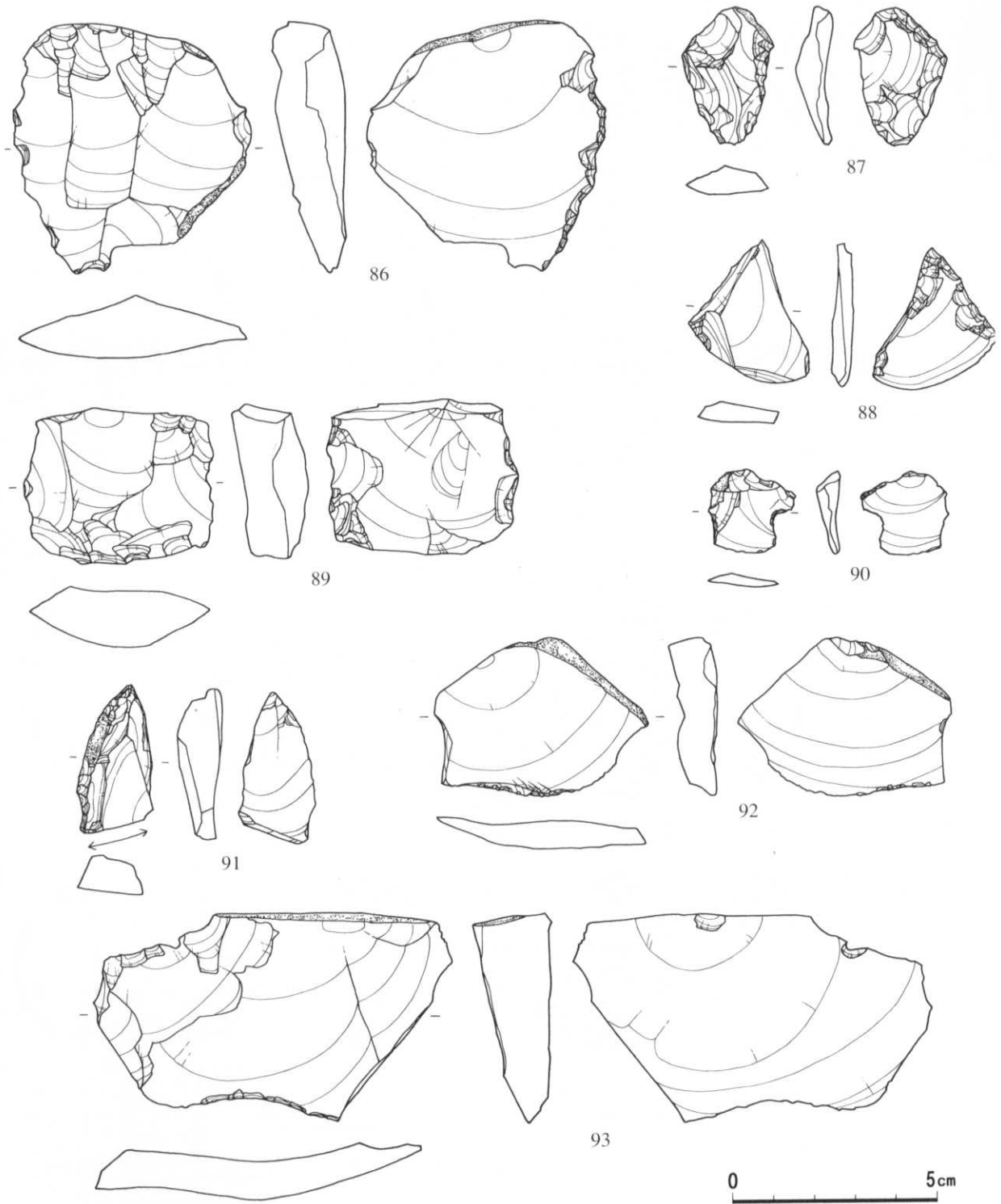
図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
56	VIII P-95	II	(31)	17	5	(2.0)	珪頁	Aa	アスファルト	37208
57	VIII P-94	〃	(29)	11	5	(1.6)	〃	Ab		37185
58	〃	〃	38	14	6	2.8	〃	〃		37188
59	VIII P-95	〃	(29)	11	4	(1.2)	〃	〃		37205
60	VIII Q-95	〃	36	13	7	3.0	〃	〃	未製品?	37277
61	VIII P-94	〃	36	12	5	1.7	〃	〃		37189
62	VIII Q-95	〃	(32)	15	4	(1.6)	〃	〃		37274
63	VIII P-95	〃	(31)	16	5	(2.3)	〃	〃	アスファルト	37206
64	VIII P-94	〃	30	16	7	2.6	〃	Ac		37187
65	VIII Q-95	〃	(24)	13	3	(0.8)	〃	Ab		37276
66	VIII P-94	〃	(25)	15	3	(1.1)	〃	〃	未製品?	33448
67	VIII P-95	〃	22	12	3	0.5	玉珪	Af		37224
68	〃	〃	16	12	3	0.4	〃	〃		37203
69	VIII Q-95	〃	18	11	3	0.4	珪頁	〃		37275
70	VIII P-95	〃	28	16	4	1.1	〃	〃		37204
71	VIII P-94	〃	33	11	5	0.4	〃	Ab		37184
72	VIII Q-95	〃	(48)	28	10	(10.7)	〃	Ba		34584
73	〃	〃	39	31	10	10.3	〃	〃	スクレイパー類?	34565

42図 遺物包含層 (第II層) 出土石器 (1)



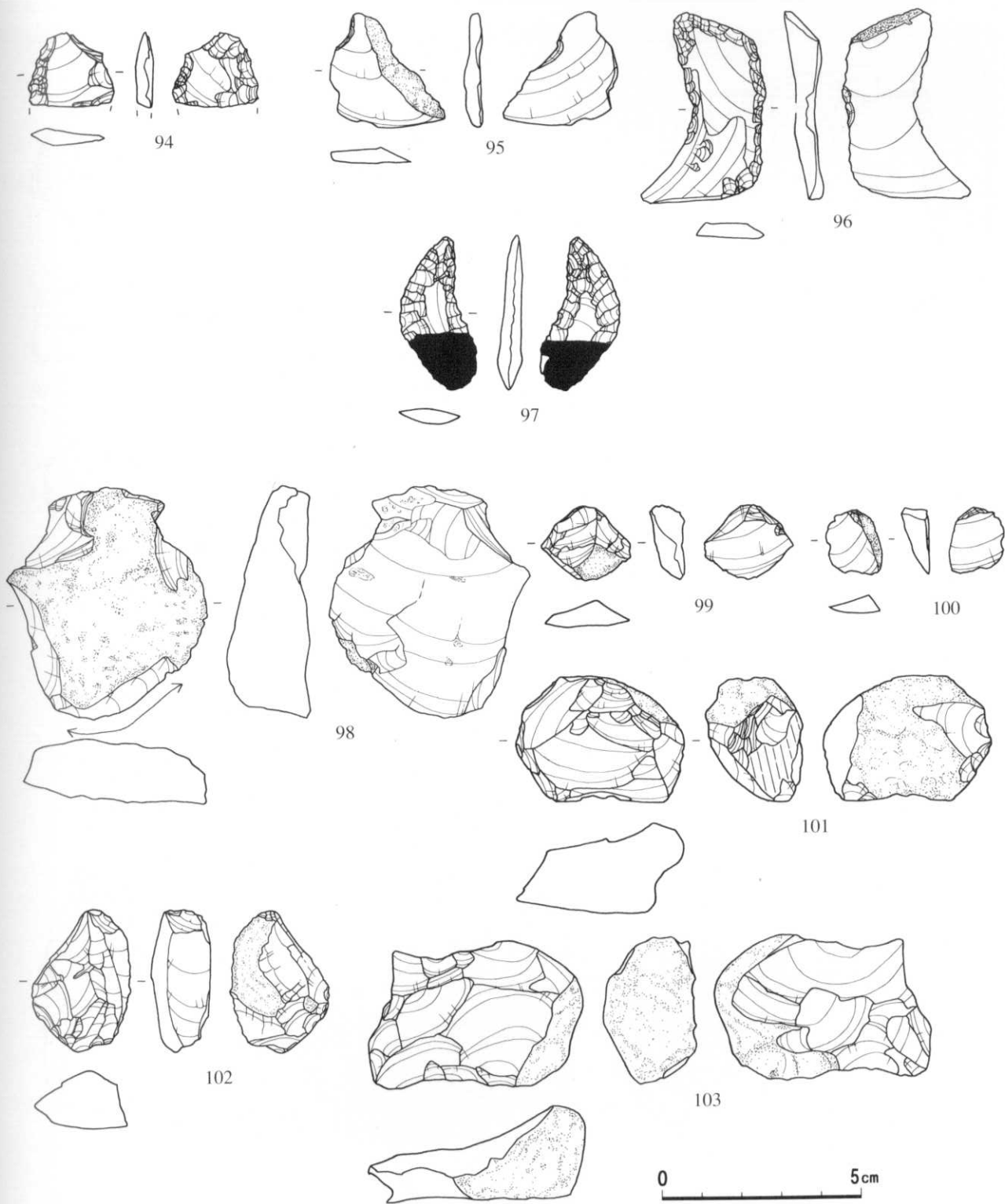
図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
74	VIII P-95	II	50	32	9	14.2	珪頁	Ca		34033
75	VIII Q-95	〃	(45)	16	(16)	(8.5)	〃	Da	焼け	35174
76	〃	〃	40	33	13	11.2	〃	〃	尖端磨耗	34513
77	〃	〃	38	23	10	5.5	〃	〃		34510
78	VIII P-96	〃	30	27	8	4.7	〃	〃		34838
79	VIII P-94	〃	42	24	9	7.7	〃	Gb	石錐?	33438
80	VIII Q-95	〃	54	25	12	17.2	〃	〃		34564
81	VIII P-94	〃	57	33	10	15.5	〃	Ga		35170
82	VIII Q-94	〃	50	23	9	7.0	〃	〃		33608
83	VIII P-95	〃	43	26	9	7.4	〃	〃		37220
84	〃	〃	44	35	12	20.6	〃	〃		34015
85	VIII P-94	〃	36	21	8	5.2	〃	〃		33481

43図 遺物包含層 (第II層) 出土石器 (2)



図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
86	VIII P-94	II	62	59	18	53.0	珪質	Ga		33509
87	VIII Q-95	〃	29	23	9	5.4	〃	〃		34534
88	VIII P-95	〃	35	30	5	4.4	〃	Gb		34030
89	VIII P-96	〃	38	47	18	32.9	〃	Ga		34849
90	〃	〃	20	21	6	1.7	〃	〃	石匙?	34834
91	VIII Q-94	〃	37	19	11	6.6	黒	〃		33672
92	〃	〃	39	52	12	15.7	珪質	〃		33679
93	VIII P-95	〃	51	88	19	48.3	〃	〃		34063

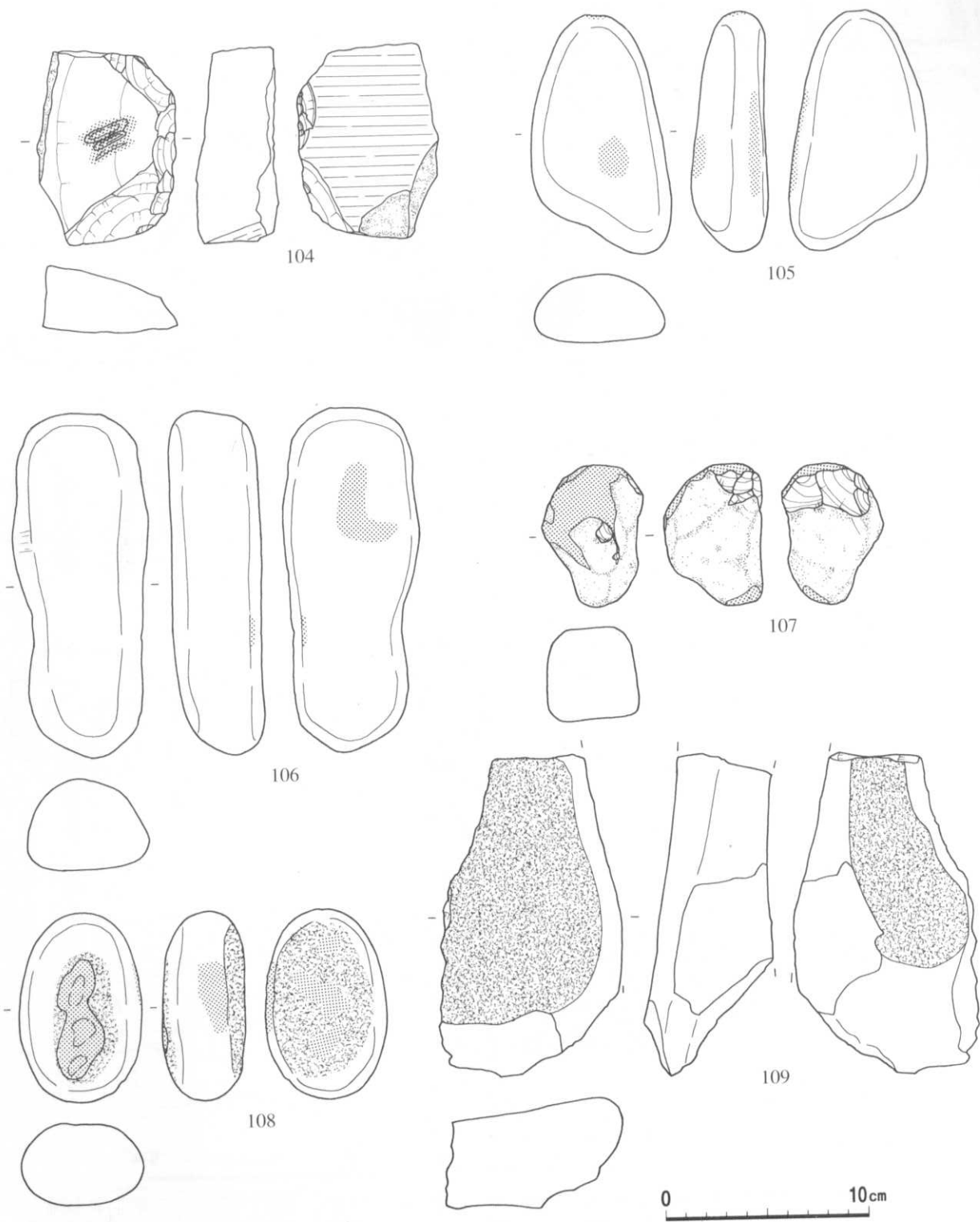
44図 遺物包含層 (第II層) 出土石器 (3)



図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
94	VIII P-94	II	(19)	22	4	(1.7)	珪頁	Ga		33470
95	VIII Q-94	〃	29	29	4	2.9	〃	Gb	石匙?	33659
96	VIII P-94	〃	48	32	9	8.4	〃	Ga	異形石器?	33476
97	VIII Q-94	〃	18	38	6	2.9	〃	Ga	〃	37252
98	VIII P-96	〃	59	51	21	46.5	黒	Pc		37246
99	VIII P-94	〃	19	22	8	2.4	〃	〃		37186
100	〃	〃	17	14	7	1.1	〃	〃		33453
101	VIII Q-95	〃	32	43	24	32.3	珪頁	Pa		34588
102	VIII P-94	〃	36	25	15	13.5	〃	〃	両極石核 ビエス・エスキーエ	33447
103	VIII P-95	〃	37	54	23	39.8	〃	〃		34059

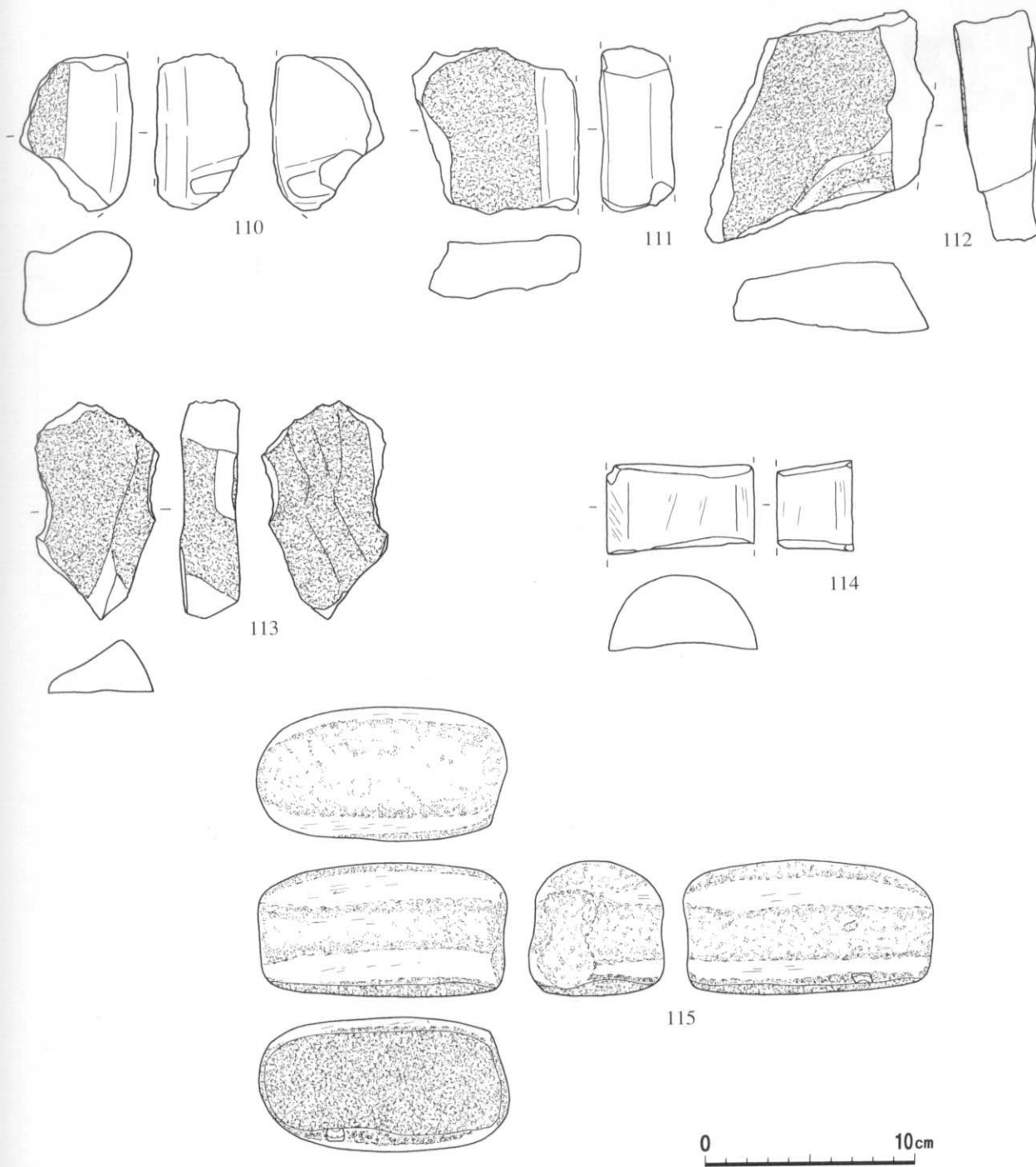
45図 遺物包含層 (第II層) 出土石器 (4)





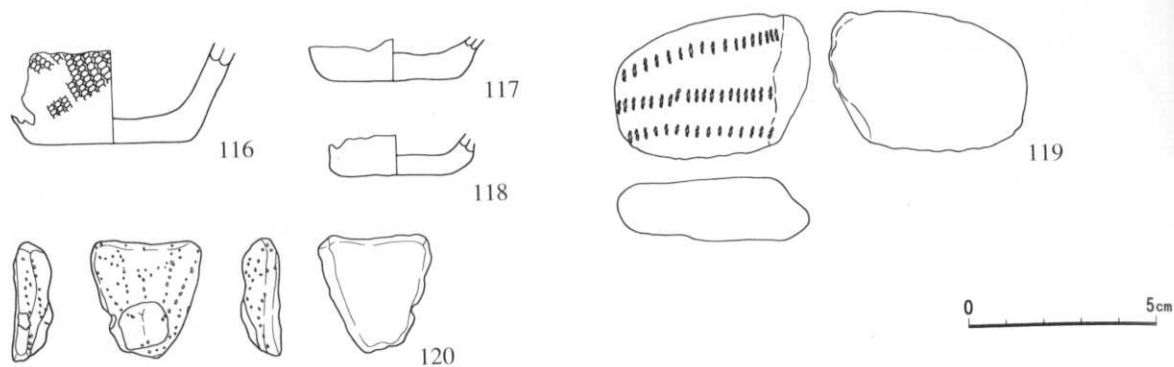
図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
104	VIII P-95	II	97	69	40	288.2	凝	Q	磔器?	35210
105	VIII P-94	〃	118	68	37	395.7	安	Ib		35205
106	VIII P-96	〃	170	67	46	649.1	流	〃		35212
107	VIII P-95	〃	70	50	48	200.9	珪頁	〃		32968
108	〃	〃	94	60	41	298.4	流	Ia		35207
109	〃	〃	(159)	(91)	(64)	(895.5)	溶凝	Sb		35209

46図 遺物包含層 (第II層) 出土石器 (5)



図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
110	VIII Q-94	II	(75)	(54)	(45)	(127.8)	凝	L	焼付	35217
111	VIII P-95	〃	(79)	(79)	(35)	(219.9)	〃	〃		35206
112	VIII P-94	〃	(111)	(109)	39	(470.0)	〃	Sb		35211
113	VIII Q-95	〃	103	59	29	125.5	流	〃		35215
114	VIII P-94	〃	(43)	71	(36)	(149.9)	安	M	焼付	35203
115	〃	〃	64	119	64	878.9	〃	O		35213

47図 遺物包含層 (第II層) 出土石器 (6)



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
116	VIII P-94	II			RL	成形痕		ミニチュア土器	
117	VIII P-96	II			無文	成形痕		ミニチュア土器	
118	VIII P-94	II			無文	成形痕		ミニチュア土器	

番号	出土地点	層位	計 測 値 (cm)			文 様		分類	備 考
			長 さ	幅	厚 さ	表 面	裏 面		
119	VIII P-96	II	(38)	(52)	17	単絡1押圧?	無文	土偶	腕部

番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	分 類	備 考	整理番号
120	VIII P-96	II	(32)	30	11	7	三角形土製品		

48図 遺物包含層（第Ⅱ層）出土土製品

### 第3節 遺構外の出土遺物

ここでは、遺構外出土遺物として第I層からの出土遺物と、第6次調査区壁面が崩落した際に採集した遺物を取り上げることにする。

#### 第I層出土遺物

##### (1)土器

###### ・第II群土器

1・2は円筒下層d<sub>2</sub>式で、縄文原体の押圧がある口縁部片である。2にはc字状の押圧もある。

###### ・第III群土器

3～5は円筒上層a式である。縄文原体押圧により施文される。3は横位と縦位、4は横位とノ状、5は横位と鋸歯状である。6・7は円筒上層b式である。7は口唇部に波状の貼付が巡る。8は円筒上層a式又はb式で、文様帯と胴部の境付近である。9は円筒上層c式で、口唇部に沿って波状の貼付、さらにその間に刺突が施文される。10～12は円筒上層d式である。10は波状口縁の頂部で、円形の貫通孔がある。11・12は無文面に粘土紐が貼付けられる。13は円筒上層e式で、磨耗しているため地文の有無は不明であるが、口縁部に横位沈線が巡る。14は結束第一種で、円筒上層式系である。15～18は榎林式である。15・16は地文施文後、口唇部に沿って横位沈線が巡り、15の胴部上半にはカギ状の沈線がある。17は地文施文後、縦位・カギ状?・円形の沈線が施文される。18は2条の円形の沈線下に連結する縦位沈線が観察される。19・20は最花式である。19は口縁部に無文帯、20は地文施文後縦位沈線である。21～38は大木10式併行期の土器である。21～25は口縁部片で、21・22は無文帯となるもので、21の内面にはヒレ状突起が付く。23は沈線で口縁部の無文帯と胴部を区画している。24・25は波状口縁で、24は口唇部に沿って貼付が巡り、その上部には刺突が施文される。さらに波頂部から縦に貼付が垂下し、それに沿って刺突がある。25は口唇部に沿って、また、波頂部から縦に沈線が施文される。刺突は沈線に沿うように、口唇部と縦位沈線脇に施文される。26～38は胴部片である。ただし、後期初頭の土器群と一部混同している可能性もある。26～33は磨消縄文が観察されるものである。いずれも沈線で区画し、内側に縄文を充填している。J字状や円形状の文様構成になるのであろう。34・35は同様のモチーフと思われるものであるが、地文地に沈線が加えられるものである。36・37は磨耗しており明らかでない点もあるが、沈線のみが施文されたように見える。

###### ・第IV群土器

39～41は後期初頭の土器である。ただし、胴部片は中期末のものと混同している可能性がある。39は二又状の突起が付く口縁部で、突起からそれぞれ貼付が垂下し、上面には密に刺突が入る。40は磨消縄文が施文されたもので、縦位に区画された横に円形の沈線による文様モチーフと考えられる。41は細く密な単軸絡条体1類を施文後、沈線が施文されたものである。

42は第III群あるいは第IV群土器の底部片である。底面に網代痕が観察される。

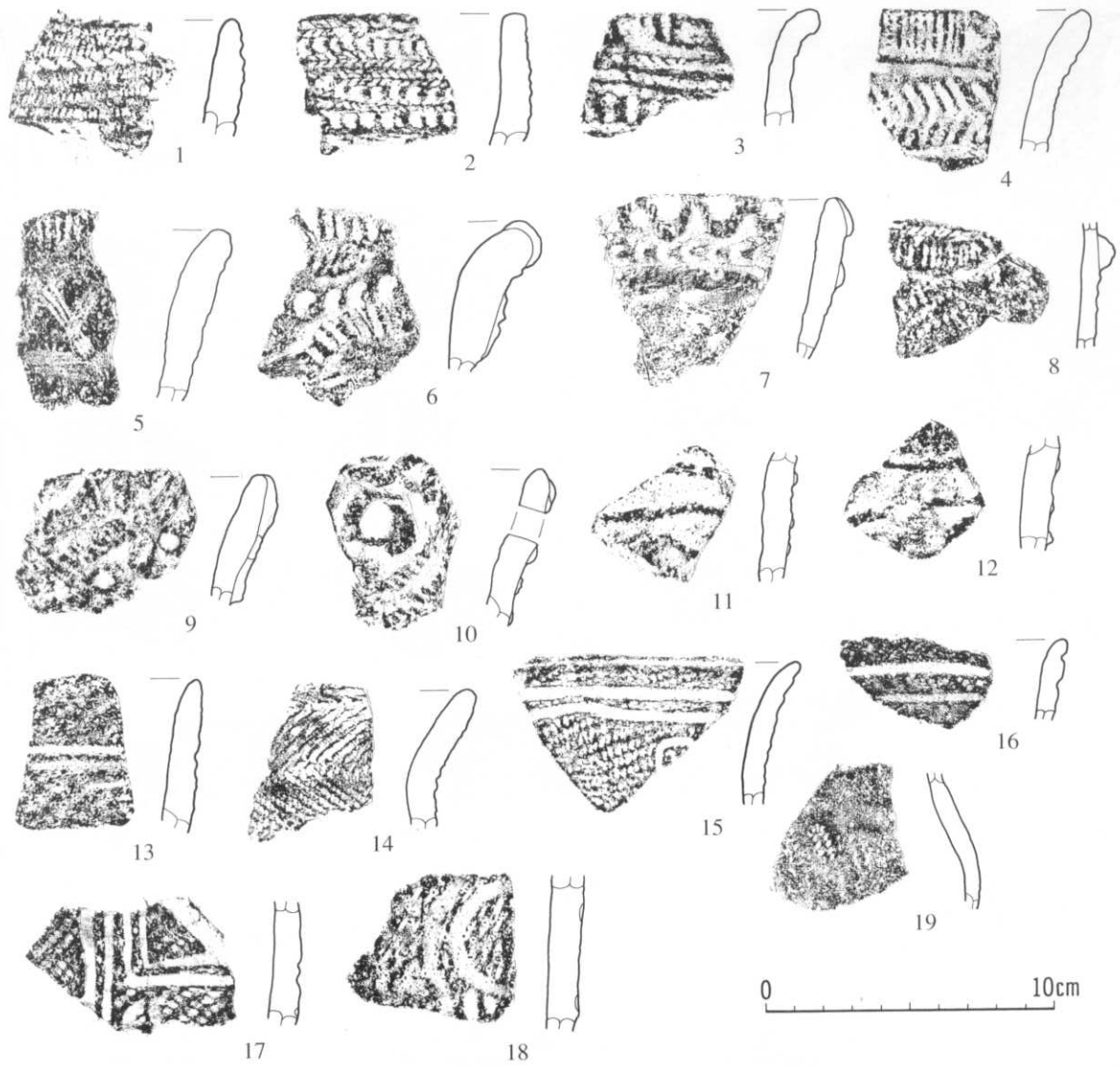
## (2)石器

石鏃36点、石槍1点、石匙5点、石錐20点、スクレイパー類72点、ピエス・エスキーユ2点、R. フレイク133点、U. フレイク80点、原石2点、石核8点、剥片538点、異形石器3点、磨製石斧7(うち破片6)点、敲磨器類38点(うち凹痕主体点3、敲打痕主体14点、磨面主体21点)、台石・石皿類破片25点、砥石12(うち破片11点)点、石棒破片1点、軽石1点、計984点出土した。また他に礫が322点出土している。

石鏃は定形石器の中で最も多い。有茎石鏃のアスファルトは通常は基部を中心としたものであるが、44の裏面は内側に湾曲して窪む部分があるためか、窪みに沿って先端に近い部分までアスファルト痕が残る。86は黒曜石製で、抉り部分を中心に加工が施されている。礫皮が残り、小型であるが厚みがあり、非実用的な石器の可能性もある。95は四角形の石皿の隅の部分の破片であるが、欠損面を中心にアスファルトと考えられる黒色付着物が残っている。

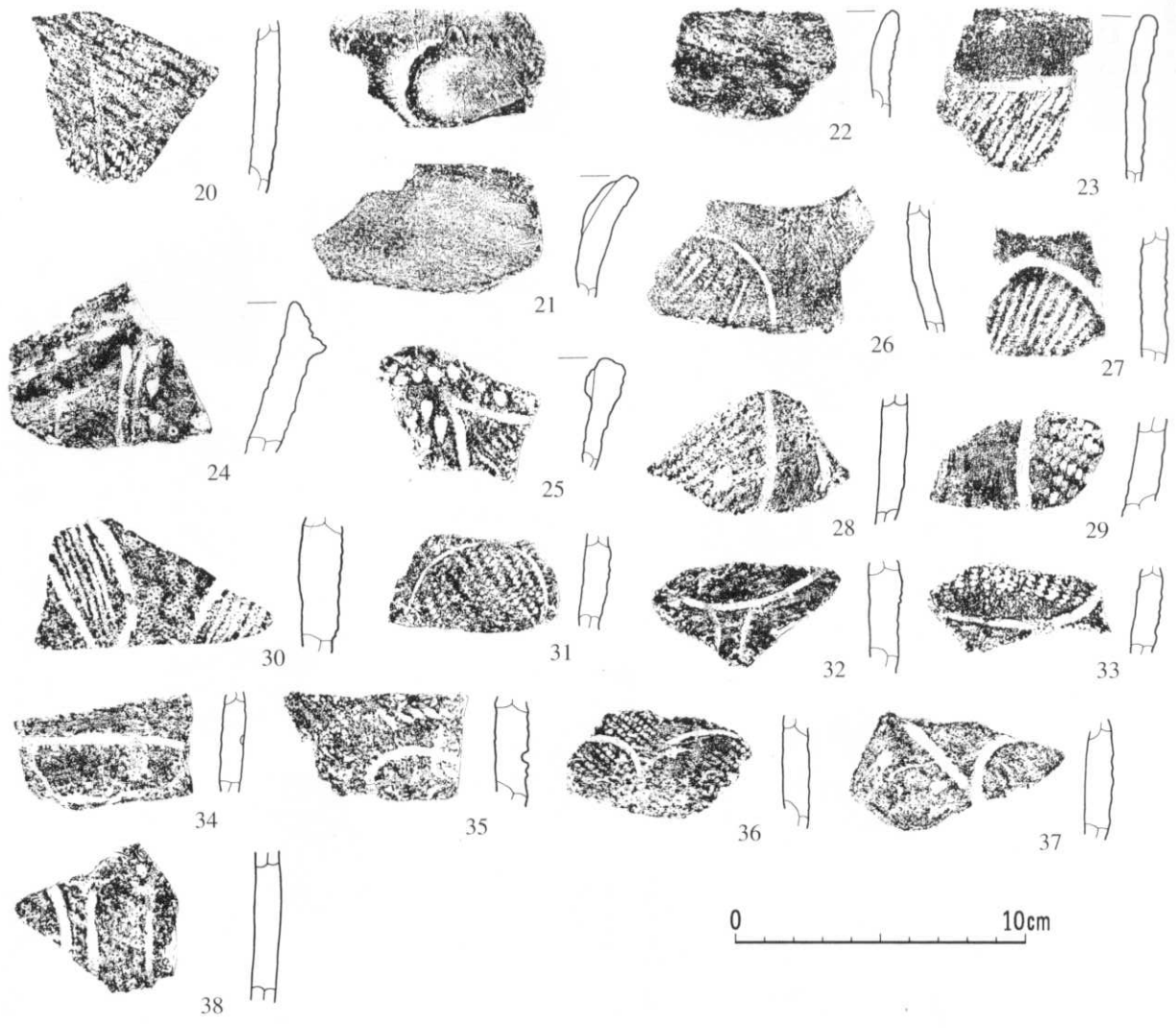
## (3)土製品

99～101はミニチュア土器の底部破片である。102は三角形土製品の破片で沈線により施文される。



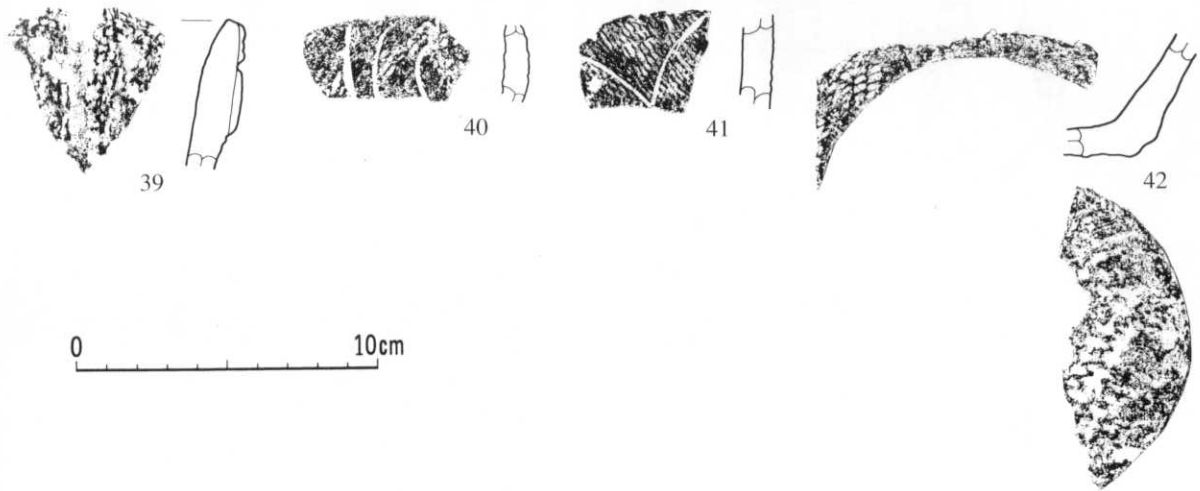
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	VIII O-94	I	R単絡1押			ミガキ	II-5-2		
2	VIII P-96	〃	L・R押、刺突			〃	〃		
3	VIII P-95	〃	LR押			〃	III-1		
4	〃	〃	〃			〃	〃		
5	〃	〃	L押			〃	〃		
6	〃	〃	貼付(L押)、縄文馬蹄形押			〃	III-2		
7	〃	〃	貼付(縄押)、R?馬蹄形押			〃	〃	磨耗	
8	VIII O-94	〃	貼付(R押)、R押			〃	III-1・2		
9	〃	〃	貼付(縄押)、刺突			〃	III-3		
10	VIII P-94	〃	貼付(刻み)、貫通孔			〃	III-4		
11	〃	〃		貼付		〃	〃		
12	〃	〃		〃		〃	〃		
13	VIII P-95	〃	沈線			〃	III-5	磨耗	
14	VIII P-94	〃	結束第一種(LR, RL)			〃	III-6		
15	VIII O-94	〃	LR、沈線			〃	III-8		
16	VIII P-96	〃	RL、沈線			〃	〃		
17	VIII O-94	〃		RL、沈線		〃	〃		
18	VIII P-96	〃		RL?、沈線		〃	〃	磨耗	
19	VIII P-95	〃	無文帯	RL		〃	III-9		

49図 遺構外出土土器(第I層)(1)



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
20	VIII P-95	I			RL、沈線	ミガキ	III-9		
21	〃	〃	無文帯			〃	III-10	内面ヒレ状突起	
22	VIII O-95	〃	〃			〃	〃		
23	VIII P-94	〃	無文帯、沈線、RL			〃	〃		
24	VIII P-95	〃	貼付、刺突、沈線			〃	〃		
25	〃	〃	沈線、刺突			〃	〃	内面にヒレ状突起	
26	〃	〃		沈線、RL磨消		〃	〃		
27	VIII P-94	〃		〃		〃	〃		
28	VIII O-94	〃		沈線、LR磨消		〃	〃		
29	VIII P-94	〃		〃		〃	〃		
30	VIII P-95	〃		沈線、単絡1?磨消		〃	〃		
31	〃	〃		沈線、RL磨消		〃	〃		
32	〃	〃		沈線、LR磨消		〃	〃		
33	〃	〃		〃		〃	〃		
34	〃	〃		沈線、RL磨消		〃	〃		
35	〃	〃		RL、沈線		〃	〃		
36	〃	〃		〃		〃	〃	磨耗	
37	〃	〃		沈線		〃	〃	〃	
38	〃	〃		〃		〃	〃		

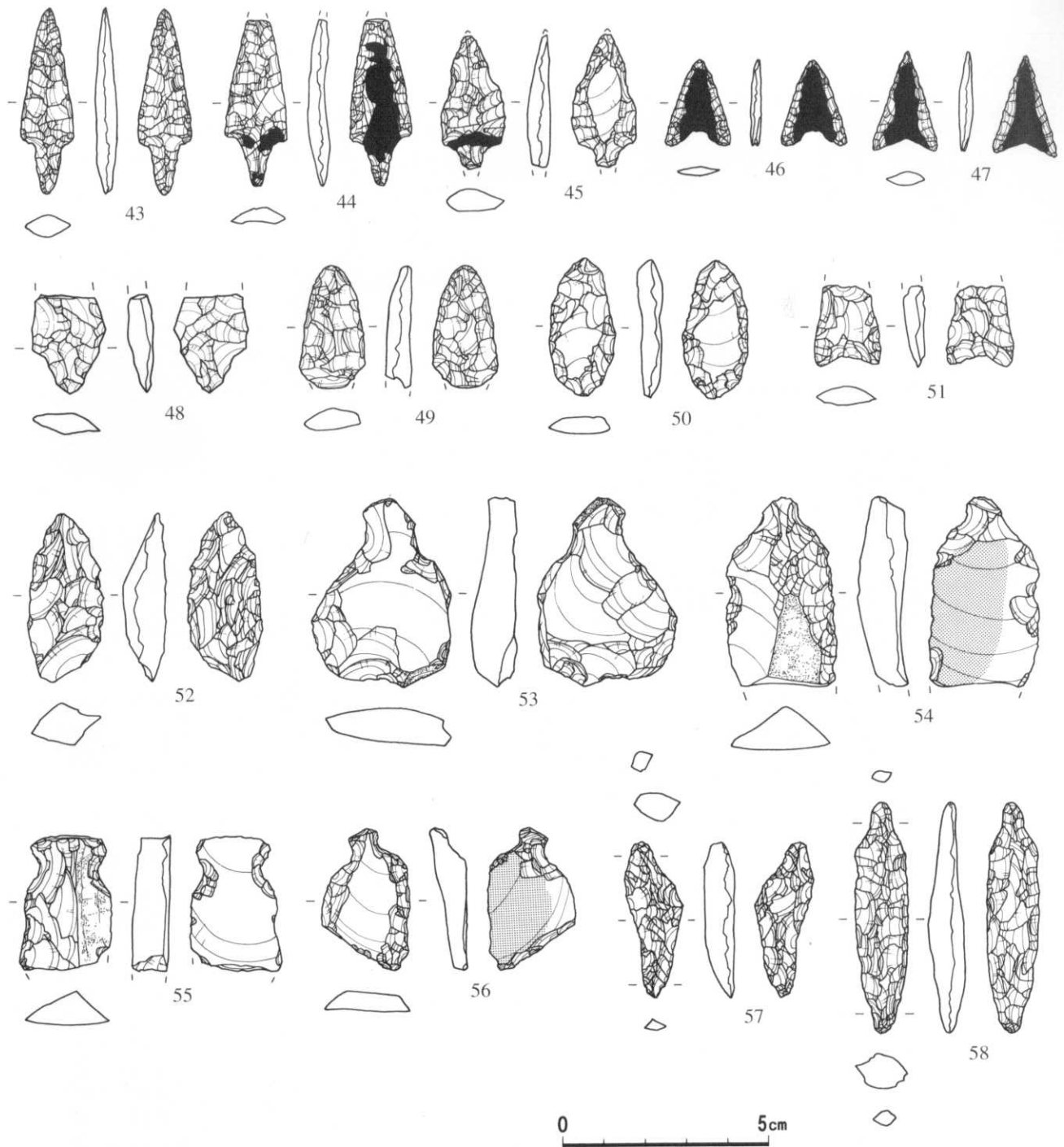
50図 遺構外出土土器 (第I層) (2)



番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
39	VIII P-96	I	貼付(刺突)			ミガキ		IV	
40	〃	〃		RL、沈線		〃		〃	
41	VIII O-94	〃		R単絡1、沈線		〃		〃	
42	〃	〃			RL	〃	網代痕	III・IV	

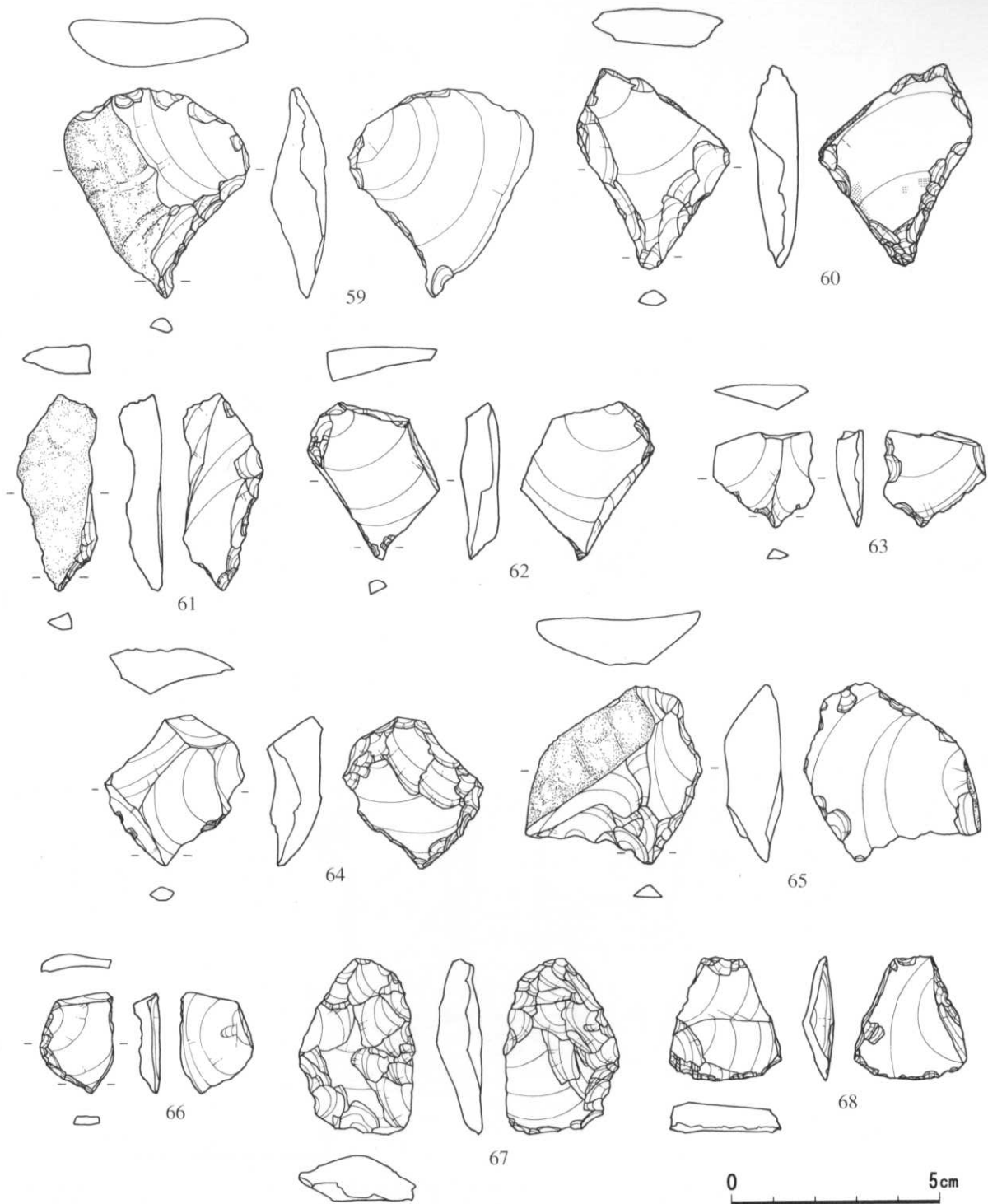
51図 遺構外出土土器(第I層)(3)





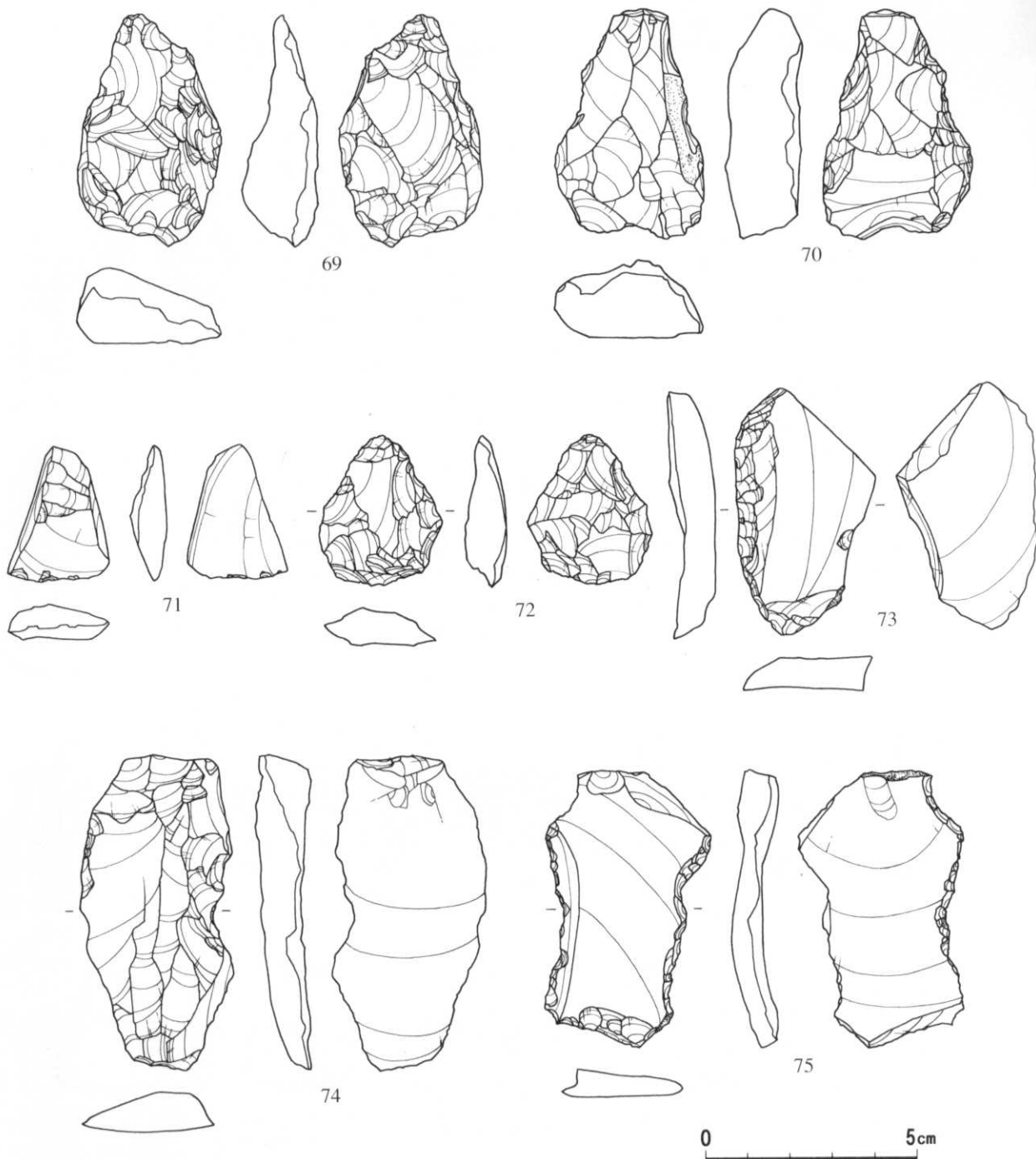
図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
43	VIII O-94	I	45	13	5	2.2	鉄	Ab		37168
44	VIII P-95	〃	(41)	15	5	(2.4)	〃	〃	アスファルト	37200
45	VIII O-94	〃	(32)	16	6	(1.6)	珪頁	〃	〃	33195
46	VIII P-96	〃	21	16	2	0.6	〃	Af	〃	37243
47	VIII Q-95	〃	24	16	3	0.7	〃	〃	〃	37266
48	VIII P-96	〃	(24)	18	6	(2.4)	〃	Ab	未製品?	35172
49	VIII O-94	〃	(30)	16	6	(2.8)	黒	〃	〃	37170
50	VIII Q-95	〃	33	16	6	3.3	珪頁	Ac	尖端肉厚 石錐未製品?	34171
51	VIII P-96	〃	(22)	17	5	(1.5)	〃	Af	〃	35175
52	VIII Q-94	〃	41	18	10	6.6	〃	Ba	〃	33582
53	VIII P-95	〃	46	34	11	16.9	〃	Ca	石匙未製品?	33820
54	VIII P-94	〃	(46)	27	12	(13.4)	〃	〃	〃	33367
55	VIII P-95	〃	(33)	22	9	(7.4)	〃	〃	〃	33837
56	VIII P-94	〃	34	21	9	4.4	〃	Cc	〃	37181
57	VIII Q-95	〃	38	14	7	3.6	〃	Db	異形石器?	34248
58	VIII Q-94	〃	56	13	9	5.2	〃	Dd	両極磨耗	37247

52図 遺構外 (第I層) 出土石器 (1)



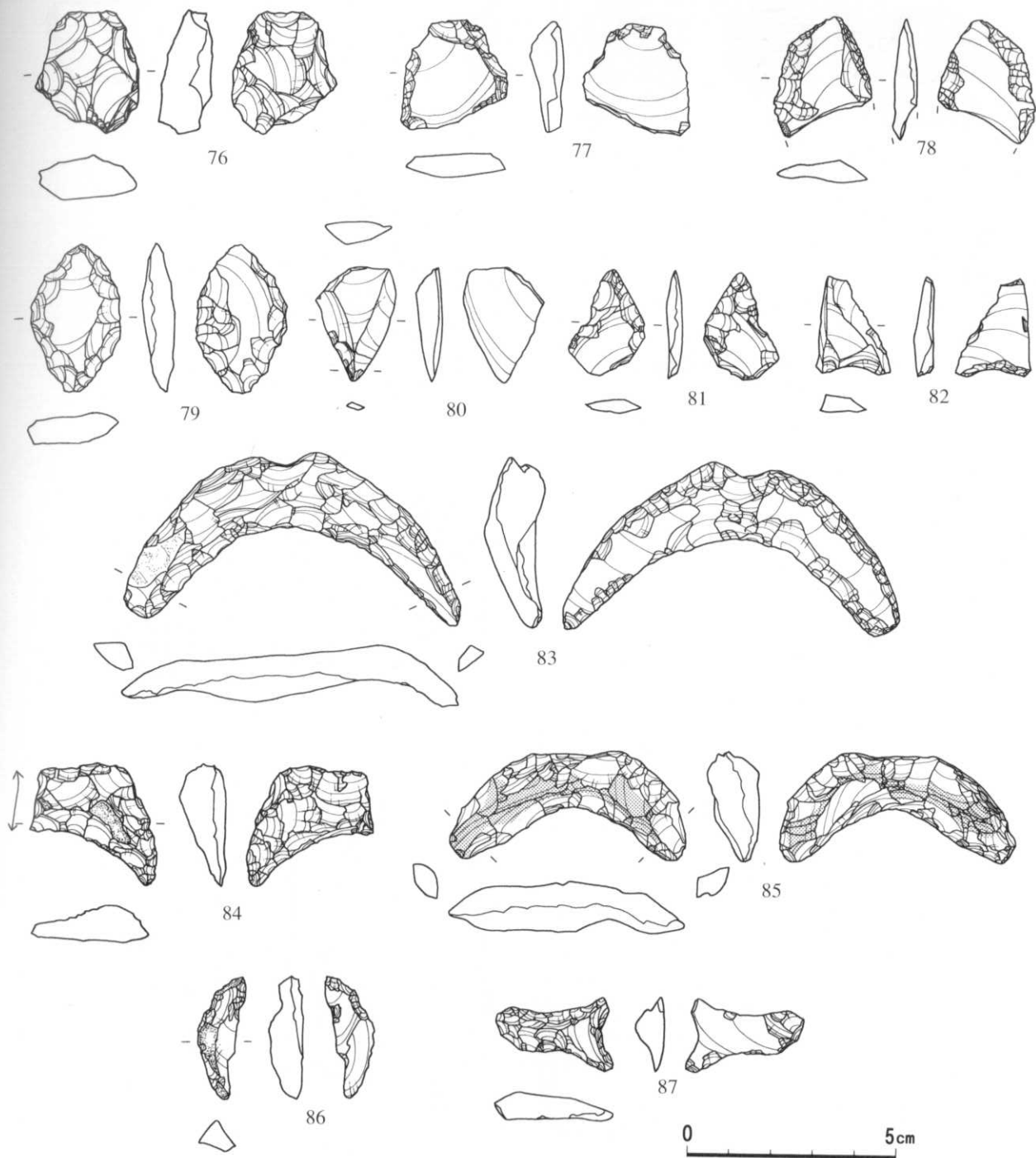
図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
59	VIII Q-95	I	51	44	13	22.9	珪頁	Db	尖端磨耗	34403
60	VIII P-94	〃	49	37	11	15.4	〃	〃		33350
61	VIII O-94	〃	47	19	10	6.2	〃	Dc		33325
62	〃	〃	38	32	9	8.0	〃	〃		33191
63	〃	〃	23	25	6	3.0	〃	〃		33193
64	VIII P-94	〃	36	34	13	11.1	〃	〃		33372
65	VIII Q-95	〃	43	43	14	20.8	〃	〃	スクレイパー類?	34406
66	VIII P-94	〃	24	17	6	1.7	〃	Ga	右側縁切断面?	33344
67	VIII P-96	〃	42	28	11	10.9	〃	〃	石筥?	34816
68	VIII O-94	〃	30	27	7	5.4	〃	〃	両側縁切断加工?	33181

53図 遺構外 (第I層) 出土石器 (2)



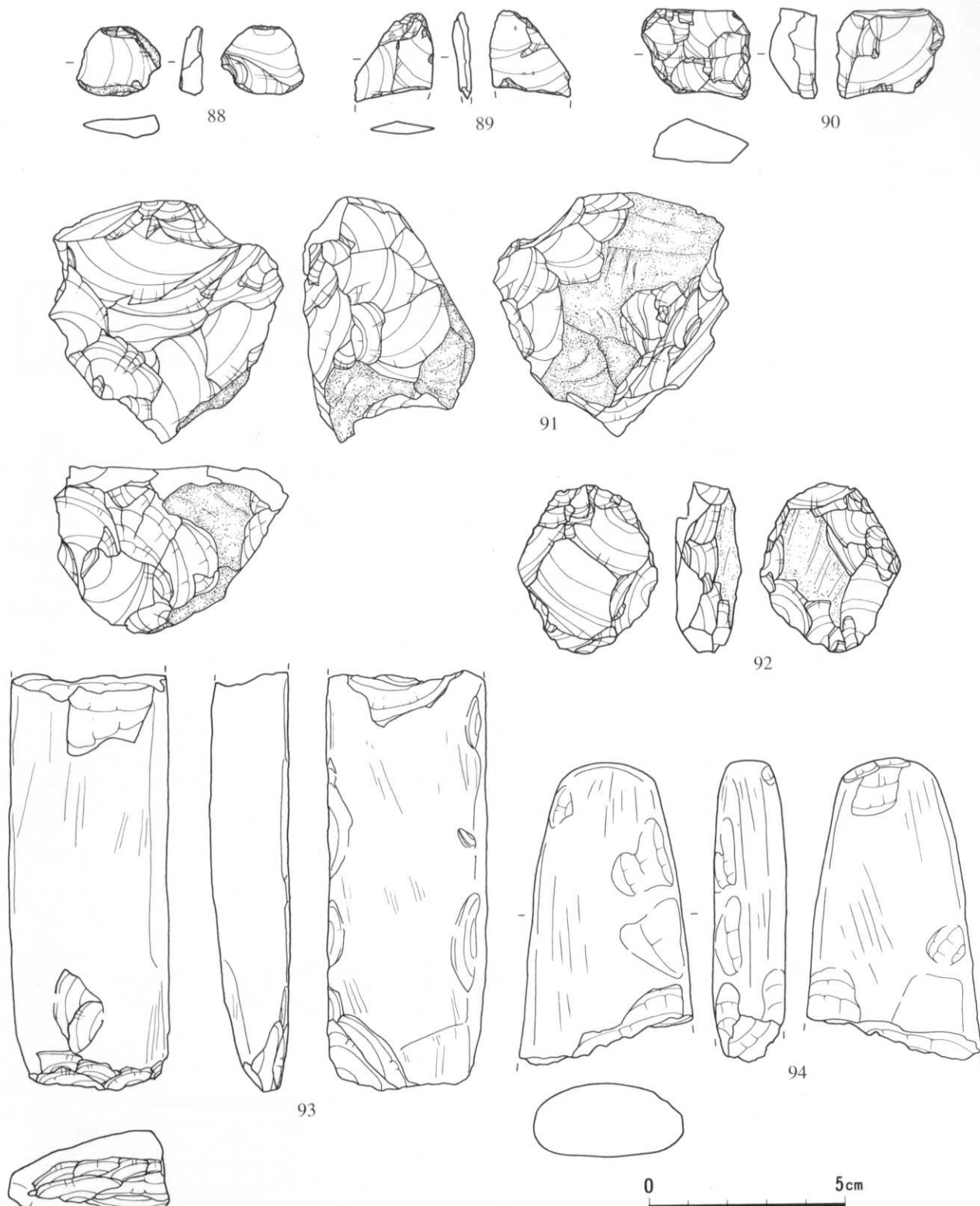
図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
69	VIII P-95	I	55	34	18	25.1	珪頁	Ga	石鏡?	33994
70	VIII P-94	〃	55	35	18	37.2	〃	〃		33376
71	VIII P-95	〃	32	24	8	5.4	〃	Gb		33952
72	VIII P-96	〃	36	29	10	8.6	玉珪	Ga		34807
73	VIII O-94	〃	58	33	10	19.5	珪頁	〃		33604
74	VIII P-95	〃	75	36	18	34.4	〃	〃		33978
75	VIII P-94	〃	66	39	11	20.8	〃	〃		33371

54図 遺構外 (第I層) 出土石器 (3)



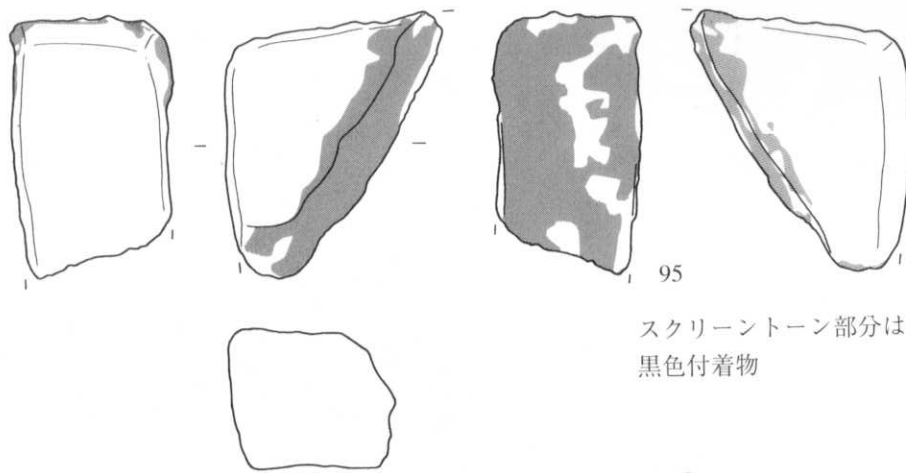
図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
76	VIII Q-95	I	30	25	13	9.1	珪頁	F		34412
77	VIII P-95	〃	27	25	8	4.4	〃	Ga		33886
78	VIII P-94	〃	(29)	(23)	6	(2.8)	〃	〃	石鏃未製品?	33402
79	VIII P-95	〃	36	22	8	5.3	玉珪	〃		33815
80	VIII O-94	〃	27	19	6	2.5	珪頁	〃	石鏃未製品?	33233
81	VIII Q-95	〃	26	18	4	1.4	〃	〃	石鏃未製品?	34185
82	VIII Q-94	〃	24	18	5	1.7	鉄	Gb	〃	33568
83	VIII P-94	〃	41	81	14	17.8	珪頁	R		37183
84	VIII Q-95	〃	29	30	11	6.6	〃	Ga	異形石器破片?	34297
85	VIII O-94	〃	26	57	12	12.1	〃	R	光沢	37171
86	VIII P-95	〃	29	12	8	1.6	黒	Cg	異形石器?	33791
87	VIII Q-95	〃	18	28	7	2.1	珪頁	R		34260

55図 遺構外 (第I層) 出土石器 (4)



図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
88	VIII P-95	I	17	21	6	1.7	黒	Pc		37195
89	"	"	(22)	20	4	(1.2)	"	"		37198
90	VIII P-94	"	23	28	12	7.3	"	Pa		37182
91	VIII P-96	"	63	60	43	147.0	珪頁	"		34832
92	VIII P-95	"	43	35	16	24.1	"	"		33983
93	VIII P-94	"	(107)	41	20	(162.7)	粘	Ha		35182
94	VIII P-96	"	(77)	(44)	19	(105.7)	"	"		35184

56図 遺構外 (第 I 層) 出土石器 (5)



スクリーントーン部分は  
黒色付着物

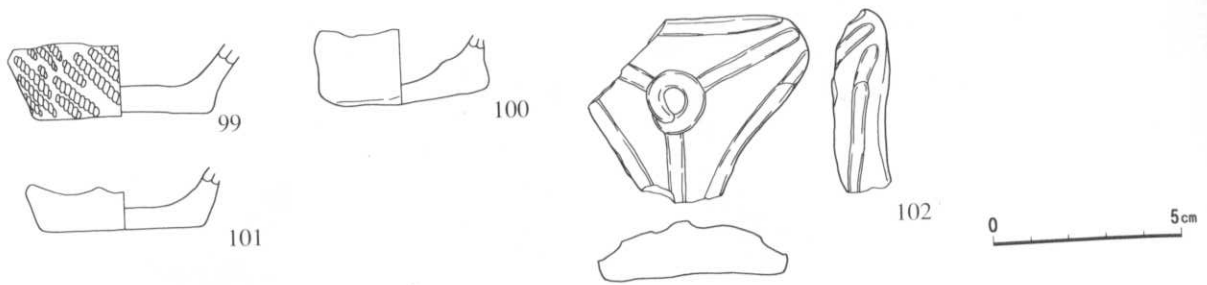
0 5cm



0 10cm

図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
95	VII O-94	I	(53)	(43)	29	(61.2)	安	L	アスファルト?	37291
96	VIII P-96	〃	151	90	54	1130.0	〃	Ib	焼け	35220
97	VIII P-95	〃	(125)	(60)	(38)	(373.0)	流	Ua		35219
98	VIII Q-94	〃	115	53	53	487.5	安	Ib		35218

57図 遺構外 (第I層) 出土石器 (6)



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
99	VIII P-96	I			RL	成形痕		ミニチュア土器	
100	VIII P-95	I			無文	成形痕		ミニチュア土器	
101	VIII P-95	I			無文	成形痕		ミニチュア土器	

番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	分 類	備 考	整理番号
102	VIII O-94	I	(49)	(59)	15	(42)	三角形土製品		

58図 遺構外 (第 I 層) 出土土製品

## 崩落土出土遺物

### (1)土器

#### ・縄文時代前期

1は円筒下層d<sub>1</sub>式である。2～13は円筒下層d<sub>2</sub>式である。このうち、2～5は口縁部に貼付をもたないものである。縄文の押圧により文様が施文されるが、2・3は横位の押圧、4は山形の押圧、5は鋸歯状である。3の頸部は隆帯状にわずかに盛り上がる。4・5は低い隆帯が巡るものである。6～12は口縁部に貼付が付けられるものである。6・8は縦位に、7はV字状、9・10は縦位と円形の組み合わせ、11は円形、12は逆V字状である。5・8・12は頸部が括れる。13は縄文原体押圧と円形刺突が施文される口縁部である。破片の中ほどがやや膨隆する。14～23は円筒上層a式である。14・15・18は波頂部で、縦位の貼付がある。16・18は縦・横位に縄文原体が押圧される。17・19・22・23は波頂部から縦位や斜位の貼付がつき、三角形状のモチーフとなる。19～22は横位と鋸歯状の押圧である。24～27は馬蹄形に押圧される円筒上層b式である。24～26の貼付は波頂部下に三角形状のモチーフで、22・23と共通する。27は波頂部から波状に貼り付けられる。28～30は円筒上層d式である。28は波頂部で、貫通孔がある。29・30は胴部で、29は磨耗しているがわずかに縄文が観察できる。30は無文面に貼付である。31～34は円筒上層e式である。いずれも地文施文後に沈線が施文される。35・36は円筒上層式系の土器である。37～40は榎林式である。37～39は口縁部で口唇に沿って凹状沈線、波頂部は渦巻き状になる。37・39は横位の沈線が施文されるが、37は沈線間に刺突が巡る。38は斜位沈線である。40は胴部に渦巻き状の沈線が施文されたものと思われる。41・42は最花式で、41は無文帯下に地文及び刺突、42は胴部片で地文施文後沈線及び刺突が施文される。43は大木10式併行期の土器である。カギ状の沈線の内部に縄文を充填している。

### (2)石器

崩落土、攪乱層、層不明のものが、あわせて122点出土している。内訳は、石錐1点、スクレイパー類10点、R、フレイク17点、U、フレイク13点、原石1点、石核1点、剥片42点、磨製石斧破片1点、抉入扁平磨製石器1点、敲磨器類23点（うち凹痕主体2点、敲打痕主体14点、磨面主体7点）、台石・石皿類破片4点、砥石破片2点、軽石製品1点、角柱状の礫1点、北海道式石冠2点、剥離のある礫石器などその他とした石器2点である。また他に礫が50点出土している。

49は剥離加工によって取っ手部分を作り出し、幅広い磨面を持つため北海道式石冠とした。正面の剥離の稜の一部はスレで摩耗し、裏面には光沢が認められる。50は安山岩の角礫を素材とした剥離痕と敲打痕を持つ石器である。剥離痕は素材礫のなかでも最も刃先角の小さい部分を中心に形成される。剥離痕は加工によるものか敲石としての使用による剥落か判別が難しくその他とした。51は硬質の頁岩を素材とした多面体を呈する敲石である。敲打痕としたが機能部の荒れは少なく、表面の状況は磨面のものに近い。

### (3)土・石製品

53・54はミニチュア土器の底部破片である。55は土偶の胴部破片である。57は三角形土製品の破片で刺突が施される。56は土器片の再利用と考えられる円盤形土製品、58は土製の垂飾、59は石製垂飾の破片である。

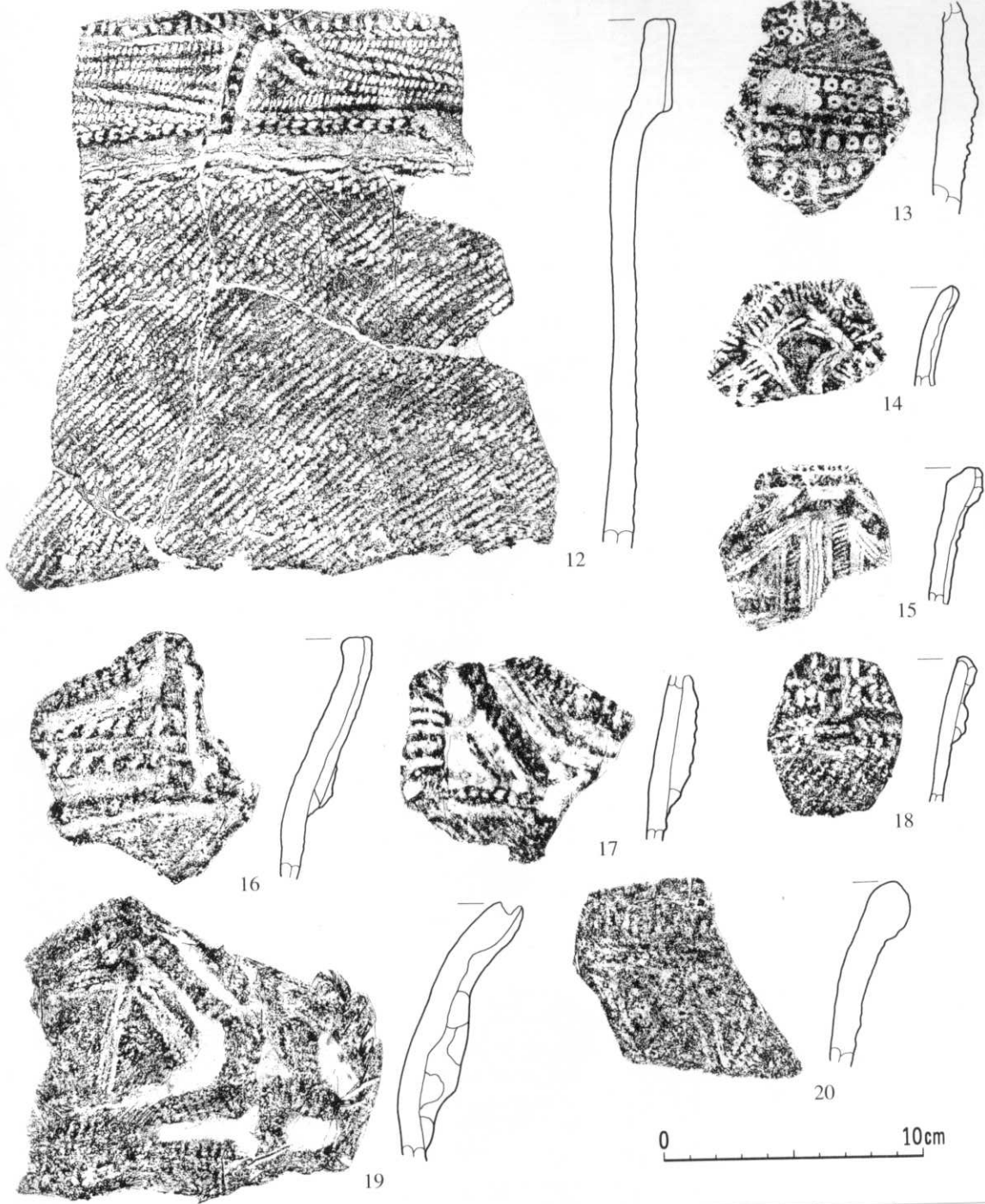
(以上、土器は小笠原 雅行、石器は斎藤 岳、土・石製品は中村 美杉)





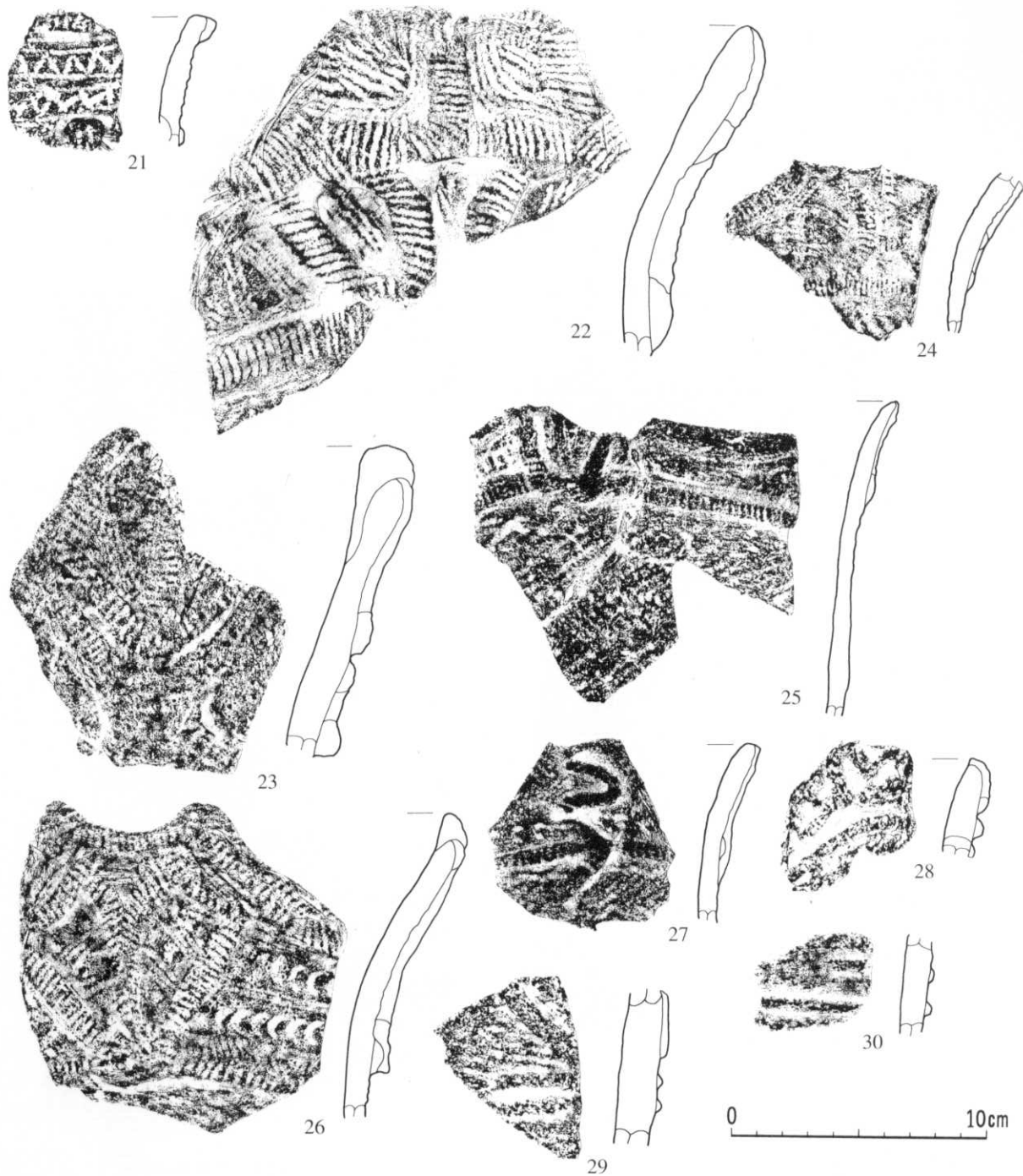
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
1	ⅧO-95	崩落土	R単絡1押	RLR		ミガキ		Ⅱ-5-1	
2	〃	〃	LR押			〃		Ⅱ-5-2	
3	〃	〃	R押、刺突	結束第一種 (LR、RL)		〃		〃	
4	〃	〃	L押	隆帯状の影隆 (刺突)、多軸絡		〃		〃	
5	〃	〃	〃	隆帯 (刺突)、RL		〃		〃	二又状の突起
6	〃	〃	貼付、L押	LR		〃		〃	
7	〃	〃	貼付、LR、RL押、刺突	〃		〃		〃	口唇上面にも縄押
8	〃	〃	貼付 (大部分剥落)、L押	結束第一種、多軸絡		〃		〃	
9	〃	〃	貼付 (L押)、L押	結束第一種 (LR、RL)		〃		〃	口唇上面にRL
10	〃	〃	貼付 (縄押)、L?押、刺突			〃		〃	
11	〃	〃	貼付 (R?押)、R押、刺突	結束第一種?		〃		〃	

59図 崩落土採集土器 (1)



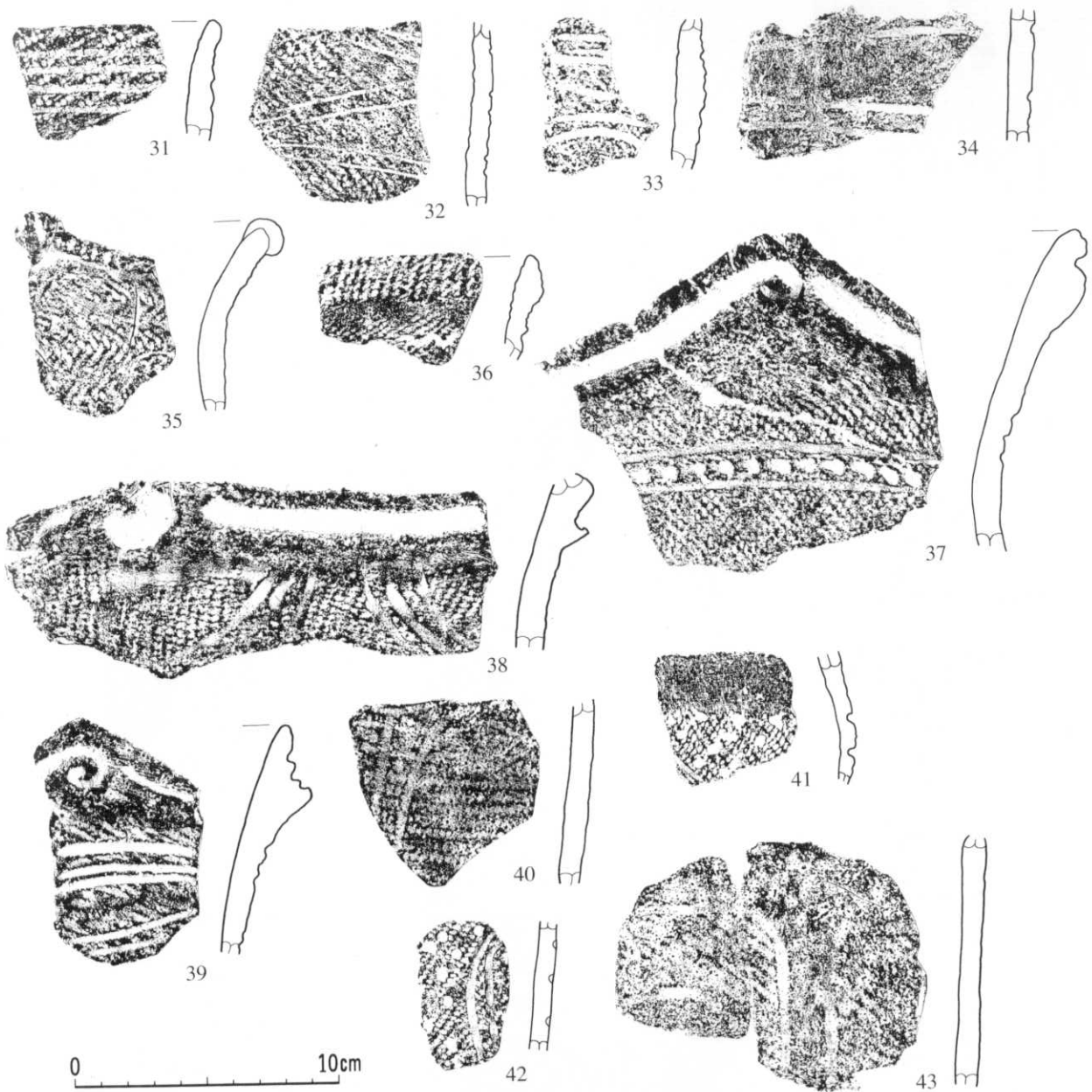
番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
12	VIII O-95	崩落土	貼付(刺突)、R・R輪押、刺突	LR		ミガキ	II-5-1		
13	〃	〃	L押、刺突			〃	〃		
14	〃	〃	貼付(L押)、L・R押			〃	III-1		
15	〃	〃	貼付(縄押)、縄押			〃	〃	磨耗	
16	〃	〃	貼付、縄押			〃	〃		
17	〃	〃	貼付(縄押)、L・R押			〃	〃		
18	〃	〃	〃、L?押			〃	〃	磨耗	
19	〃	〃	貼付(L押)、L押			〃	〃		
20	〃	〃	縄押			〃	〃		

60図 崩落土採集土器(2)



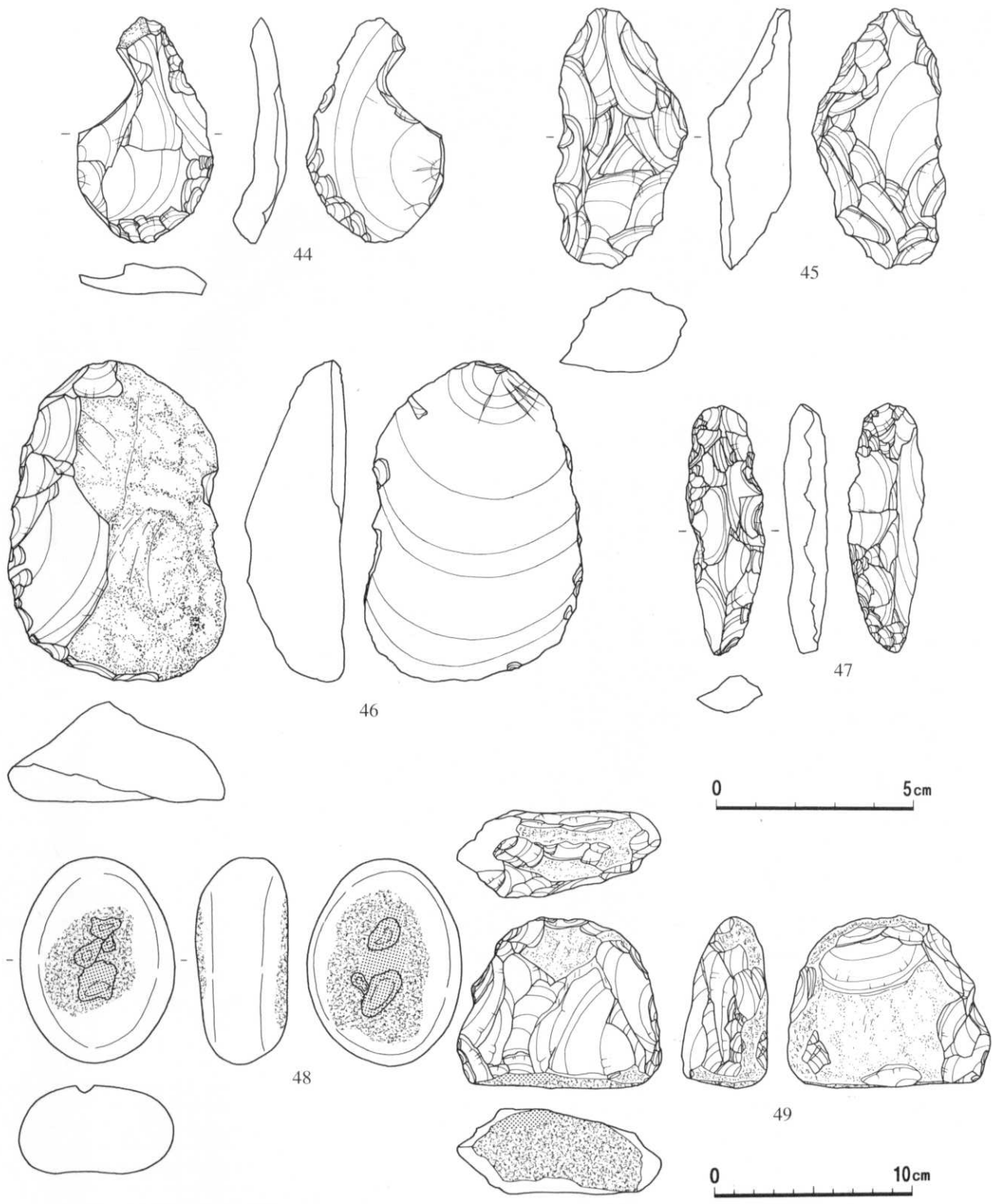
番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備 考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
21	ⅧO-95	崩落土	貼付、L押			ミガキ		Ⅲ-1	
22	〃	〃	貼付 (L押)、L・R押			〃		〃	磨耗
23	〃	〃	貼付			〃		〃	磨耗
24	〃	〃	貼付 (縄押)、縄押			〃		Ⅲ-2	
25	〃	〃	貼付 (L押)、L押	結束第一種 (LR、RL)		〃		〃	
26	〃	〃	〃			〃		〃	
27	〃	〃	貼付、縄押	結束第一種 (LR、RL)		〃		〃	
28	〃	〃	貼付 (縄押)、貫通孔			〃		Ⅲ-4	
29	〃	〃		縄文、貼付		〃		〃	磨耗
30	〃	〃		貼付		〃		〃	

61図 崩落土採集土器 (3)



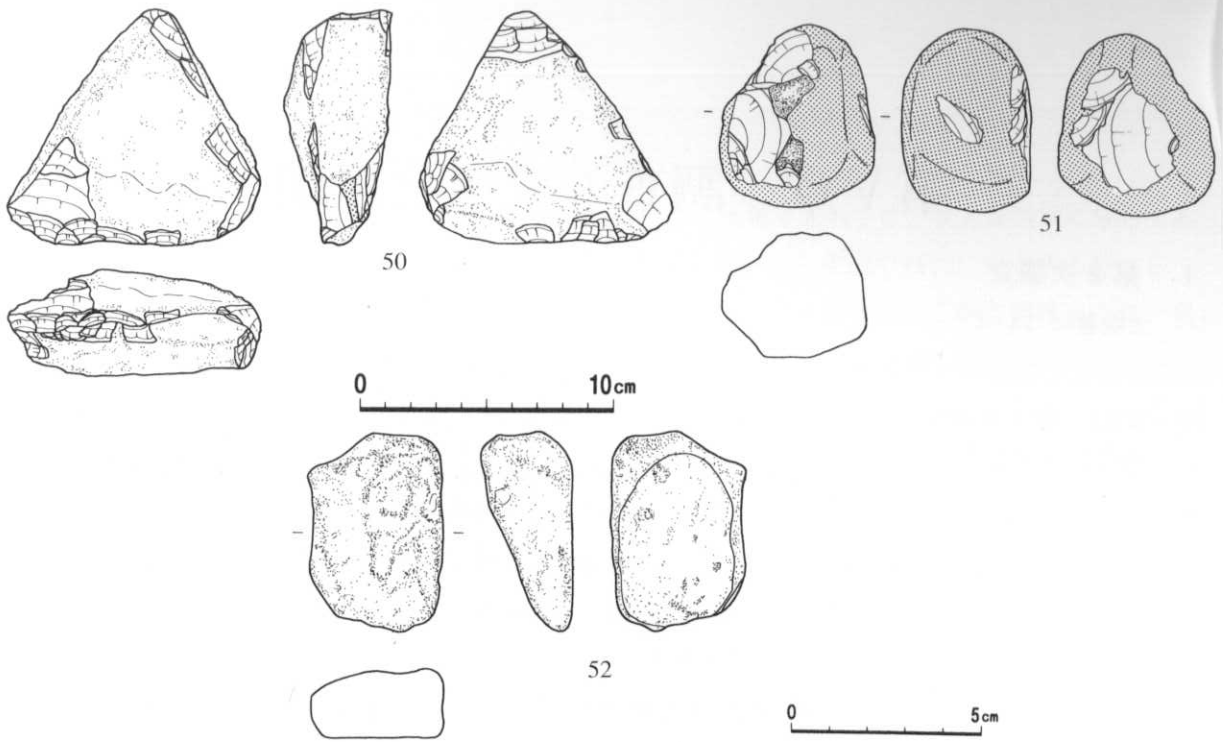
番号	出土地点	出土層位	外面文様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
31	ⅧO-95	崩落土	LR、沈線			ミガキ	Ⅲ-5		
32	〃	〃		RL、沈線		〃	〃		
33	〃	〃		RL?、沈線		〃	〃	磨耗	
34	〃	〃		縄文?、沈線		〃	〃		
35	〃	〃	貼付 (LR? 押)	結束第一種 (LR、RL)		〃	Ⅲ-6		
36	〃	〃	L押、LR?			〃	〃		
37	〃	〃	凹状沈線	RL、沈線、刺突		〃	Ⅲ-8		
38	〃	〃	〃	RL、沈線		〃	〃		
39	〃	〃	〃	RL?、沈線		〃	〃		
40	〃	〃	〃	LR、沈線		〃	〃		
41	〃	〃	無文帯	RL、刺突		〃	Ⅲ-9		
42	〃	〃	〃	RL、刺突、沈線		〃	〃		
43	〃	〃	〃	沈線、RL? 磨消		〃	Ⅲ-10		

62図 崩落土採集土器 (4)

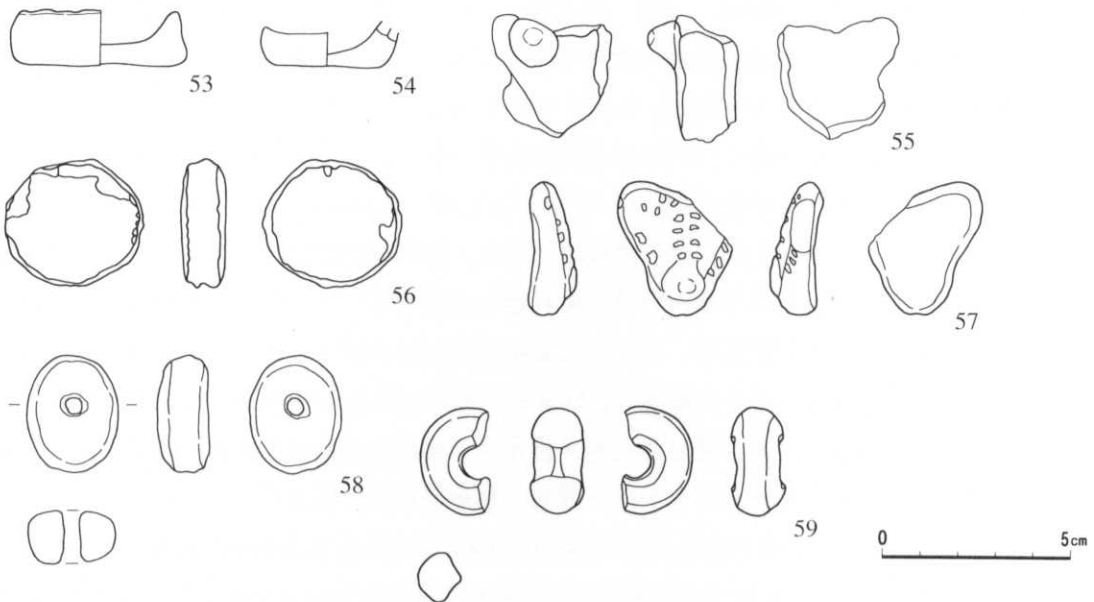


図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
44	VIII-O-95	崩落土	57	35	13	14.7	珪頁	Cc	スレイパー?	34155
45	〃	〃	66	34	21	37.8	〃	Ga		34949
46	〃	〃	82	55	25	108.4	〃	〃		32967
47	〃	〃	64	20	11	12.3	〃	〃		34156
48	〃	〃	105	78	47	444.0	流	la		35232
49	〃	〃	87	103	43	535.8	安	O		3523

63図 遺構外（崩落土等）出土石器（1）



図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
50	VIII O-95	崩落土	94	99	42	316.1	安	Q	敲石? 礫器?	35233
51	〃	〃	75	62	51	299.0	頁	lb		35208
52	〃	〃	53	36	24	13.2	軽	Tb	面取り	34877



番号	出土地点	出土層位	外 面 文 様			内面調整	底面	分類	備考
			口縁部	胴部上半	胴部下半				
53	VIII O-95	崩落土			無文	成形痕		ミニチュア土器	
54	〃	〃			無文	〃		〃	

番号	出土地点	層位	計 測 値 (cm)			文 様		分類	備考
			長さ	幅	厚さ	表面	裏面		
55	VIII O-95	崩落土	(33)	(32)	(24)	無文	無文	土偶	腕部

番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	分 類	備 考	整理番号
56	VIII O-95	崩落土	34	37	12	13	円盤形土製品		
57	〃	〃	36	(31)	14	9	三角形土製品		
58	〃	〃	31	24	14	10	土製垂飾		

図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石質	分類	備考	整理番号
59	VIII O-95	崩落土	29	(19)	14	7	凝灰岩	石製垂飾		

64図 遺構外 (崩落土等) 出土石器 (2)、崩落土出土土・石製品

## 第V章 調査の成果と課題

### 1 第8次調査

#### (1) 土坑墓について

これまで土坑墓列とその間の道路跡の調査を、旧野球場建設予定地（以下「野球場」）（1994～1996調査）、第4次調査（1997調査）、第7次調査（1998調査）、第8次調査（1999調査）の4回にわたって行ってきた。すでに今回報告分の第8次調査以外については報告済み（青森県教委1993、1996、1998）であり、別にも概略を述べたことがある（小笠原1997）。

ここではまず北地区のまとめとして、これらの土坑墓について検討していくことにする。

[平面形・規模] これまで土坑墓としてきたのは、平面形が楕円形を基調としたものである。それ以外としては、隅丸長方形、小判形、楕円形などがある。大きさ（65図）は、長軸は最小70cm、最大290cmで平均155.3cmである。長軸には大きな幅があるのに対し、短軸では50～80cmほどの中にほぼ収まる。個々の土坑墓の主軸方向は列の間の道路跡にほぼ直交し、その経路に沿って変化していく。

[施設等] 大半は掘り込みのみであるが、底面の壁際に溝を有するものが3基ある。平成11年度の南地区の第13次調査では、この壁溝内から直立して炭化材が検出されており、壁板が巡っていたと考えられている（青森県教委2000）。また、配石を巡らせているものが5基確認されている。これらは、全周するものとししないものがある。前者は本報告分の第8次調査において確認され、後者はそれ以前の調査で確認されたものである。全周しないものは、それが本来的なありかたなのか不明であるが、表土から確認面まで浅く、いずれも調査前まで畑として利用された部分から検出されていることもあり、礫の移動も充分考えられる。全周するものでは第952号土坑があるが、表土下約80cmと深く後世の攪乱も無いため、残存状況は良好である。礫の配置状況は、個々の大きさこそ異なるものの、第13次調査で検出された第11号環状配石墓と類似する。その他にも野球場で検出された半周程度の配石遺構2基は、いずれも中に3基の重複した土坑を伴う。この点も第11号環状配石墓と共通し、興味深い点である。また、施設とはいえないかもしれないが、今回の調査で上面に扁平な礫が確認されたものもある。第Ⅲ章で述べたとおり、1基の礫は斜めの状態で検出され、下位では土坑堆積土中に入り込み、下面のより上位では第Ⅱ層が入り込むことから、本来直立していた可能性が高いものである。マウンドと同様に何らかの目印となっていたものと思われる。

[出土遺物] 遺物が出土する割合は50基強で完掘した土坑墓の30%ほどである（表2）。その中には土器の細片など、意図的に墓に入れられたものというよりも、埋め戻し時の混入と判断されるものも含まれる。石器では、敲磨器類や石冠などの礫石器が目立ち、剥片石器では石鏃や不定形石器などがあるが、器種にやや偏りが見られる。石器が単独で出土するものは15基ほどあり、複数出土したものは11基である。出土状況は、石器の他に土器の大型破片も含めて、土坑墓の底面及びその直上から出土したものが13基で、完掘したのものの中では10%ほどである。出土位置は底面の中央付近のものが多し。また、堆積土中から出土したものは35基ほどで、底面から出土するものも比べると多い。複数出土した内容は、石鏃は不定形石器などとともに出土する場合や1基から10点まわって出土したことがある。礫石器は石鏃や不定形石器と一緒に出土する場合もあるが、礫石器同士で出土する例がやや多い。特徴的なものとしては、先の石鏃10点の他に、異形石器4点と敲石2点

が出土した例やヒスイの垂飾品が出土した例などが挙げられる。

[分布] 先に挙げた小笠原(1997)で、土坑墓の分布をA:長軸を並列させ、長大な列状に分布する群、B:長軸を並列させ、埋設土器とセットになりながら限られた範囲で列状に分布する群、C:A・B群とは長軸が異なり、野球場東側にやや放射状に配置される群、D:C群と同様に主軸が異なり野球場西側の集落中心部の近くに配置される群の4群に分類した。重複を避けるため、ここでは長大な列状配置をとるA群について取り上げる。

この土坑墓列は総延長約420mにも達する。第7次調査区までは、舌状台地の稜線部にほぼ沿って分布していたが、今回の調査区では緩く落ち込む谷状の地形に沿って分布域が変化することが判明した。台地周縁は崖状の急に落ち込む地形であり、集落外へ至る(或いはその逆も)には、この緩い谷地形が選択されたものと考えられる。2で述べる道路跡の存在もその傍証となるものである。今回の調査区の東限では標高約7mと非常に低いところまで調査し、土坑墓の分布も希薄になるため、列自体の東限に近いものと考えられる。そのため、集落の出入り口として利用されていた可能性が非常に高いものと言える。

墓自体の分布では、南側列では比較的長軸を揃え並列が明瞭であるが、北側列は長軸方向を同じくしながらも並列状態が乱れ列の幅が広がる部分が多い。また、全てが同じような間隔で造られるものでもなく、粗密が確認される部分がある。野球場に限って見れば、VA-100からIVS-102以西では北側列が粗であるが、南側列では密な分布となっている。並列が明瞭な南側列では判断しにくい面もあるが、単に位置関係だけで言えばいくつかのまとまりを見ることができる。例えば、第4次調査での第812・813・818・819号土坑(北側列)、第830~833号土坑(北側列)、第7次調査での第927~929号土坑(北側列)など3~4基ずつにまとまりとしてとらえられる可能性がある。これには第930・932号(その間の第931号も含まれるか?)の配石を伴う土坑もまとまりとして考えることができるかもしれない。ただし、野球場での第176号土坑のように両側の土坑とそれぞれ約2mの間隔があるものもあり、すべての土坑にまとまりが形成されていたか判然としないものも多い。

[年代] これらの土坑墓の時期であるが、遺物が散発的にしか出土しないため、個々の詳細な時期決定ができないものがほとんどである。出土する遺物も埋め戻し時の混入や埋葬後の落ち込みへの混入など、出土土器片が必ずしも遺構の時期決定に反映できないのは明白である。そこでまず、きわめて少例ながら完形土器の出土や遺構の重複関係から見ると、第32・33号土坑は下層d<sub>1</sub>式期の大型住居跡(第8号住)より新しく、さらに第7次調査区では第810号土坑が上層d<sub>1</sub>式期の埋設土器より新しく、堆積土中にその破片が混入する。また、今回の調査区の間存する旧都市計画道路建設予定地の調査(1994:青森市教委調査)で北側列の土坑墓が4基検出されており、そのうち1基から上層e<sub>1</sub>式の完形土器が出土している。細片の資料では、野球場では前期末や中期初頭の破片が見られ、第4次調査では円筒上層b~c式が出土している。これらのことから土坑墓は、全てが順序立ってというわけではないだろうが、集落の中心部に近いところから、徐々に東側へ拡大していったものと考えられる。遺構の重複関係もこれと矛盾するものではない。

野球場以外では、試掘のため部分的な調査を行ってきた。総延長約420mのうち、遺構の確認を行ったのは約180m分である。この中で計185基ほどの土坑墓が検出された。このうち先に挙げたA小群に属するのは約150基である。大雑把ではあるが、同じ密度で土坑墓が造られているとすれば、こ



の長大な土坑墓列は約350基ほどで構成されていたと計算できる。

## (2)道路跡について

道路跡も土坑墓列とセットで同様の分布を示す。これについても、すでに報告済みのものもあり、別に概要を述べたことがある（小笠原・秦2002予定）。

道路跡は、第7次調査区より東側では掘り込みが観察され、その存在を明確に知ることができる。しかし、野球場や第4次調査区では掘り込みが不明確である。本来的にあまり掘り込まれていなかったのか、後世の削平などによるものか不明だが、土坑墓列（先のA小群）の間には黒っぽい汚れが帯状に確認されている。掘り込みが確認されている部分では、やはり道路跡の底面には汚れが確認される。

道路跡は第Ⅲ層及び下位の漸移層を掘り込み、千曳浮石層を露出させて使用されている。また、部分的にはさらに下位の淡赤褐色ロームが露出している。この違いは、底面が平坦であることから、掘り込みの深さよりも千曳浮石の厚さの違いによるものと考えられる。いずれにしても、黒色土よりも比較的硬質のローム層を露出させ利用することを主眼としていたと思われる。底面は長期間の露出によるヒビ割れがあったとみられ、その部分に筋状に黒色土が入り込み、さらに使用によるためか全体が汚れた状態と相まって、他のローム部分よりも黒っぽく見える。部分的には千曳浮石を貼り付けたようなところもあり、修繕も行われていた可能性が高い。

道路跡の時期であるが、堆積土には第Ⅱ層（縄文時代中期末～平安時代に堆積）が入ることから、それよりも古く位置づけられる。遺構の重複関係では、第7次調査では底面に貼られたローム塊の上に配石が置かれ、配石遺構が新しく、同様に今回の調査での配石を巡らす第952号土坑は、道路跡の路肩部分に造られ、土坑が新しいことがわかる。出土遺物は僅少であるが、底面直上から中期後半の土器が出土している。下限はある程度押さえられるが、上限は不明である。しかし、土坑墓列との関わりから、土坑墓列が造られる際には道路跡が機能していたと考えたい。ただし構築時期は、遺構の重複関係から、道路跡が先行していたものと考えられる。

土坑墓列の途切れる集落中心部では、それと接続するように掘立柱建物跡のが並ぶ。その配置については今後整理が進むことによって明らかにされるものであるが、東西方向に土坑墓列と同様の分布を示すことから、道路跡の存在が強く示唆されるものである。さらに巨視的にみれば、南北の盛土の間を貫く掘立柱建物跡から南盛土西側の2列に並列する掘立柱建物跡へ沿って道路跡が存在した可能性が高い。

道路は他の施設と大きな関わりをもつ。整備が進むほど施設の配置が固定化されるためである。集落形態が長期間にわたって継続したのは、道路の整備とともに始まったといっても過言ではないのではないだろうか。その時期は土坑墓列の時期とも併せて、縄文時代前期末～中期初頭の時期にかけてと考えられる。

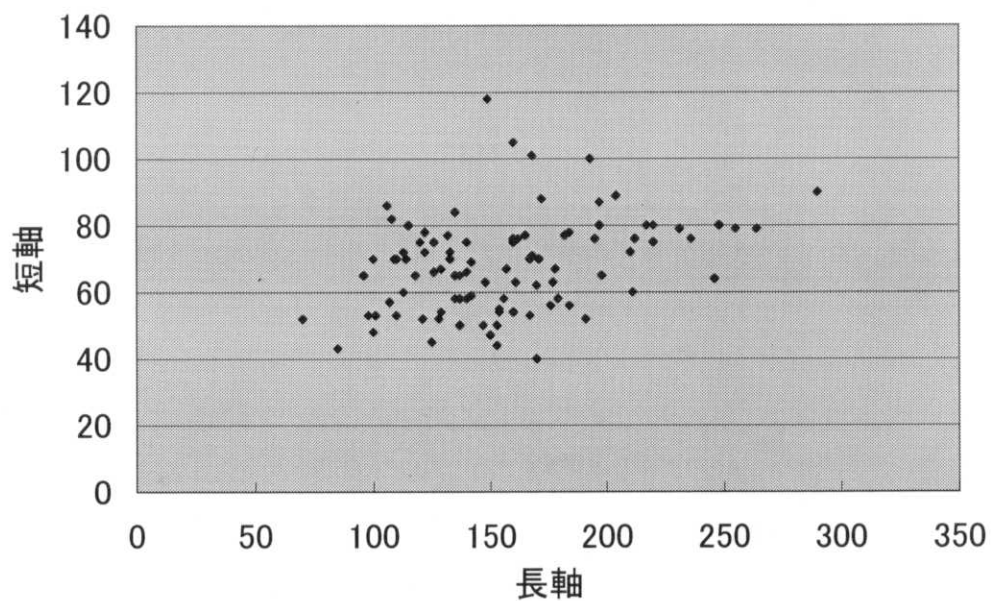
## 2 第9次調査

第6次・第9次調査及びその後の第19次調査で、北地区の沖館川に面した斜面に捨場が広がっていることが確認された。平成4・5年度に調査した第6鉄塔地区とは縄文時代前期では捨場の形成

時期に若干の違いはあるが、縄文時代中期には土砂を主体としたほぼ同様の内容である。さらに中期後半には掘立柱建物跡が造られていたことが明確となった。その配置にはさらに詳細な検討が必要であり、今後遺構の性格も含めて検討し、第19次調査で報告したい。

(小笠原雅行)

土坑墓長軸・短軸比

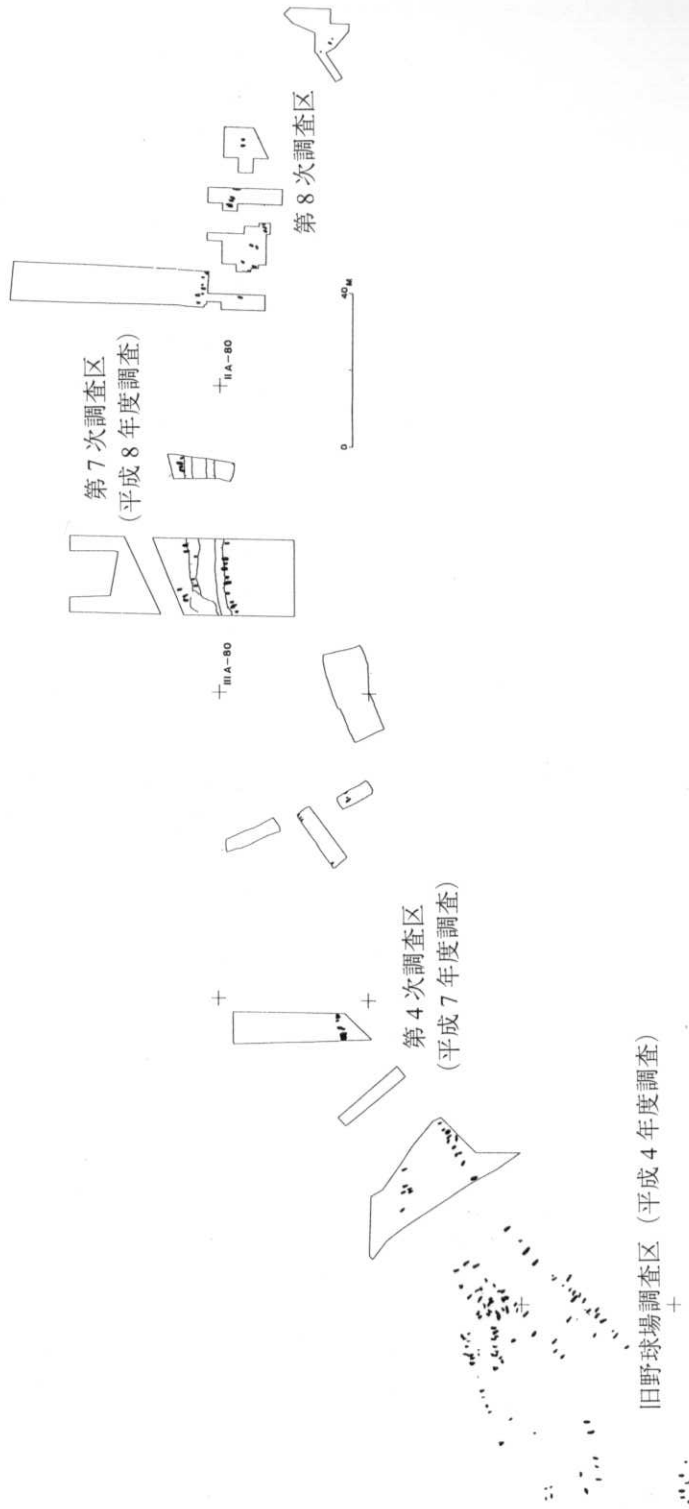


65図

表 2

No	前期	中期	石鏃	不定形	異形	敲石	磨石	凹石	石皿	半円状	砥石	石冠	ヒスイ	石核	礫
26						●									
28		●													
33			●	●●											
40		●													
41							○								
43	●	●													
47	●	●	●●	●			●								
51						●									
52									○						
55				●		●			○						
60	●	●													
61	●											●			
62		●	●	●											
66													○		
67	●														
82	●	●													
86		○													
87								○							
90								○				●			
91	●	●	●												
92												○			
102		●	●											●	
104		●													
107						●									
108		○													
110												○			
124	●				●										
134		●													
135	●	●													
139				●●●●		●●									
144						○	○								
158		●													
161	●														
162						○				○					
166		○													
173	●	●						○							
177															
178		●													
251		●													
284						●									
286	●														
297							●								
298						●									
811	●														
812								●							
813	●			●											
817		●	○○○○ ○○○○ ○○												
820		●	●												
822	●	●													
823		●				●	●								
838						○									
928		●													
948		●													
951		●													●
953		●													●
960	●	●													

○は底面および底面直上出土、●は堆積土出土を表す。石器は出土点数を表している。



66図 土坑墓全体図

特別史跡三内丸山遺跡発掘調査報告書一覧（県教委発行分）

年 度	書 名	県埋蔵文化財報告書	内 容
昭和51	近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ) 三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書 —青森県総合運動公園建設関係発掘調査—	第33集	昭和51年度に調査した県総合運動公園西駐車場地区の調査報告
昭和53	近野遺跡発掘調査報告書(Ⅳ) —青森県総合運動公園建設関係発掘調査—	第47集	昭和52年度に調査した近野地区の調査報告
平成 5	三内丸山(2)遺跡Ⅱ —県営運動公園拡張事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—	第157集	平成 4 年度に調査した旧野球場建設予定地 3 塁側スタンド地区検出遺構
平成 5	三内丸山(2)遺跡Ⅲ —県営運動公園拡張事業に係る埋蔵文化財発掘調査概要Ⅰ—	第166集	平成 4 ～ 5 年度の調査概要報告
平成 6	三内丸山(2)遺跡Ⅳ	第185集	平成 6 年度に調査した旧サッカー場建設予定地の試掘調査報告
平成 7	三内丸山遺跡Ⅴ —第 1 次～ 4 次調査報告書—	第204集	平成 7 年度に実施した第 1 次～ 4 次調査の報告
平成 7	三内丸山遺跡Ⅵ	第205集	平成 4 ～ 7 年度の調査概要報告
平成 8	近野遺跡Ⅴ —県営運動公園拡張整備事業に伴う遺跡試掘調査報告Ⅰ—	第216集	平成 6 ～ 7 年度に調査した近野地区の試掘調査報告
平成 8	三内丸山遺跡Ⅶ —第 5 次～ 7 次調査概要報告書—	第229集	平成 8 年度に実施した第 5 次～ 7 次調査の概要報告
平成 8	三内丸山遺跡Ⅷ —第 6 鉄塔地区調査報告書 1 —	第230集	平成 4 ～ 5 年度に調査した第 6 鉄塔地区の検出遺構及び第Ⅲ～Ⅴc層の調査報告
平成 9	三内丸山遺跡Ⅸ —第 6 鉄塔地区調査報告書 2 —	第249集	平成 4 ～ 5 年度に調査した第 6 鉄塔地区の第Ⅵa・Ⅵb層及び自然科学分野の調査報告
平成 9	三内丸山遺跡Ⅹ —旧野球場建設予定地発掘調査報告書 2 —	第250集	平成 4 ～ 6 年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の竪穴住居跡に関する調査報告
平成 9	三内丸山遺跡Ⅺ —第 5 次～ 7 次調査報告書—	第251集	平成 8 年度に実施した第 5 次～ 7 次調査の報告
平成 9	三内丸山遺跡Ⅻ —第 8 次～ 10 次調査概要報告書—	第252集	平成 9 年度に実施した第 8 次～ 10 次調査の概要報告
平成10	三内丸山遺跡Ⅼ —第 11 次～ 13 次調査概要報告書—	第265集	平成 10 年度に実施した第 11 次～ 13 次調査の概要報告
平成 11	三内丸山遺跡Ⅽ —第 14 次～ 16 次調査概要報告書—	第282集	平成 11 年度に実施した第 14 次～ 16 次調査の概要報告
平成 11	三内丸山遺跡Ⅾ —旧野球場建設予定地発掘調査報告書 3 —	第283集	平成 4 ～ 6 年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の竪穴住居跡に関する調査報告
平成 12	三内丸山遺跡Ⅿ —旧野球場建設予定地発掘調査報告書 4 —	第288集	平成 4 ～ 6 年度に調査した旧野球場建設予定地の検出遺構のうち縄文時代の竪穴住居跡に関する調査報告
平成 12	三内丸山遺跡ⅰ —第 6 鉄塔地区調査報告書 3 —	第289集	平成 4 ～ 5 年度に調査した第 6 鉄塔地区の遺構外遺物に関する調査報告
平成 12	三内丸山遺跡ⅱ —第 17 次～ 19 次調査概要報告書—	第309集	平成 12 年度に実施した第 17 次～ 19 次調査の概要報告
平成 13	三内丸山遺跡ⅲ —第 20 次～ 22 次調査概要報告書—	第337集	平成 13 年度に実施した第 20 次～ 22 次調査の概要報告
平成 13	三内丸山遺跡ⅳ —第 8 ・ 9 次発掘調査報告書—	第338集	平成 9 年度に実施した第 8 ・ 9 次調査の報告

写 真 图 版



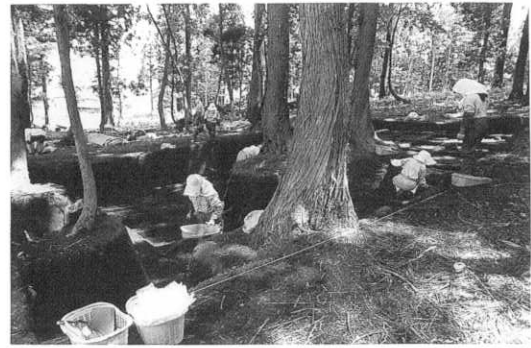
調査区全景（西から）



調査区全景（東から）



作業風景



作業風景



1 トレンチ



2 トレンチ



3 トレンチ

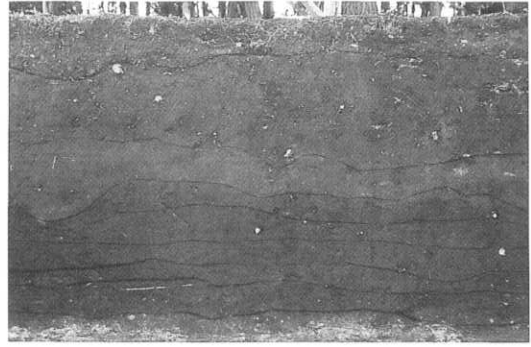


4 トレンチ

写真1 第8次調査(1)



5 トレンチ



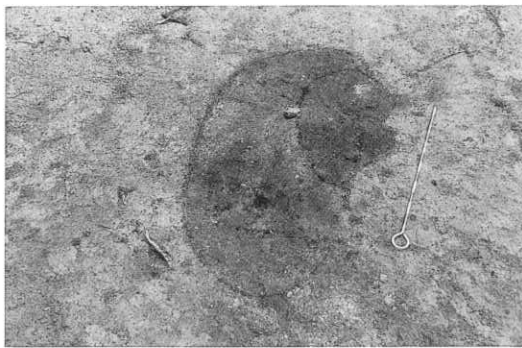
4 トレンチ西壁セクション



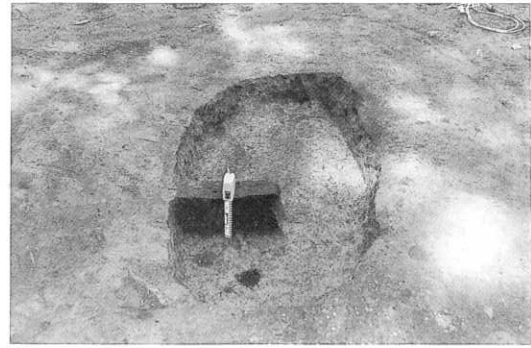
第7次調査区土坑墓確認状況



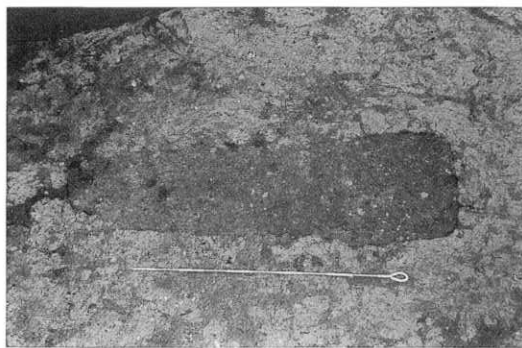
第944号土坑完掘



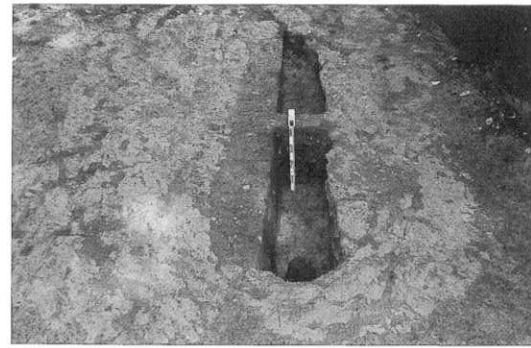
第948号土坑確認状況



第948号土坑セクション



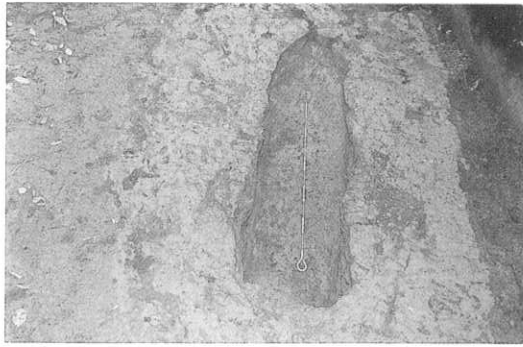
第951号土坑確認状況



第951号土坑セクション

写真2 第8次調査(2)





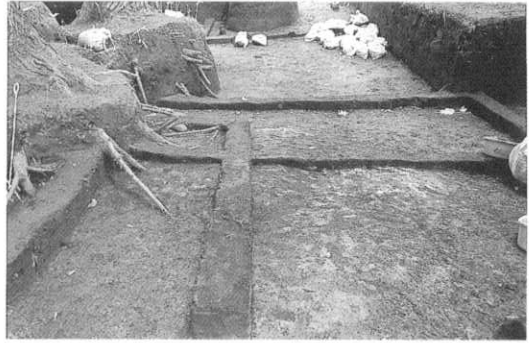
第951号土坑完掘



第953号土坑環状配石確認状況



第953号土坑マウンド確認状況



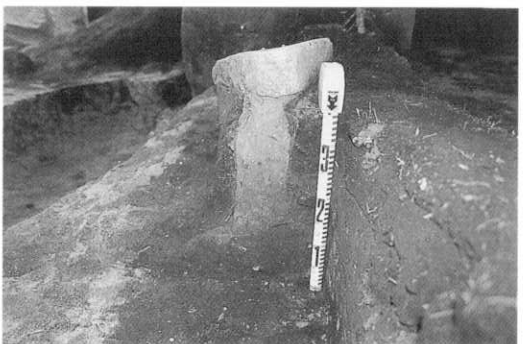
第953号土坑マウンドセクション



第956号土坑セクション



土坑墓列 (958~60・974土)

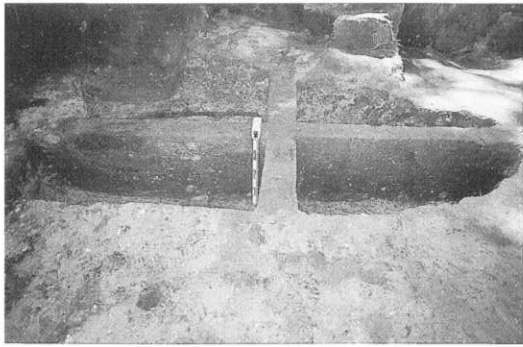


第959号土坑礫検出状況



第959号土坑完掘

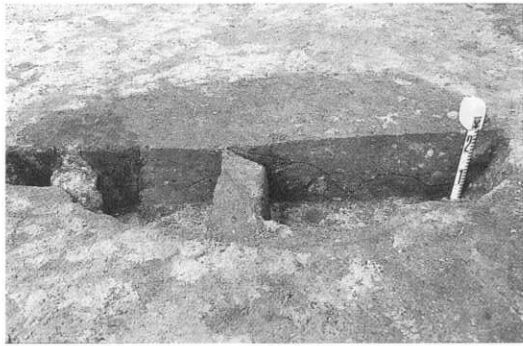
写真3 第8次調査(3)



第960・974号土坑南北ベルトセクション



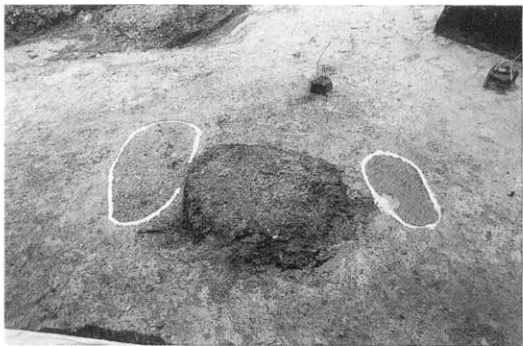
第960・974号土坑完掘



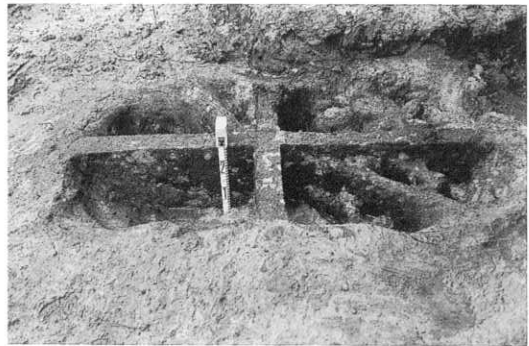
第963号土坑南北ベルトセクション



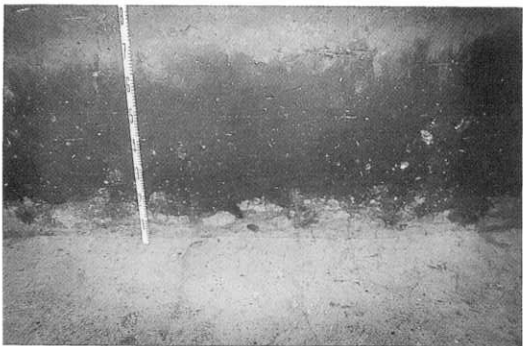
第963号土坑完掘



第972・973号土坑確認



第972号土坑セクション

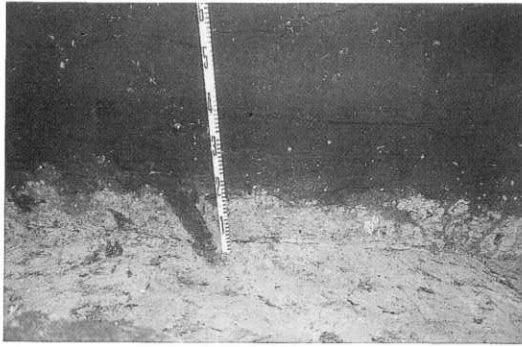


1 トレンチ 東壁道路跡セクション



道路跡遺物出土状況

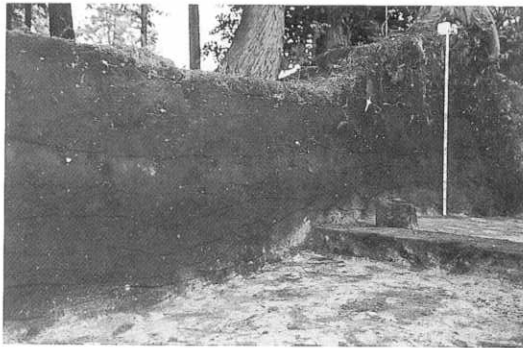
写真4 第8次調査(4)



3 トレンチ 道路跡セクション



3 トレンチ 道路跡セクション



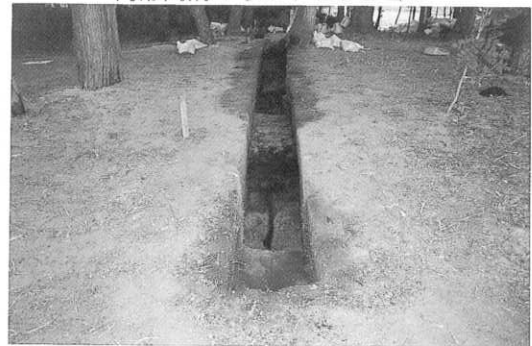
4 トレンチ 道路跡セクション



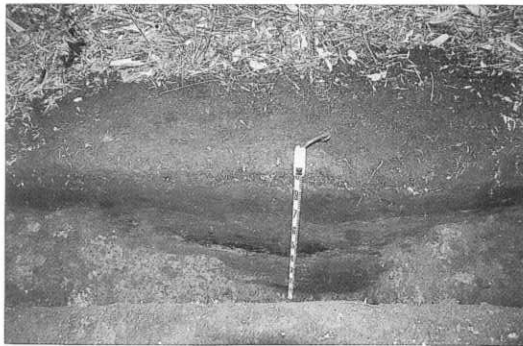
円形周溝マウンドセクション



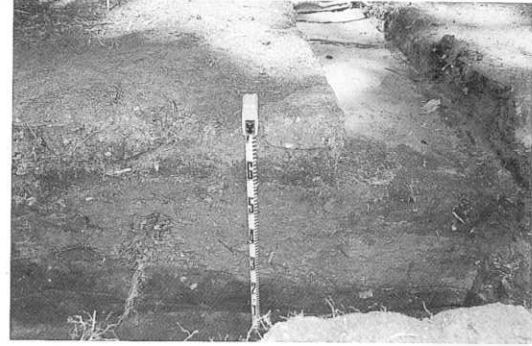
円形周溝マウンド確認状況



円形周溝マウンドセクション

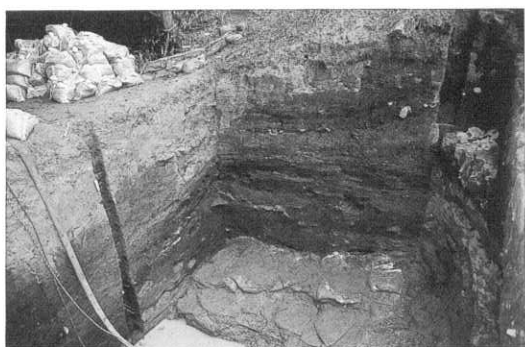


円形周溝セクション

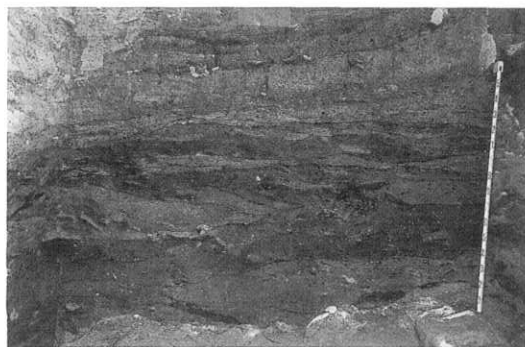


円形周溝マウンドセクション

写真5 第8次調査(5)



調査状況



東壁土層断面



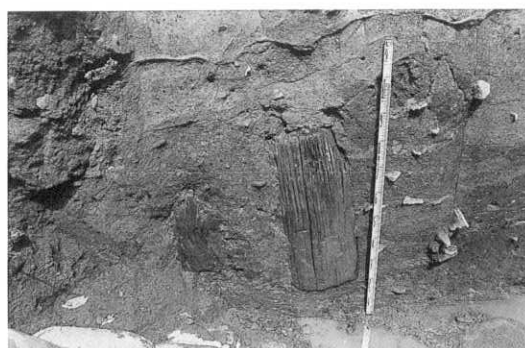
第Ⅱ層遺物出土状況



掘立柱建物跡確認状況

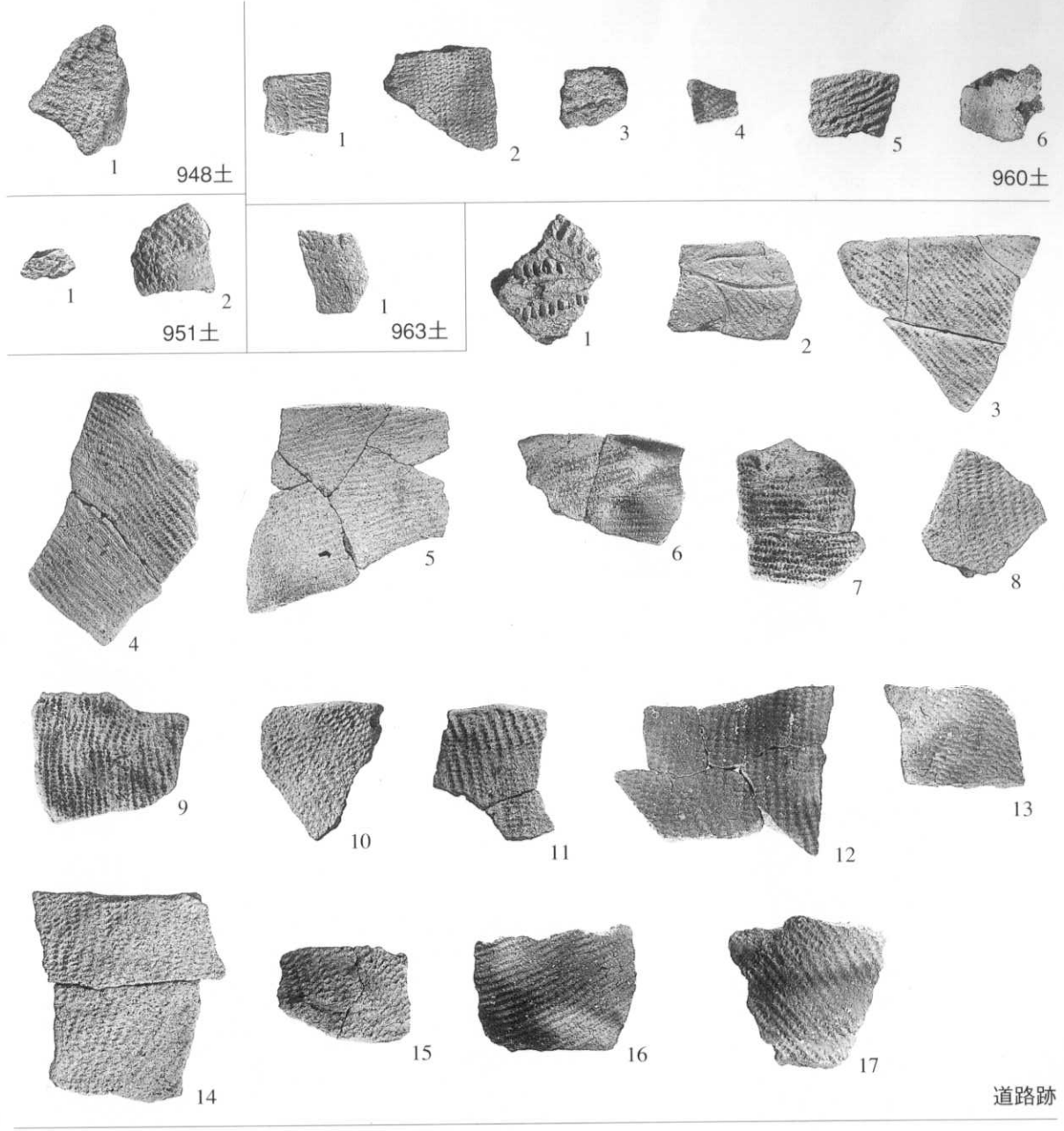


柱穴セクション

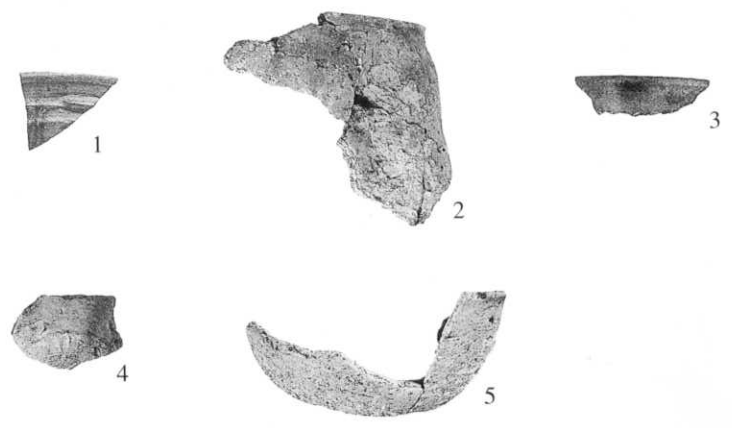


木柱検出状況

写真6 第9次調査

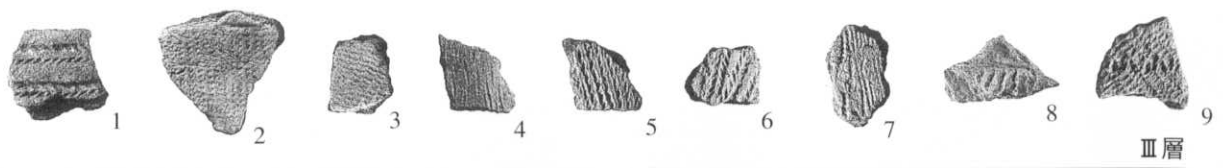


道路跡

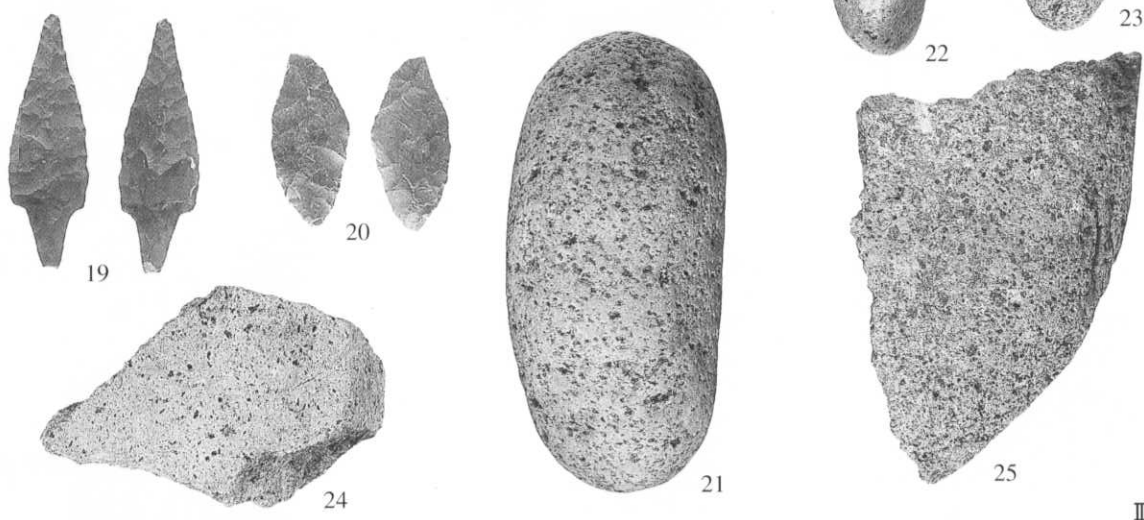
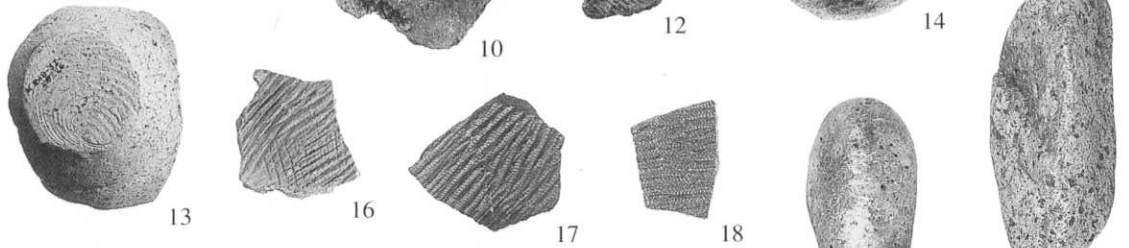
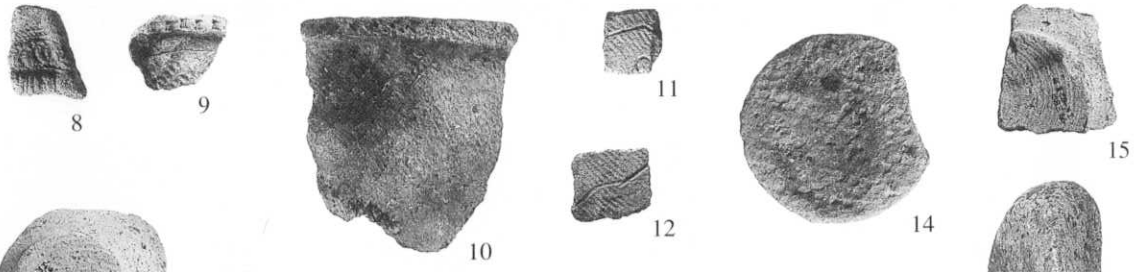


円形周溝

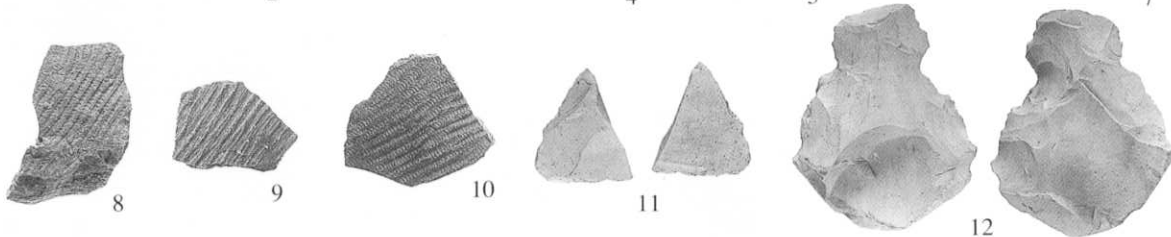
写真7 第8次調査区遺構内出土遺物



III層



II層



I層

写真 8 第 8 次調査区遺構外出土遺物

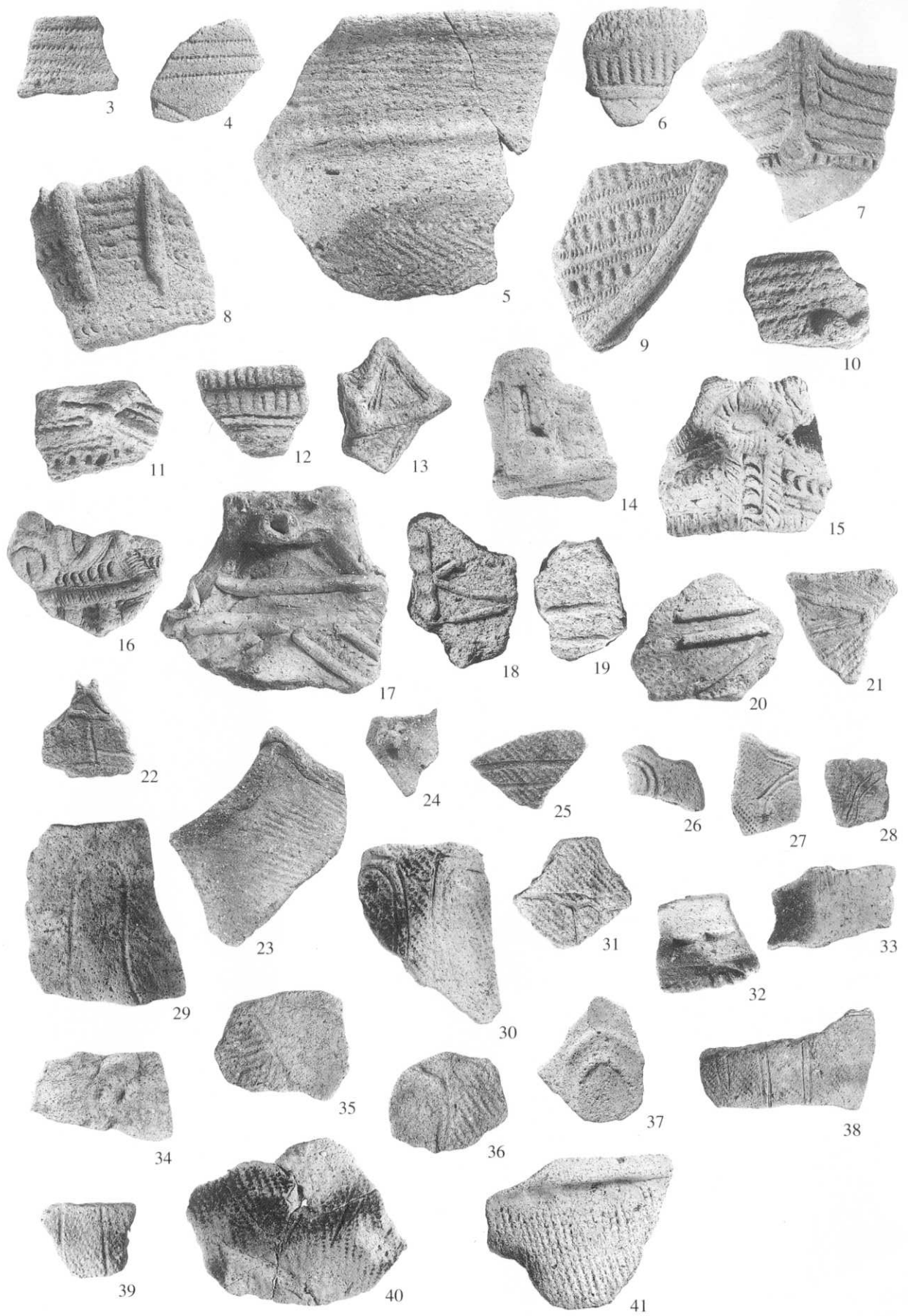


写真 9 第三層出土遺物(1)

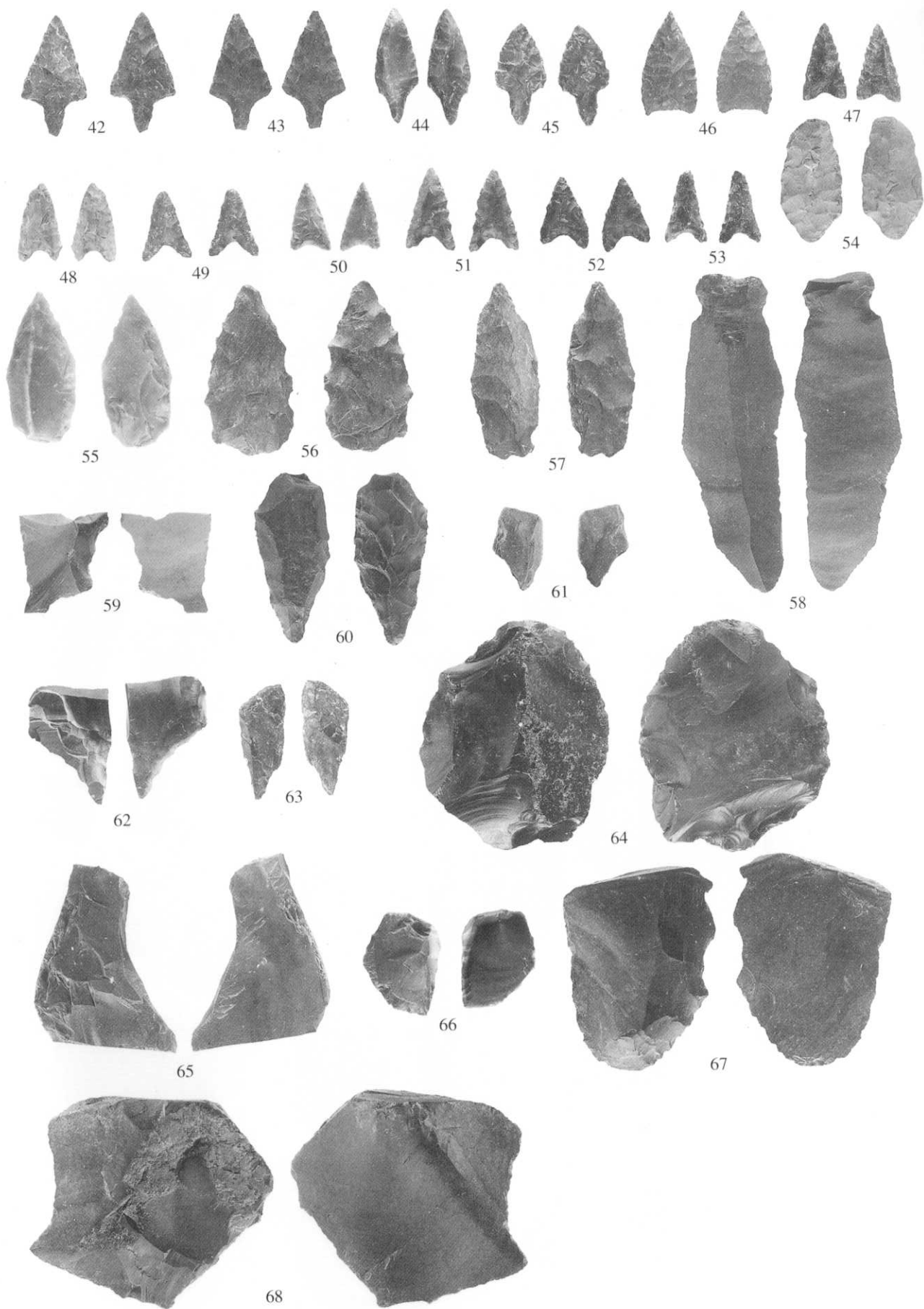


写真10 第三層出土遺物(2)



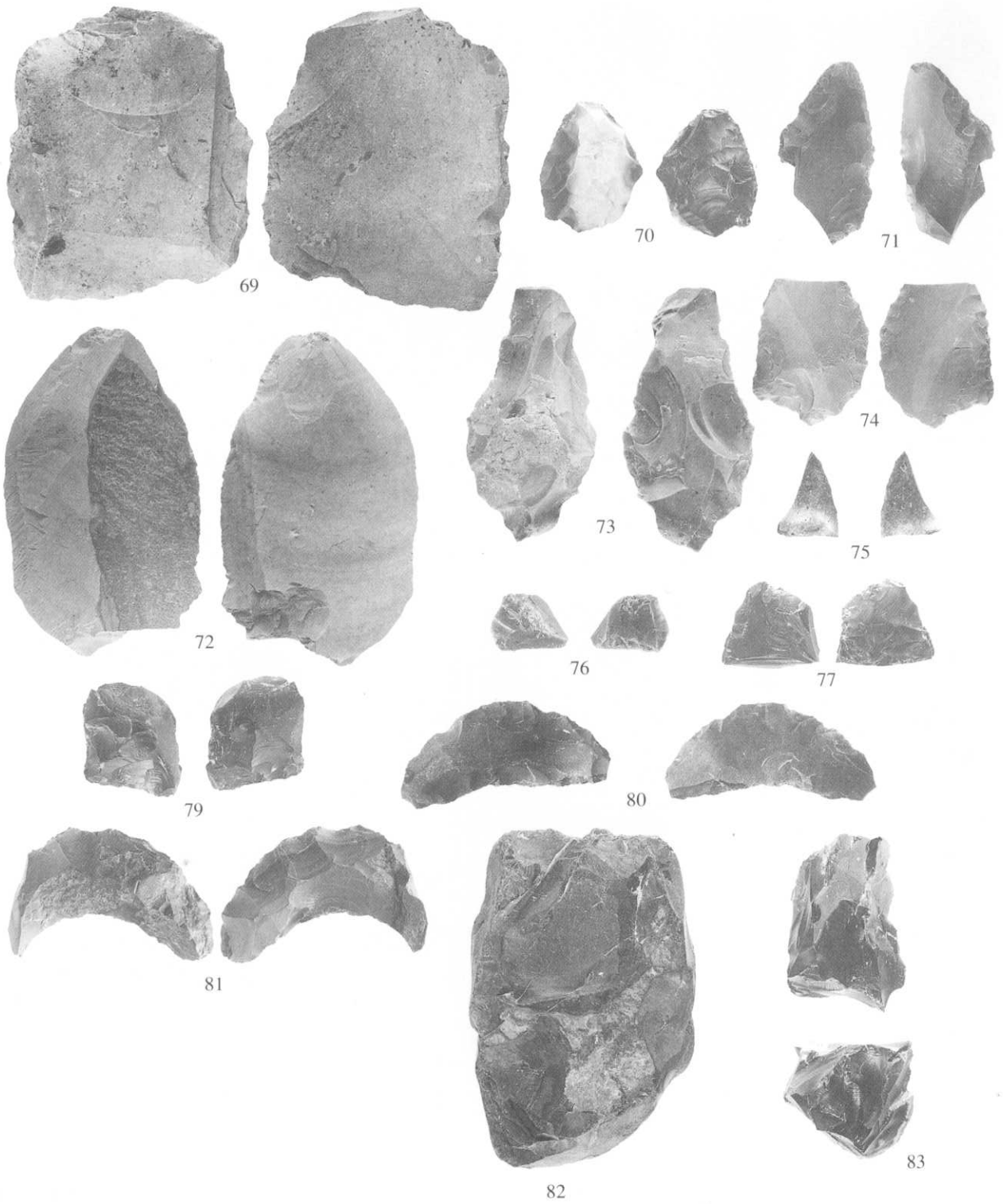
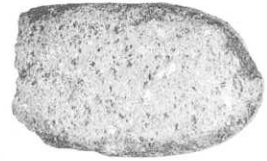
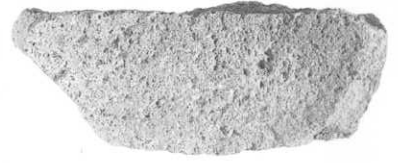


写真11 第三層出土遺物(3)



84

85

86

88

89

90

91



92

93

写真12 第三層出土遺物(4)

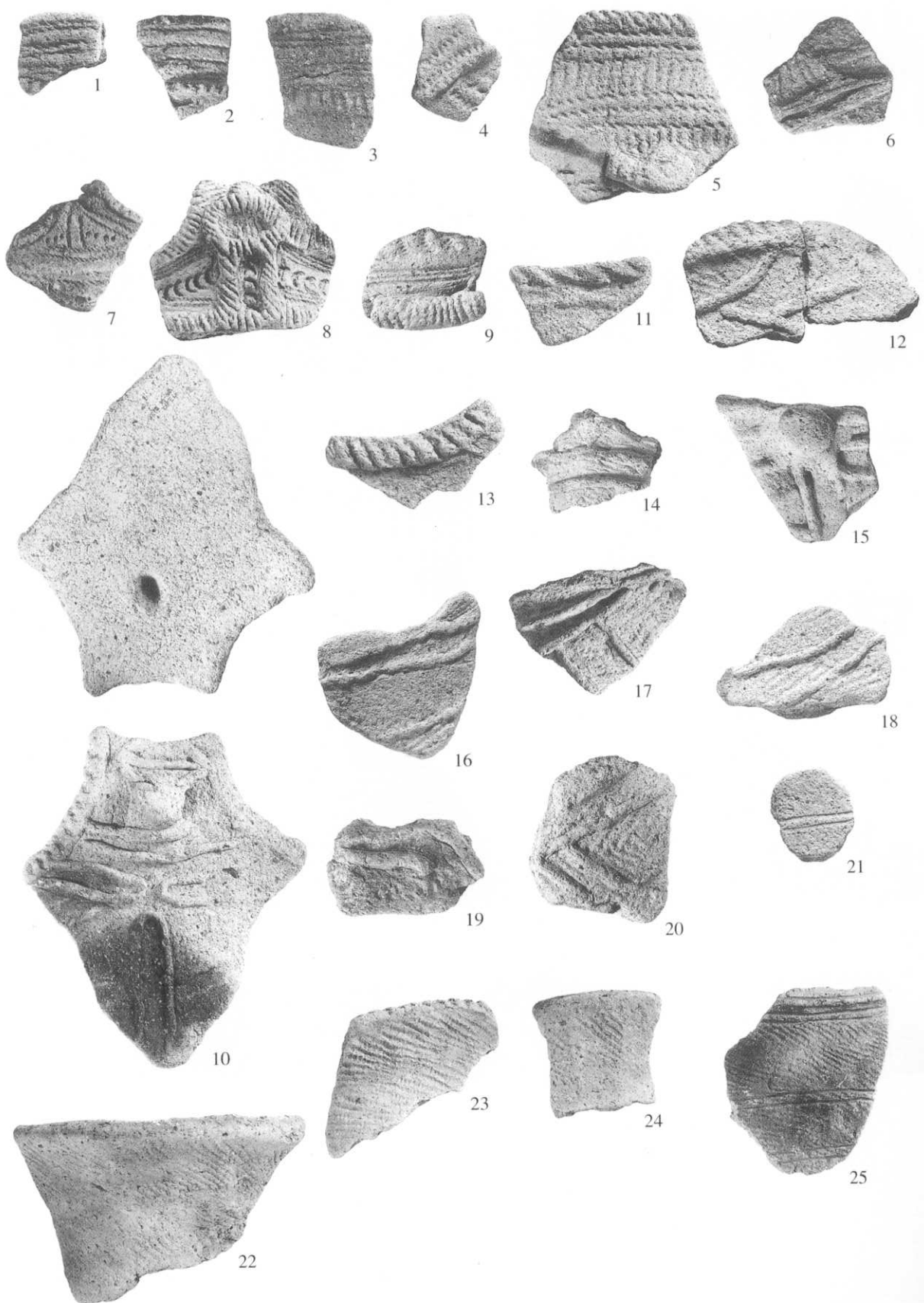


写真13 第Ⅲ-3層出土遺物(1)

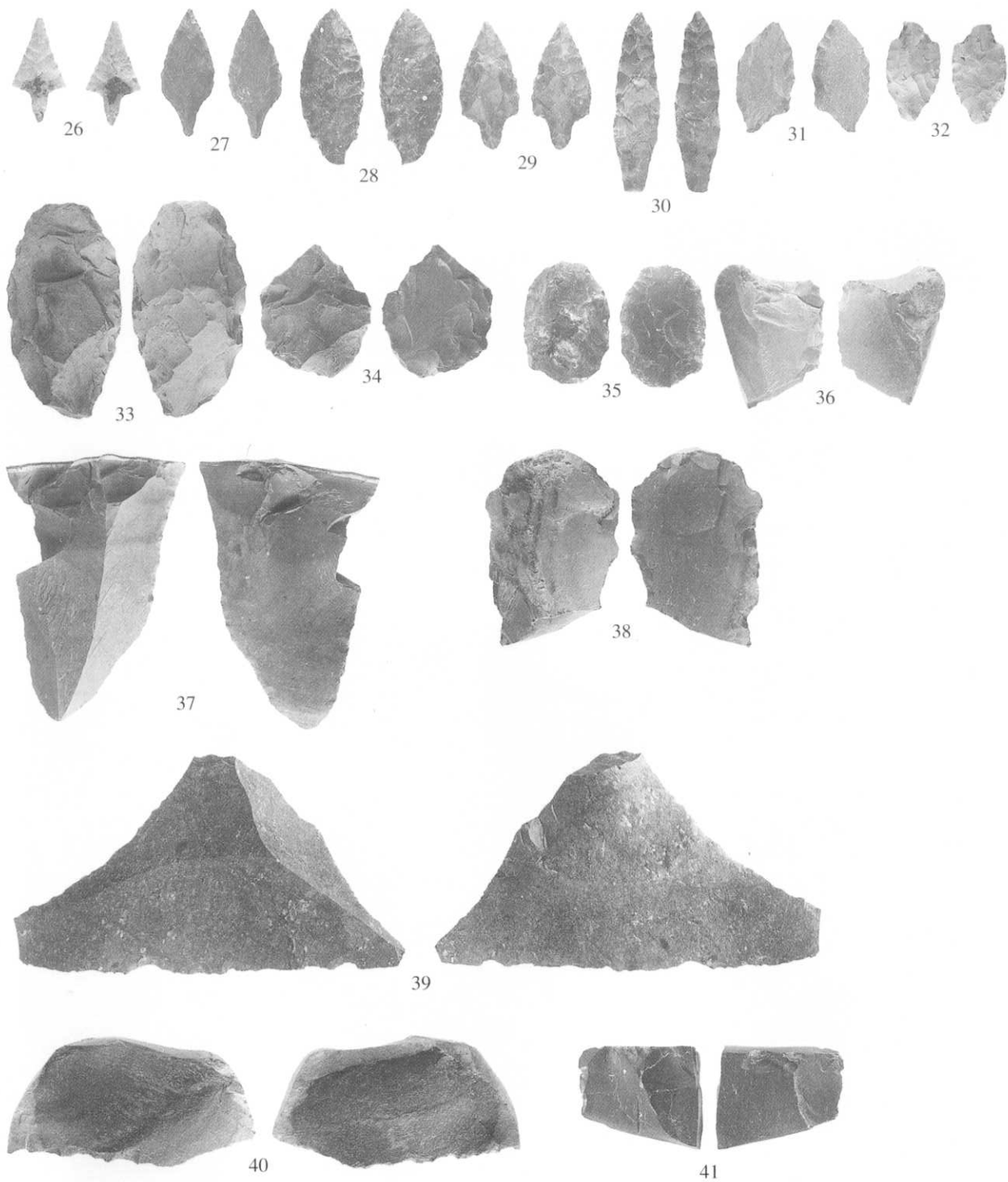


写真14 第三—3層出土遺物(2)

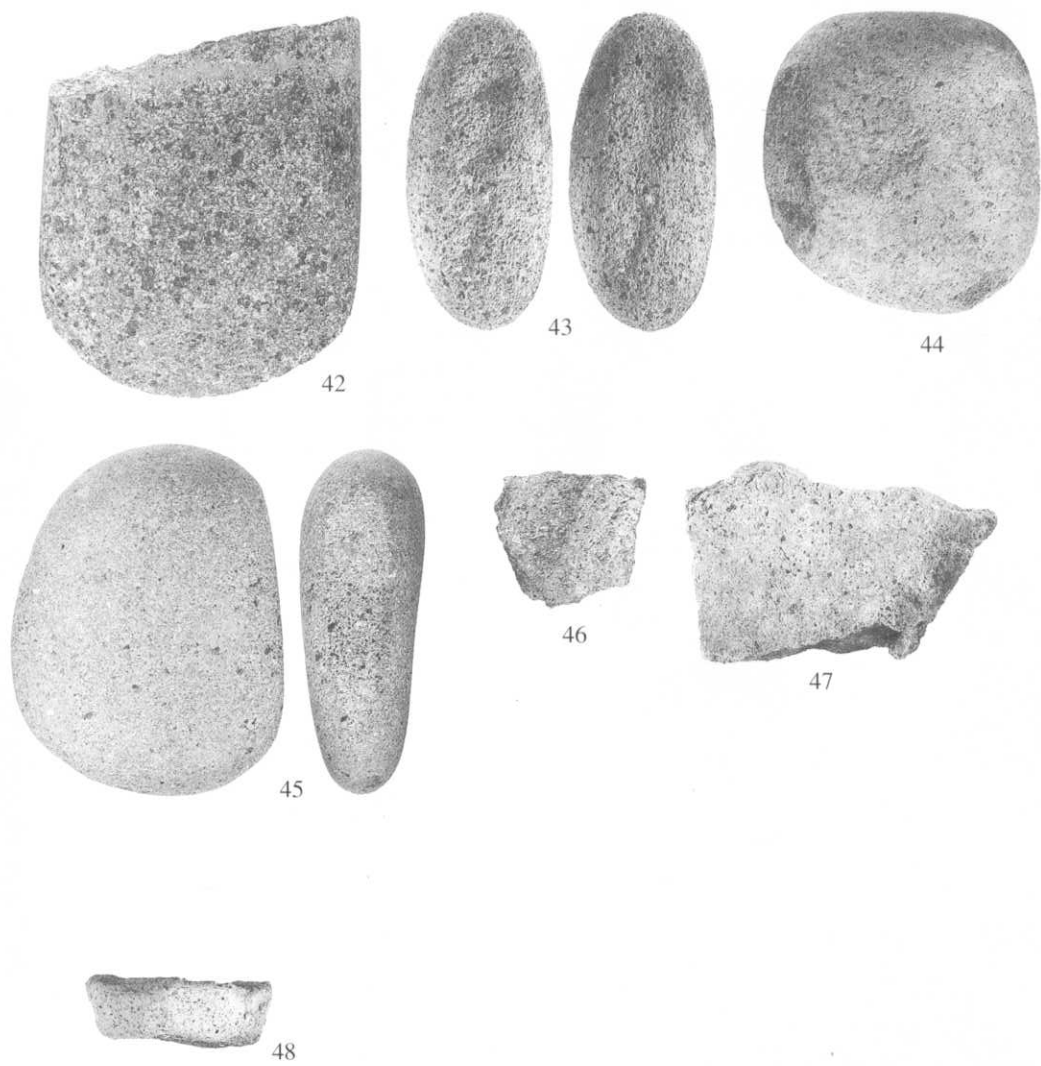


写真15 第三層出土遺物(3)

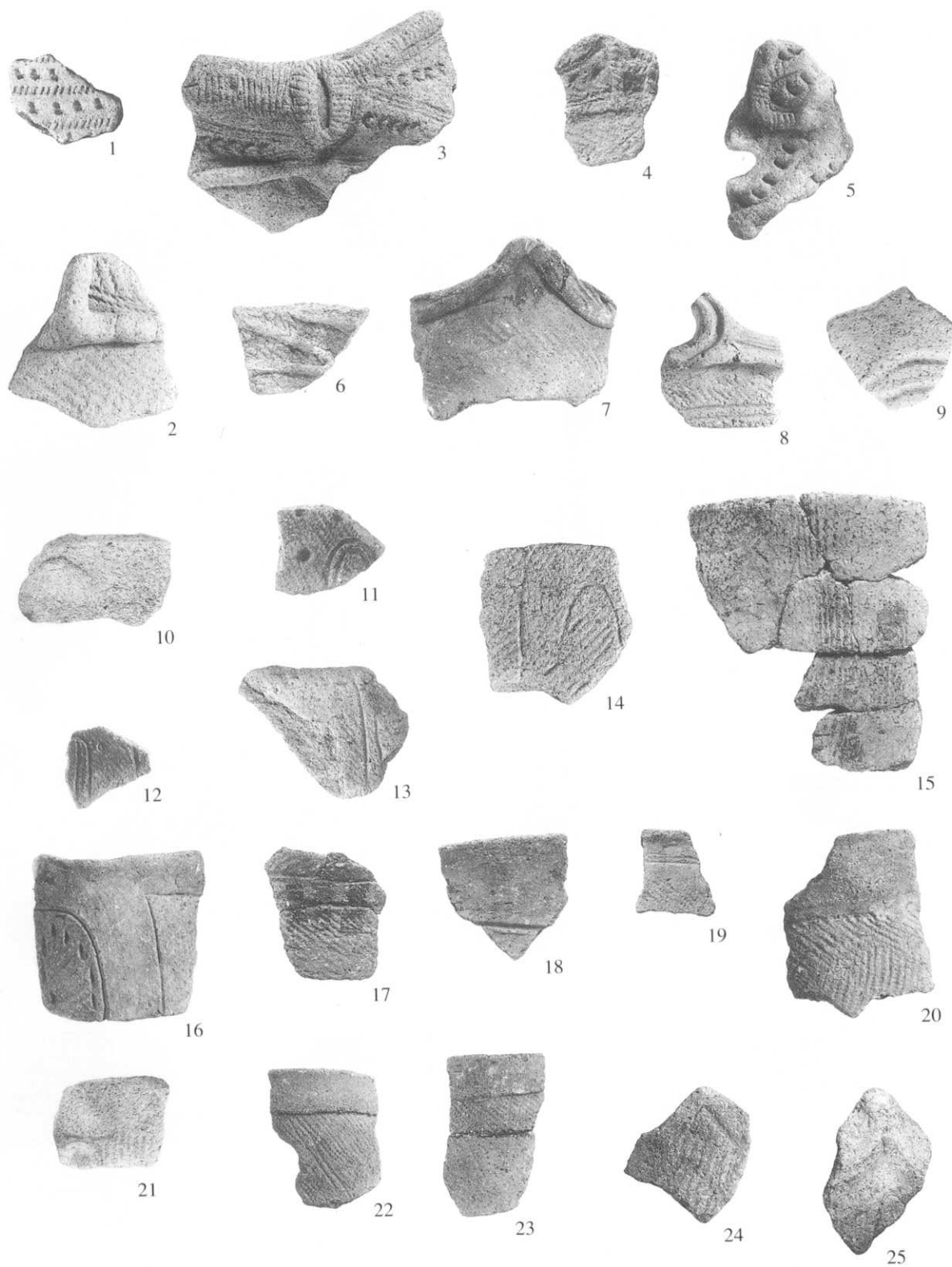


写真16 第Ⅱ層出土遺物(1)

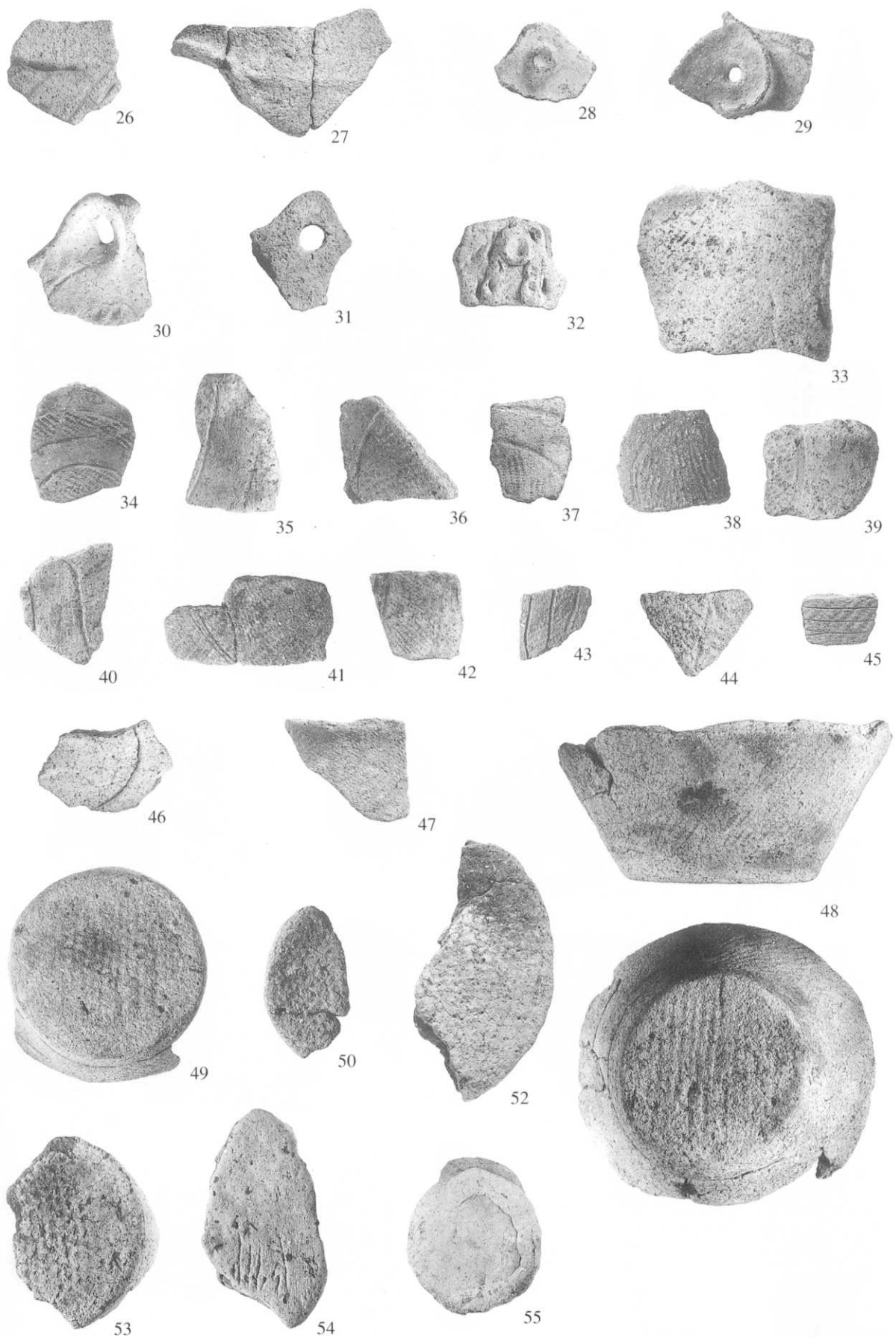


写真17 第Ⅱ層出土遺物(2)

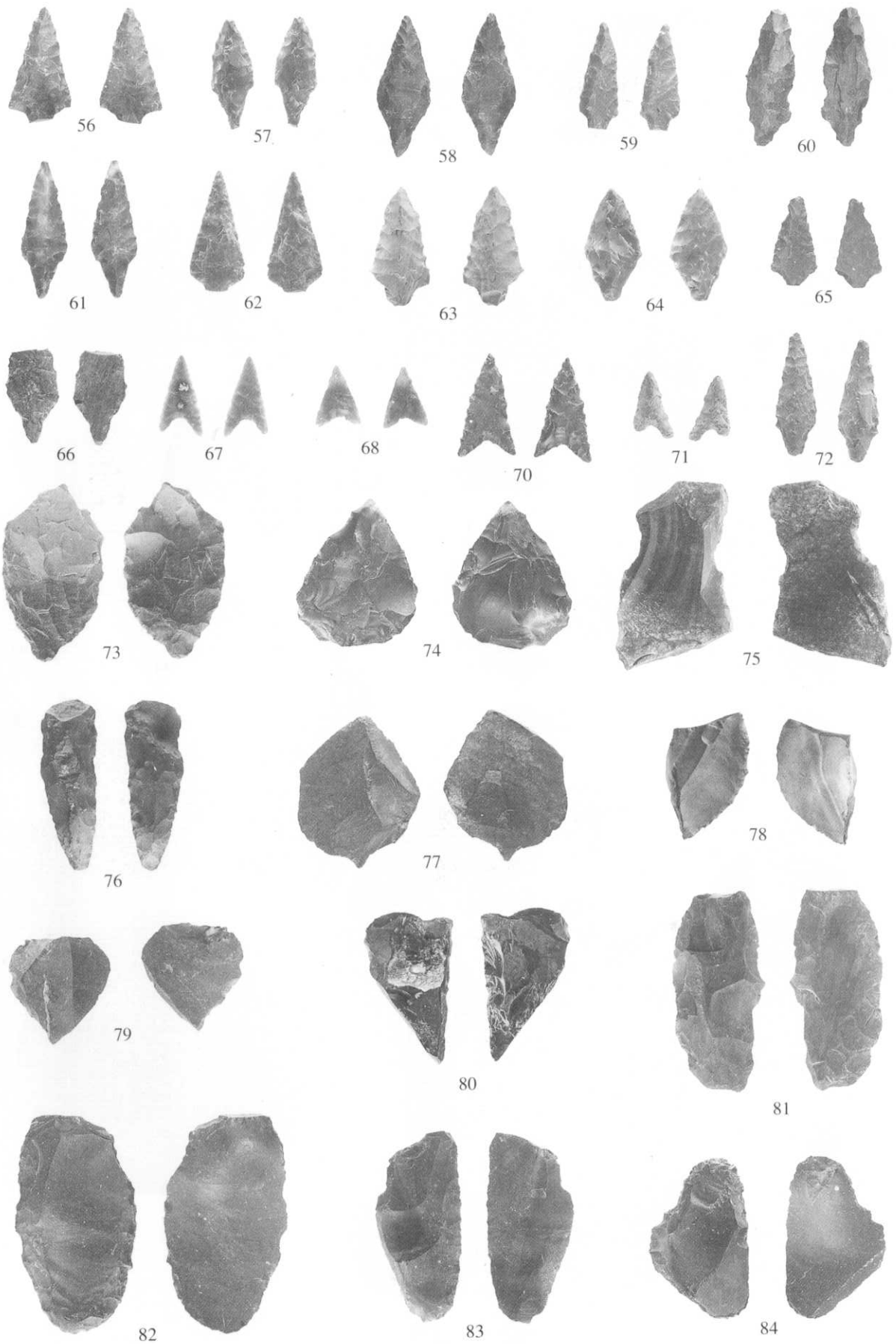


写真18 第Ⅱ層出土遺物(3)



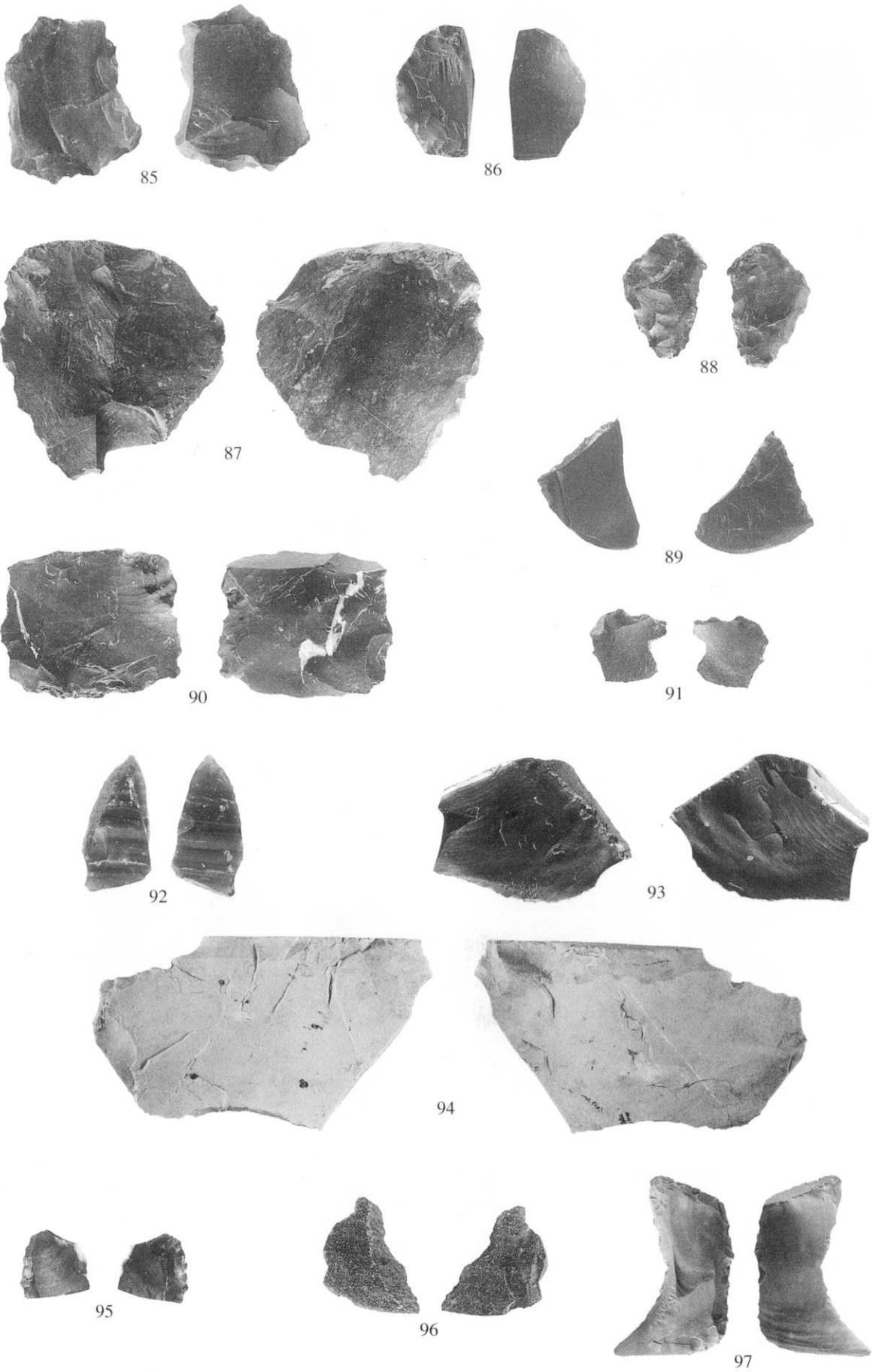


写真19 第Ⅱ層出土遺物(4)

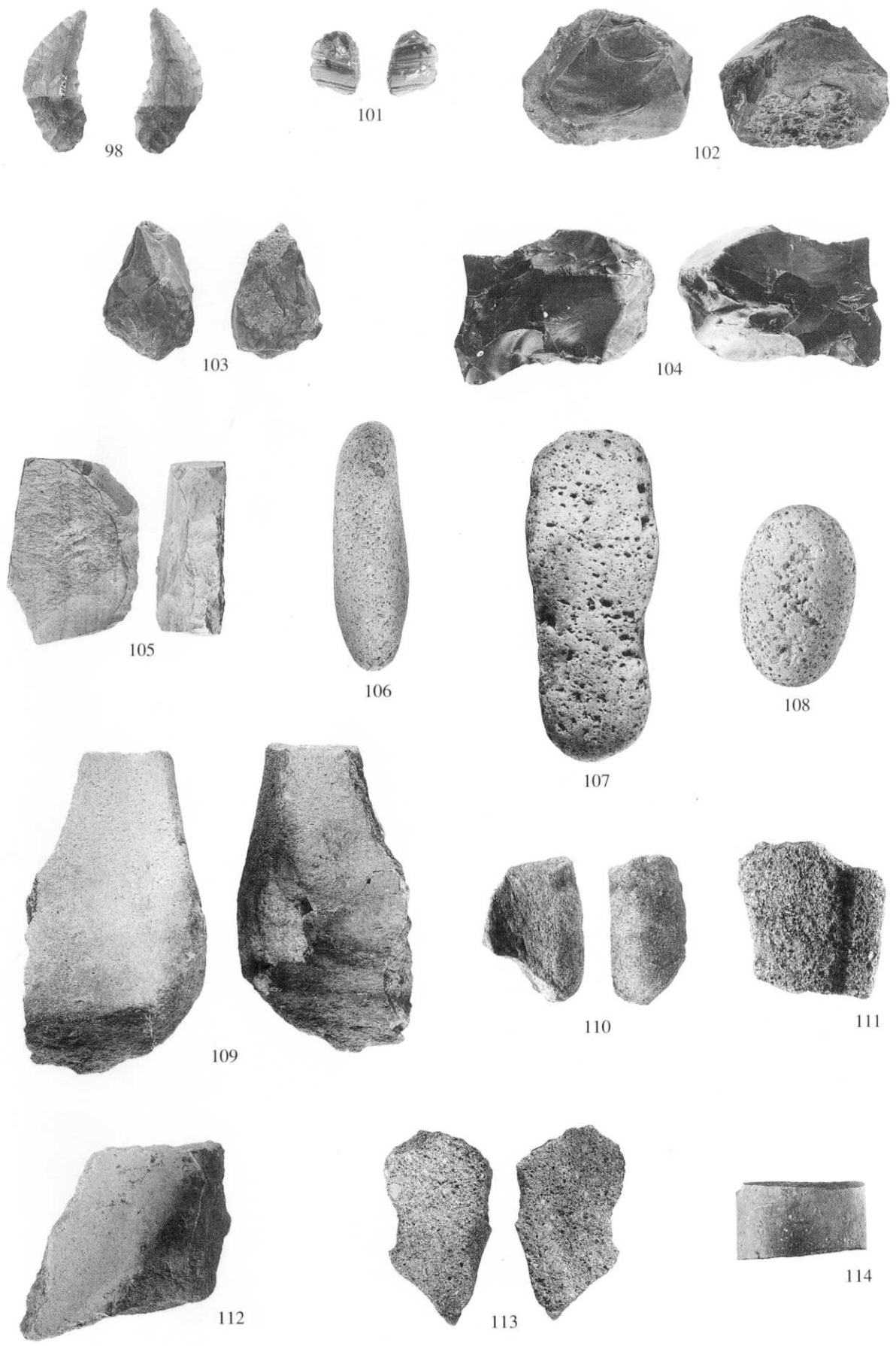
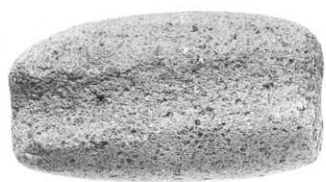


写真20 第Ⅱ層出土遺物(5)



116



115



117



118



119



120

写真21 第Ⅱ層出土遺物(6)

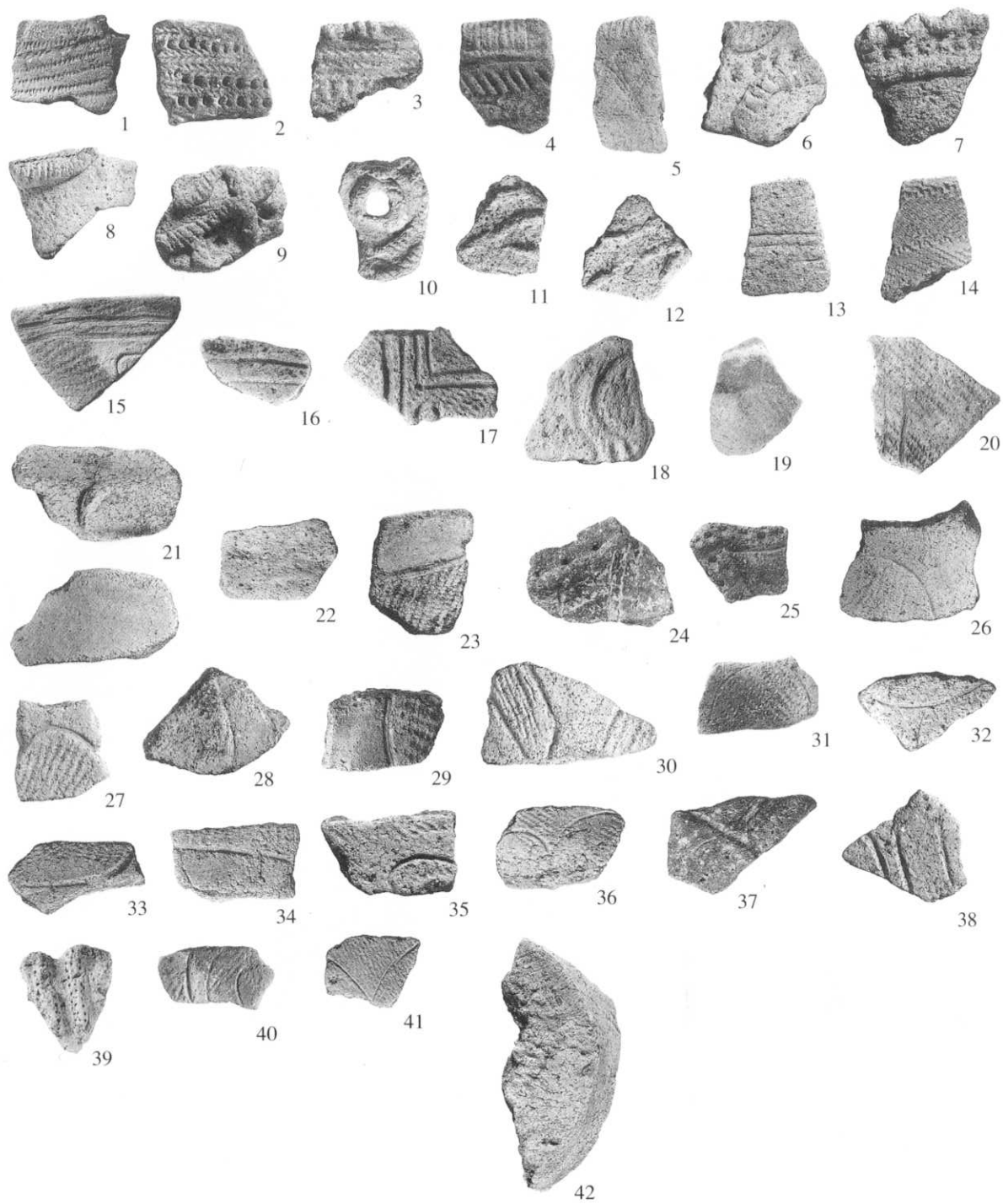


写真22 第I層出土遺物(1)

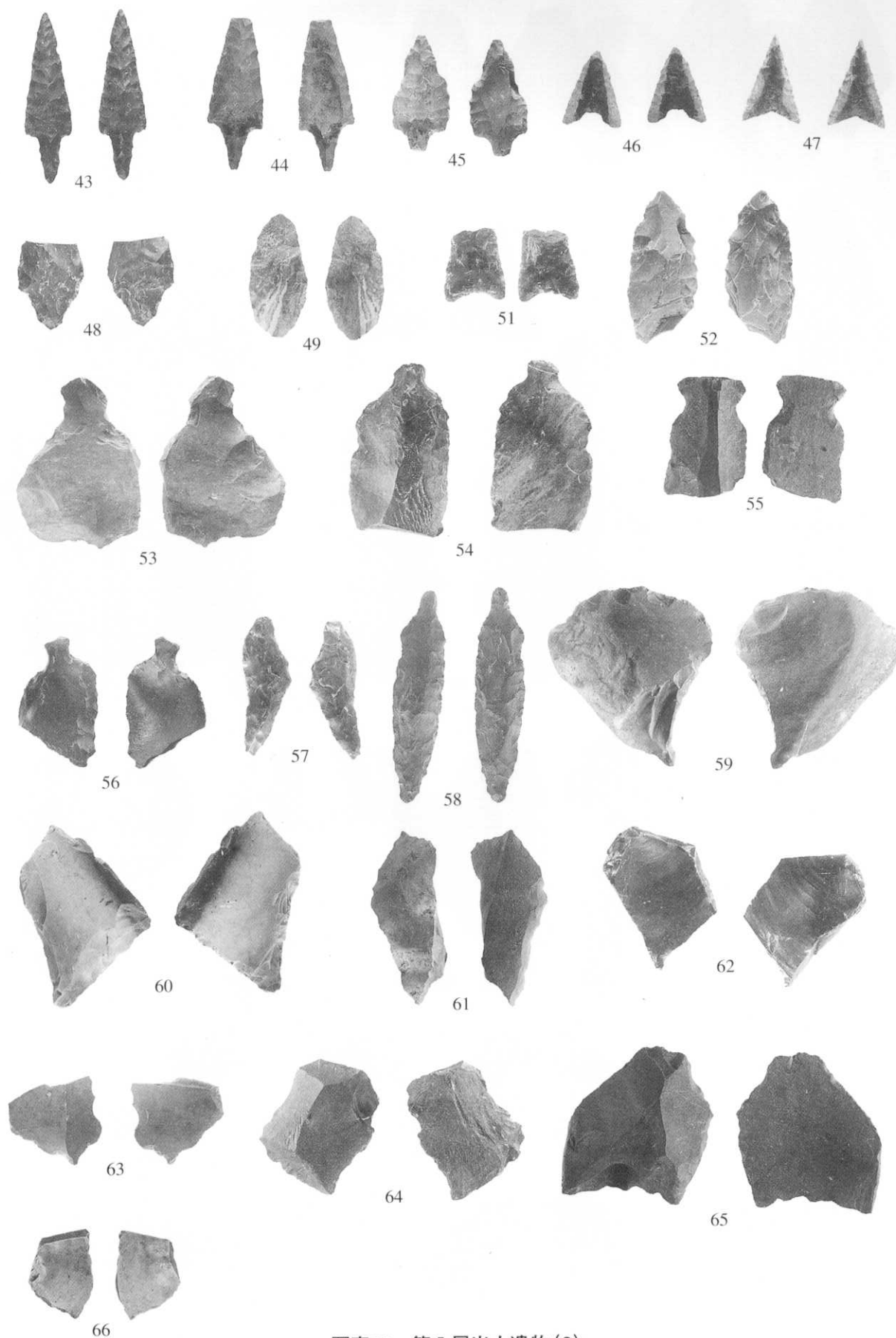


写真23 第I層出土遺物(2)

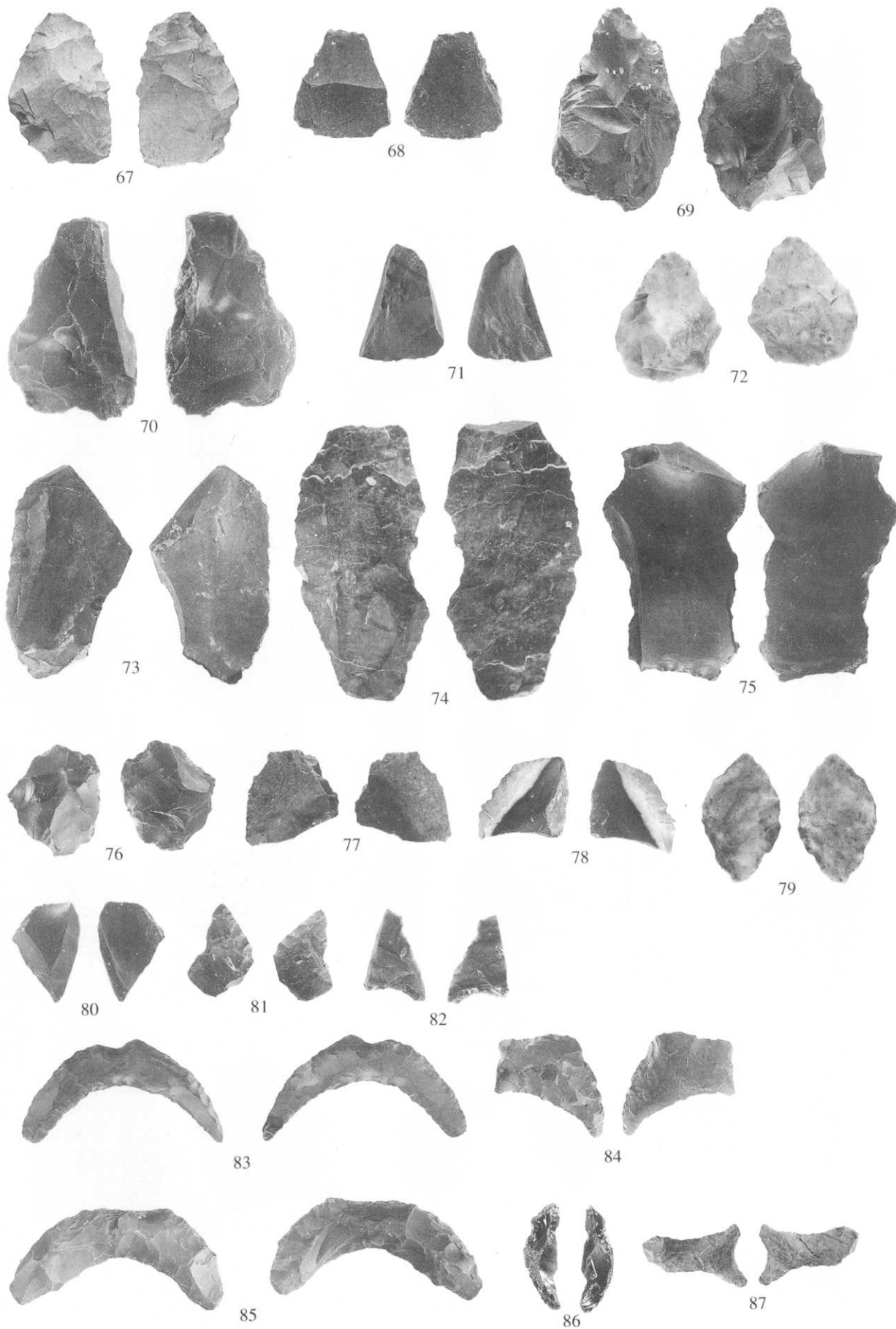


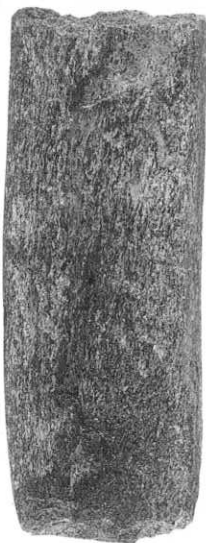
写真24 第I層出土遺物(3)



91



92



93



94



95



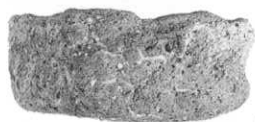
96



97



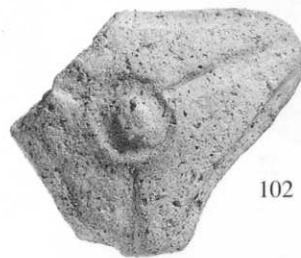
98



100



101



102

写真25 第I層出土遺物(4)

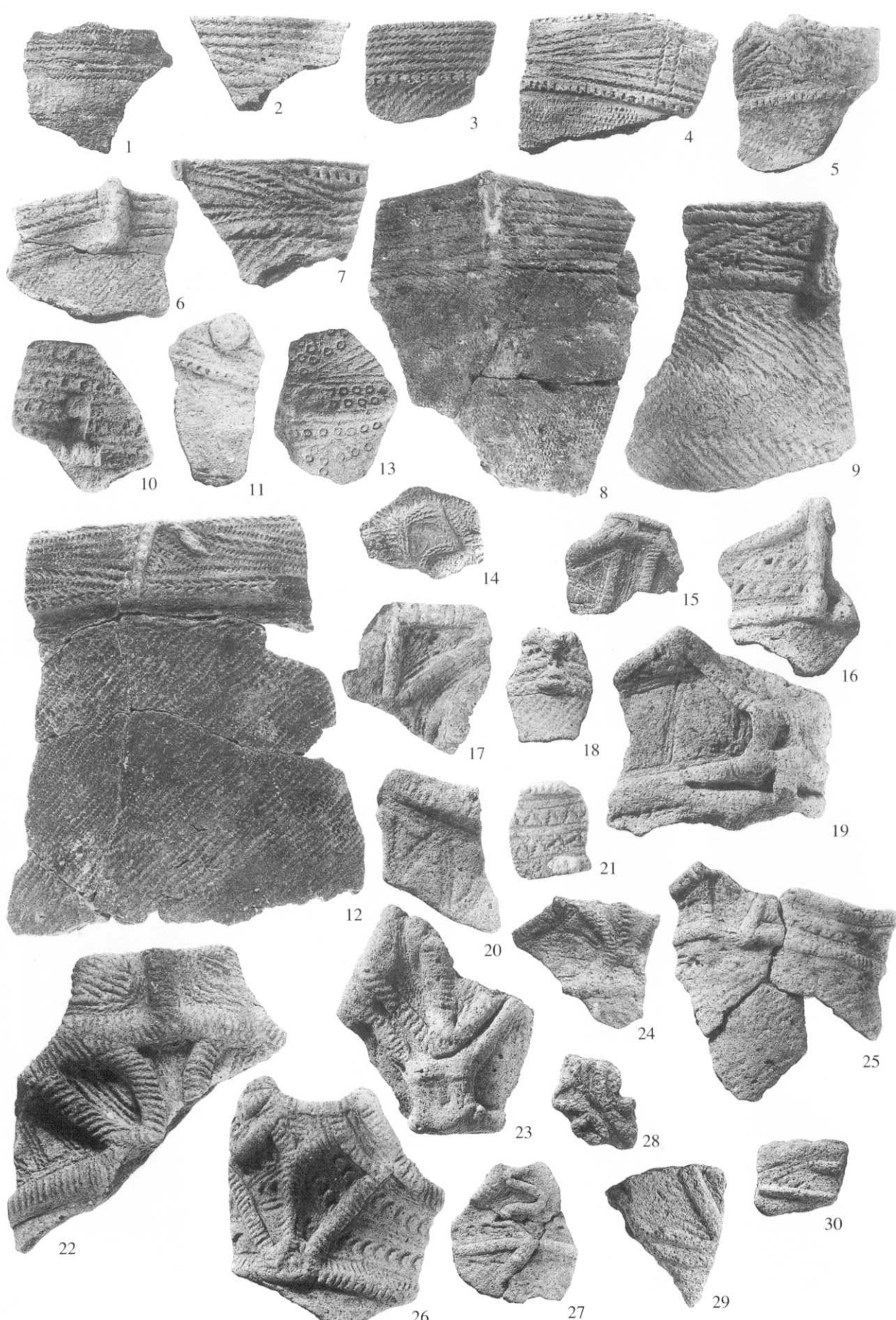


写真26 崩落土出土遺物(1)



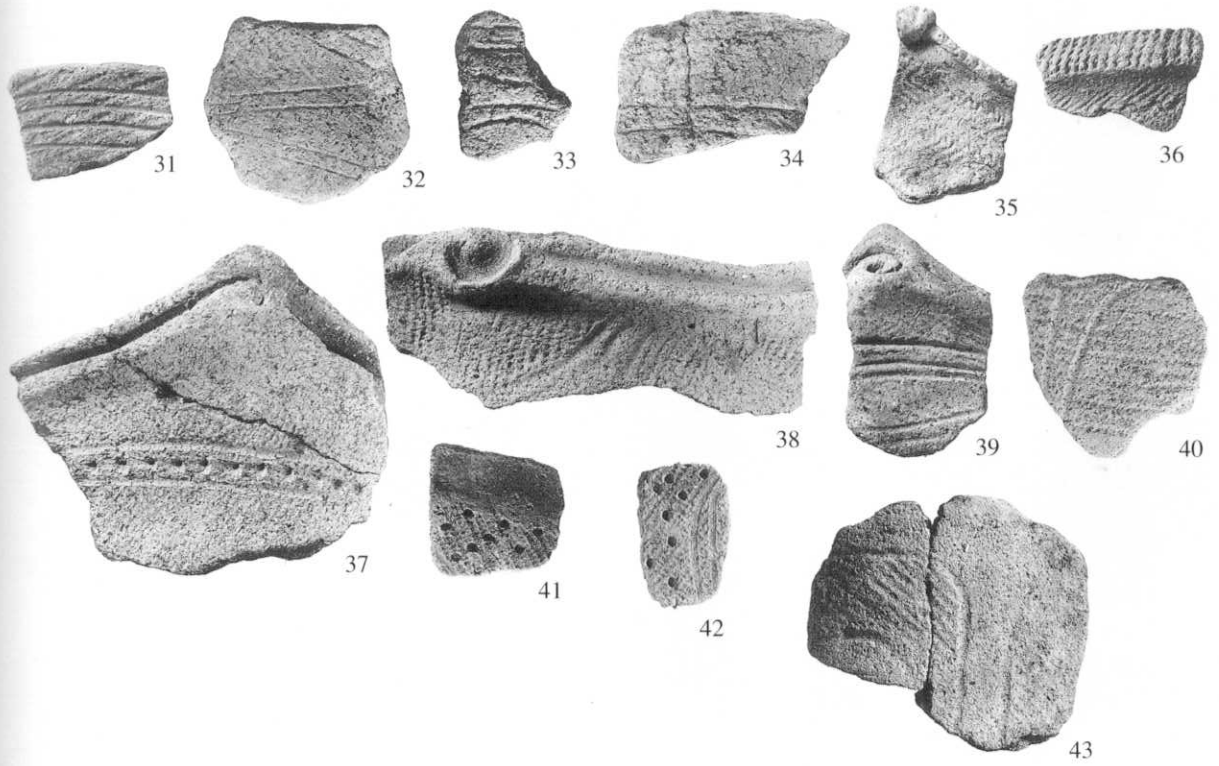


写真27 崩落土出土遺物(2)

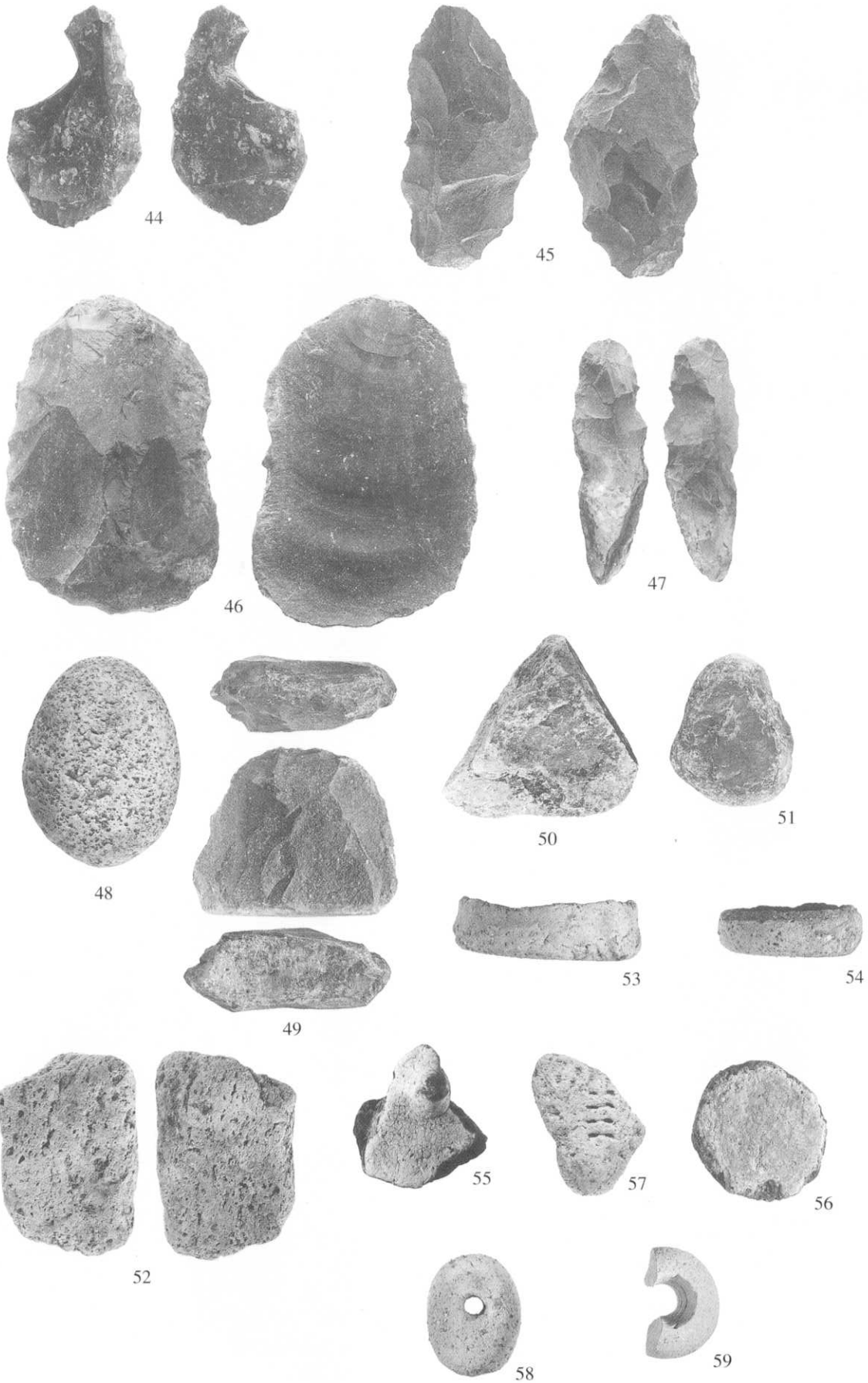
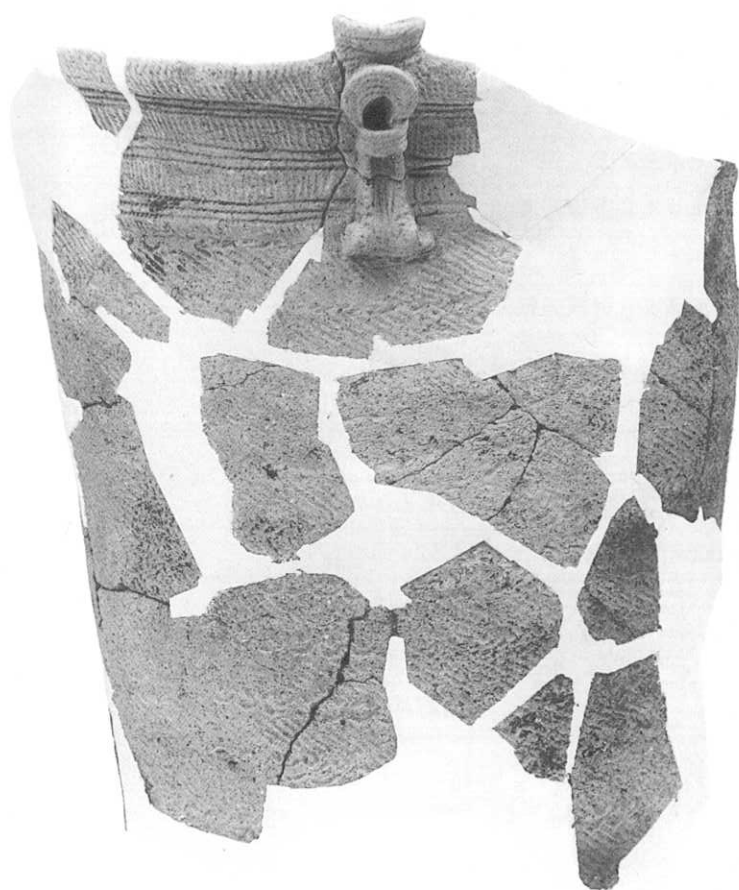


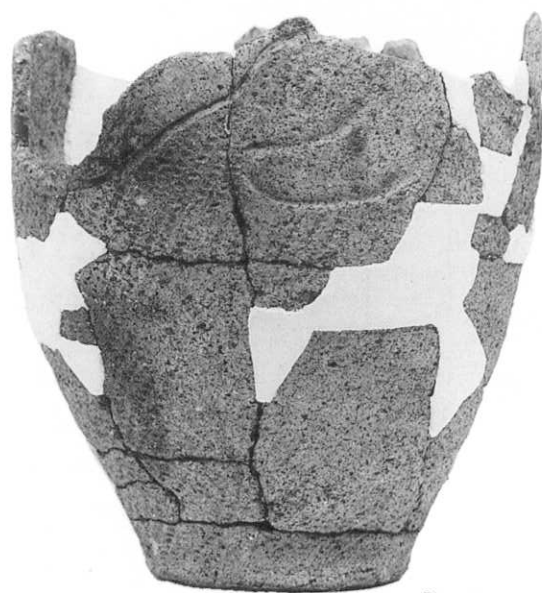
写真28 出土層不詳遺物



Ⅲ-1



Ⅲ-2



Ⅱ-51

写真29 遺物包含層出土土器

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	さんないまるやまいせき
書名	三内丸山遺跡XX
副書名	第8次・9次調査報告書
巻字	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第338集
編著者名	岡田康博・中村美杉・斎藤岳・小笠原雅行
編集機関	青森県教育庁文化財保護課
所在地	青森市新町2丁目3番1号 TEL017-734-9924
発行年月日	西暦2002年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さんないまるやまいせき	あおもりけんあおもりし			40°	140°	1997.5.26	648m <sup>2</sup>	集落規模・変遷解明のための学術調査
三内丸山遺跡	おおあざさんないあざまるやま	02201	01021	48′	42′	～		
	青森県青森市大字三内字丸山			40″	20″	1997.9.10		

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三内丸山遺跡	集落跡	縄文時代			縄文時代前・中期の巨大集落跡2地点（第8・9次）の調査
第8次調査		縄文時代 平安時代	土坑 23基 道路跡 1条 円形周溝 1基	縄文土器（中期） 石器 土師器（平安時代） 須恵器（平安時代）	縄文時代土坑墓列の広がりを確認（西端～東端は420m以上） 円形周溝とマウンド確認
第9次調査			掘立柱建物跡 4棟 柱穴 14基 焼土 1基 遺物包含層 1	縄文土器 石器 土・石製品	掘立柱建物跡の確認 木柱の検出

---

青森県埋蔵文化財調査報告書第338集

## 三内丸山遺跡ⅩⅩ

—第8次・9次調査報告書—

発行日 平成14年3月29日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県教育庁文化財保護課  
〒030-0801 青森市新町2丁目3-1  
電話 017-734-9924

印刷所 東北印刷工業株式会社  
〒030-0902 青森市合浦1丁目2-12

---